
カウントダウン

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カウントダウン

【Nコード】

N0138B

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

黒の組織を追うコナン達。そしてそこから辿り着く「あの方」の正体。真実を探し求めるコナンと最も望まれない真実を用意した平次の行く末は。作者なりの「名探偵コナン」にあるいくつかの伏線の回収と妄想。

序章

「そう……演技は完璧だった。あの子の、いや全ての者の前で」

そしてそれは私以外で。

そう彼は言うと言の前にいる男に向けていた視線を少し横にそらした。

あまりこの男を直視できなかった。

こんな真実を用意した男を。

闇夜の町に一閃風が吹いた。
満月が雲間から姿を見せる。

「彼女の必要以上に知っていたことがきつかけだったよ」

なぜ、あの時秘密を纏う彼女のことを賢いと言ったのか。

「そして、あの船での出来事がそれを決定付けたんだ」

真実を知って、ここまで後悔したことはない。

「……………できればもっと違った場所で君とは会いたかった」

きつと楽しい会話が出来ただろう。

しかし目の前の男はまだ何も話さない。

「彼女に問いかけた言葉をそのまま返すよ」

彼は一旦一呼吸置いた。

他の者には言わせたくない言葉だった。
だからこそ、自分が言うのだ。

「君は、何者なんだい？」

男はその状況にそぐわぬ穏やかな笑みを浮かべた。

前編：1

「鳥取？」

コナンはパソコンを打つ手を止め、哀のほうを見た。

阿笠宅で彼は組織に関する様々な情報をネットを介して調べていた。

水無のこと、クリスのこと、はたまた裏社会に関すること――……
まだまだ知らないことがたくさんあるのである。

蘭に疑われない程度の頻度で、阿笠宅のパソコンを借り情報収集に勤しんでいる。

もうすぐ連休もあるので、その時には「お泊り」と称して思う存分パソコンを駆使するつもりでいた。

しかし哀から思いもしない言葉を投げかけられ、それまで調べていたことが一瞬で吹き飛んだ。

「ええ。そこに父の生家があるのよ。もしかしたらそこに何か手がかりがあるかもしれないわ」

哀はなんでもないことかのように振る舞い、コーヒーを啜ってキッチンからやって来た。

そうして彼にも淹れたてのコーヒーを渡す。

ちなみに博士は、地下の研究室で何やら怪しい物体を性懲りも無く作っているらしい。

「お前の父さん、鳥取出身だったのか。でも、そんな手がかりがありそうところ既に組織が調べつくして、もう何も残ってないんじゃないねえのか？」

「……多分それはないと思うわ。生家というだけで、そこに何年も住んでいたわけじゃないみたいだし。でも手がかりすら全くないというわけでもないんじゃないかしら」

それもそうだけだよ、と言いながらコナンは渡されたコーヒーに口をつける。

かぐわしい匂いが鼻をついた。

「そういう情報は願ったり叶ったりだけどさ、なんでお前今頃言うんだ？ 前から知っていたんだろ？ 父親の生家」

非難とまではいかないものの思ったとおりの疑問を問いかけた。生家を知っているのなら、今まででも言う機会はあったはずだ。それを何故今教えるのか。

「別に。ただ頃合を見計らってただけよ。急に色々言っても混乱するでしょ？」

哀は近くにあったソファに腰を降ろす。

「急に言つと混乱するような情報を色々持つてゐるってわけか」

コナンは少し不機嫌そうな顔つきで言い返した。
それはそうだろう。

今だつてこんなに必死で情報をかき集めているのに、目の前の少女は何の行動を起こさなくても様々な鍵を握っているのだから。

「あら、あなたに言われる筋合いはないわよ？　あなただつて私に言つてないこと結構あるんじゃないのかしら」

心当たりがないとは言わせないわよ、と少し不適な笑みを浮かべた。

その笑みに彼はぐつとつまる。

確かに彼は少女に言つていないこともいくつかあった。

しかしそれは信頼していないのではなく、彼女を気遣つて言つていないだけである。

いつか頃合を見計らつて言おうと思つていた。

つまり、今の哀の生家に関することも彼と同じようなワケで。

「……もういいよ。で？　その場所は知つてゐるのかお前」

「いいえ。でも鳥取で住人のいない「宮野」という一軒家を探せばもしかすると見つかるんじゃないのかしら」

誰の手にも渡っていないければ、の話である。

もし渡っていたとしても、その売買ルートをたどれば何かわかるかもしれない。

「なら高木刑事あたりに上手く言って住所探してみるか。あ、服部のほうが地理的にはそっちに近いし、両方当たったほうがいいかな」

「あなたが居候してところの探偵さんの声を使って頼んだほうがいいわよ。彼は色々な事件に手をつけているでしょうから、「宮野」と特定せずに他にもいくつか苗字の候補をあげてそこから探索の依頼を警察にすれば、組織に感づかれることもないわ」

「そうだな。じゃあ感づかれないために、神奈川や逆の方向にある群馬県警辺りにも依頼してみたほうが無難だな。鳥取と断定されにくくなる」

「そうね。博士には言うの？」

「当たり前だろ。住所わかったところで行く手段がなかったらダメじゃねえか。お前と博士とで鳥取に旅行に行くとも言えは蘭も疑わねえだろうしな」

じゃあ早速博士に伝えてそれから警察に電話してみるよ、とコナンは言って椅子から立ち上がった。

地下へ繋がる階段に向かう彼を見ながら哀はつぶやく。

「……そうよね。これで良いのよね、お母さん……」

次の日、鳥取の「宮野」という家は案外あっさり見つかった。

結局一番望ましい回答をしてくれたのは高木刑事だった。

同じ苗字で、今鳥取県警に異動中の高木長介刑事に連絡を取って聞いてくれたらしい。

ちなみに、依頼は小五郎の声で「鳥取に宮野もしくは宮里、宮元という名の誰もいない一軒家はあるか」と言っていた。

なぜ3つも苗字を用意したかというのは、「いやー、依頼人の女性の初恋の人の名前が宮なんたらっていうそうなんだよ！ 数年前鳥取で蒸発したらしいから、誰もいなくなった家をちよつと教えてくれないか」と言い訳してある。

他の県警にも同じような内容で電話をしていた。

「鳥取」の部分は「静岡」や「神奈川」、「群馬」と地元ごとに変えてあったが。

これで毛利小五郎が「鳥取の宮野という名の家」を探していると気付かれないだろう。

ちなみに服部には嘘を言う必要は無かったので正直な話を電話し

たが「流石に鳥取にコネはないわ……」とすまなさそうに答えられていた。

しかし高木刑事がすぐに見つけてくれたおかげで、思いの他早く行動が起こせる。

「鳥取の倉吉か。よし、明日は土曜だから早速行くか。博士、いつも悪いけど今回もいけるか？」

高木刑事からの電話を終え受話器を置くと、後ろで様子を伺っていた博士に聞く。

毎度毎度、組織のことを調べる時は彼に同行してもらっているのだ。

彼無しでは子供だけで遠出をすることすらままらない。

「もちろんじゃ！では早速新幹線の切符を買いに行くとするかのおう。哀君はどうするのじゃ？」

同じく側にいた哀に聞く。

「もちろん行くわよ。私が言い出したんだし。それはそうと工藤君一応言っておくけど、これは結構危ないことなのよ。くれぐれも突っ走らないようにね」

「バ一口、奴らとやりあったのは一回だけじゃないんだぜ。わかってるよ、それくらい」

とはいえ、できることならば一回きりでケリをつけたいけどなあ、とコナンは付け足した。

「いつもいつも、あと少しというところで手がかりが消えているのはもう御免だな」

とも言う。

そろそろ決着をつけたいと思うのは当然だろう。
かくれんぼはもう止めにしたいのだ。

明日旅行に行く、と蘭に伝えるため彼は阿笠宅を後にした。
博士は新幹線の席の予約をするべくパソコンへ向かう。
そして哀は、昼ごはんの仕度をしに台所へ足を進めた。

——いつもいつも、あと少しというところで……——

先ほどコナンの言った言葉がなぜか、彼女の頭に残った。

次の日の土曜、コナンと哀、そして博士は鳥取の地にいた。

早くから出たため夜型の哀は眠そうだったが、睡眠不足なのはそれだけではないだろう。

自分の父親の生家に行くのである。

昨日の夜から緊張していたに違いない。

「やっと着いたのう」

「ああ。ここからは気を引き締めていかないとな」

新幹線で鳥取に着いた三人はそこから電車とバスを乗り継ぎ、倉吉でも人里少ない地域へ行く。

高木刑事によると、宮野家は数十年前に誰もいなくなったそうだが、蒸発ではなく、転勤だそうである。

宮野家の近辺は過疎化が進み人口も随分減ったが、何人かお年寄りがまだ

住んでいるから何か知っているかもしれないと聞いていた。

「ここが、お父さんの生まれた場所……」

「多分、な。宮野という名前で誰もいない家は他にもあったけど、一番

怪しかったのはこの場所だ」

コナンは降車したバス停で地図を開く。

それには、事前に聞いておいた宮野家が存在した頃から住んでいる老人宅に

印がつけてあった。

その老人宅は宮野家よりもバス停手前にあるのでそこから先に行くことにするのだ。

老人宅を目指すが田舎だけあって、家と家の距離が長い。

子供2人は元気なものだが博士にとっては重労働である。

大きな尻を子供二人に押されながら整備されていない道路を歩いた。

やつのことで目的地に辿り着くと、博士がインターホンを押し来訪を告げる。

出てきた老婆は優しくそうな女性で、汗だくだくの博士と小さな子供を見て、

「どうぞあがってくださいな」と言ってくれた。

「どうもすみません、いきなりお邪魔しまして……」

出されたお茶を一气飲みした後博士がまず謝る。

コナンと哀もそろって頭を下げる。

しかしちゃぶ台をはさんで座っている女性は嫌な顔一つせず柔らかな笑顔を見せた。

元気そうだがもう九十才を越えているだろうか。

「いえいえ、ここに村以外の人が来るのは随分久しくてねえ。こんな可愛い子に会えるなら大歓迎ですよ。それで、ご用件というのは？」

老化で開け切れなくなった目になるだけ大きく見せながら女性は問うた。

聞かれた三人の身が引き締まる。

そして博士が口を開こうとしたが、先にコナンが切り出した。

「おばあさんの家の近所に宮野さんって家あったでしょ？ その人について聞きたいんだ。」

このおじいさんとその家のお父さんの共通の知り合いが亡くなったから、連絡を取りたいんだけど居場所がわからなくて……だから何かわかるかもしれないと思ってここに来たの」

知りたいのは宮野家の父ではなくその息子の「厚司」についてだが。

いつものことながらよく回る口ね、と哀は心の中で感心する。

「ああ、宮野さんね。もうあの人たちがここを出てどれだけ経ったのかしら……」

そういえばあそこの厚司君はいい子だったわあ。とても優しい子で」

「おとつ……厚司さんを知っているの？」

コナンの側から急に哀が身を乗り出した。
思わずお父さんと言いかけたが、それはなんとか押しとどめる。

「ええ。昔はよく遊びに来てくれたからねえ。今どうしているのかしら。

知っているの？——って聞いてもそういえばあなた達はそれを聞きに来たんだったわね」

今宮野さんがどうしているのかはわからないわ、と申し訳無さそうに女性は答える。

「……いいえ。ありがとうございました」

それに対して哀は少し残念そうな顔をしたががぺこりと礼をした。

その彼女の落胆を感じとったのか、女性は「でも昔のことなら話せるわよ」と

色々話を聞かせ始めてくれた。

哀は感情を表に出すまいとしているが興味津々なのは端から見ても明らかだ。

博士も関心を持って聞いていた。

しかしコナンは傍らで聞きながら他のことを考える。

今につながる手がかりが無いようならば、残る宮野家にしか望みは無い。

何もない可能性のほうが高いが、家具などから指紋くらいなら採取できる。

それを使えば色々わかることもあるはずだ、と頭の中で思いをめぐらせていた。

「そうそう、厚司君がくれた作文が物置に仕舞ってある筈よ。ご覧になる？」

その言葉に彼は急いで現実に戻り行儀良い返事を返す。

「うん！　お願いします！」

女性から作文を預かった後三人は宮野家へと足を進めた。

後で郵送か何かで返還する、と約束をして。

当の作文は最初に手渡された哀が歩きながら真剣に読み込んでいる。この作文は敬老の日に、学校で女性宛に書いたものだそうだ。

おばあさんこれから長生きしてください、とかそついつのが書いてあるのだらうと

コナンは大体の予想をつけた。

「長居してしまったのう。もうすぐ夕方じゃ。山の向こうが赤い」

博士は視線を遠くに向けてため息をつく。

確かに、田舎だけあってカラスや色んな鳥の鳴き声があちらこちらで聞こえ始めている。

紅い夕日が辺りを朱色に染め始めていた。

暗くなる前に行かなければ、とコナンは博士に合わせて宮野家のある方向を眺めたが

突然その先にある異変に気付く。

——嘘だろ……っ!?

いきなり顔つき変わり彼が叫んだ。

「いや、夕日だけじゃねえ!! 麓に火が見えるぞ!!」

「ええ!？」

二人も奥のほうを凝視すると、夕日の色ではない赤色が目に見えた。

あの方向にあるのは宮野家だけである。

三人が走って行くと予想通り地図にあった宮野家が紅蓮の炎に包まれていた。

火の手は完全に回っていて、手遅れなのは明らかだった。

「……博士、消防署に連絡を」

「う、うむ！」

博士がぎりぎり圏内だった携帯で消防車を呼ぶ傍ら、哀は手にしていた作文の端を握り締めた。

「お父さん……」

炎の風にあおられ紙が手からひらひらとたなびく。

——将来は、おばあさんのように元気な人がたくさん居られるような薬を作りたいです——

たなびく紙から、志保の父・宮野厚司が書いた作文の最後が揺れていた。

無人の宮野家が全焼して明くる日、焼け跡から1人の若い男の焼死体が見つかった。

死因は「自殺」。

家の側から箱に入った遺書が発見されたのだ。

その遺書には「生きることに疲れた。ゆっくりと時間の流れる、この家が気に入ったので共に逝きたいと思います」と書いてあった。

筆跡は死んだ男のものだったし、最近ずっと引きこもりがちで重度の鬱病だったのも確認されていたので自殺で間違いないと警察は言っていた。

ではなぜこの家でないといけなかったのだろうか。

男が所有していたパソコンから、運営していた彼のブログをたどったところ

一昨日付けで自殺するにふさわしい場所を探しているという内容の日記が見つかった。

そしてそこに1通の返信があったことも。

「あなたの住んでいる家の近くにとっても雰囲気のある古びた無人の一軒家があります。」

そこは田舎ならではの穏やかな時間が流れており、疲れた心を癒すには最適です。

さあ、ゆっくり休んでいきなさいな」

一見自殺を止めるかのようなコメントである。

しかし、本当に自殺願望のある人間が見たらどうであろうか。

警察から発見時の様子を事情聴取されているコナンは人知れず歯軋りをした。

恐らく、この男のブログに返信したのは黒ずくめの奴らの仲間だと考えていいだろう。

自殺する前、男は自宅から火の気のあるものを持ち出していなかった。

そして宮野家へ行く途中でライターなどを買う目撃証言もなかった。

つまり、無人の宮野家に火の気になるようなものが置いてあった可能性もあるのだ。

自殺したがつっていた男が誰もいない寂れた日本家屋に入り、目の前にライターが置いてあったとしたら……

心を癒す前にその命を消すほうが先なのは、それこそ火を見るより明らかだ。

家が全焼したおかげで何の手がかりもないままこの鳥取行きは終わった。

強いて成果をあげるとすれば、哀が持っている宮野厚司の作文くらいか。

どうやら彼女の父親は昔から薬品関係の仕事につきたかったのはその文章から見て取れた。

「どうやって私達の行動を先読みしたかはわからないけど、これでまた振出しに戻るわね」

「ああ……本当にいつもいつも、あと一歩のところまで手がかりが消えるんだな」

二人の正体を知っているのなら、行動を先読みすることも可能だろう。

しかしそれならとつくの前に自分達は殺されているはずだ。

もつと他に、自分達が気付かない何か別の方法があるのか。

コナンは様々な考えをめぐらせていた。

三人が東京に帰ってきた頃にはすでにあたりは暗くなっていた。ほとんど手がかりがなかったため、コナンと哀はいつも以上に無口で博士は必死に場を盛り上げようと一人でしゃべりまくっている。

「そうじゃ、今日は新一君もワシの家に来るじゃろ？
何か出前でも取るかのう！ 哀くんはどうじゃ？」

「……ええ、別にいいわよ。今日はもうどうせ寝るだけにしようと思ってたし
二人でどうぞ」

「あ、いや、そうじゃなくて哀くんもだね……」

二人が意思疎通のままらなぬ会話をしている側でコナンはずっと先ほどの

疑問を考えていた。

正体がばれないのに、行動がばれる理由とは一体何なのか。

考えれば考えるほど頭が雁字搦めになりそうで、ぐしゃぐしゃと後頭部を搔く。

この疑問はあまり深く考えるべきではないと自分の中の何かが言っているような

気がするのだ。

考えるべきことは他にもたくさんあるはずだとも。

家に戻ったら、もう一回今までのことをまとめようと思い直した。

「おや？ 君の家の前に誰がいるようだぞ」

哀との会話にあたふたしていた博士が工藤家の表札近くに佇む人影を見つける。

街灯でうつすらとしかわからないがそれは……

「父さん!？」

思いもかけない人物を見つけ、コナンが声を上げた。

「やあ、久しぶりだな新一。少しこっちで調べたいことがあるからかえって来たよ」

立っていたのは彼の父、工藤優作だった。

彼は推理小説家として世界を飛び回っていたが、大きなスーツケースがその長い海外生活を示しているようである。

「調べたいものって？ 仕事か？」

「まあ、そんなところだな」

いやー久しぶりの日本はやっぱいいねえ！ と優作は爽やかに笑う。

爽やかすぎて却って怪しいと息子は思っていたが。

旧友の博士が前に歩み出る。

「優作君、久しぶりじゃのう」

「これはこれは阿笠博士。お久しぶりです。おや、この子はもしかして例の

「哀ちゃん」かい？」

博士の隣にいる少女に気をとめる。

「おおそうじゃった。紹介するのを忘れてたわい。この子が今うちで預かっている

灰原哀くんじゃ」

優作は腰をかがめ視線を哀と同じにする。

そしてにつこり笑って「はじめましてお嬢さん、新一の父で工藤優作と申します」

と手を差し出した。

そのキザっぽくて、でも違和感の無い仕草に、

ああやっぱり工藤君はお母さんよりこの人に似てるんだわと彼女は心の中で感じる。

「……はじめまして」

珍しく何のためらいもなく自然に握手した手は、予想通り暖かかつ

た。

大きくて暖かい、ほっとするような温度。

自分のお父さんもこんな手をしていたのだろうかと思はふと思った。

3 (後書き)

さあ、ついにあの男がやって来ました。

優作と再会した次の日の朝、コナンは毛利探偵事務所へと帰って行った。

お土産の20世紀梨を持って。

博士は、小さな箱を持ってたため息をつく彼の後姿がちよっぴり悲しかったが

それは自分の心の中に抑えておく。

哀はまだ起きていない。

昨日の火事のことであれが疲れてしまったのだろう。

彼女のベッドの側には父親の作文が置かれていた。

同じ頃、優作は久しぶりの我が家でコーヒを飲みながら新聞を読んでいた。

この習慣はアメリカでも日本でも変わらない。

妻の有希子がいるときは彼女に淹れてもらうのだが、悲しいかな、今回彼女は

この帰国をしつぷ断念している。

カナダにいる友人の夫が急死したという知らせが届き、葬儀に出席せざるを得なくなったのだ。

「あなた、新ちゃんを頼んだわよ！」と念を押しながら彼女は渡航した。

今回の帰国の真意を知る彼女は息子のことが本当に気にかかって仕方ないのだろう。

一つ一つの行動を慎重に行わなければ、あらぬ方向に事態が動く可

能性もある。

彼はため息をつきコーヒーを置く。

そしてパンを買うのを忘れていたなと気付いたが、その時インターホンが鳴った。

玄関まで出るとそこには息子のコナン、いや新一がいて。

「やあおはよう。こんな朝早くどうしたんだ？」

「しらばっくれんじゃねえよ。昨日はもう夜遅かったし何も聞かなかったけど、父さんがこっちへ帰ってきたのは仕事のためじゃないだろ。一体何の用で帰ってきたんだ」

息子をだましきれると思うなよ、とコナンは父親をにらみつける。優作はそんな彼を見下ろして、しばらく見ない内に随分うちの子は生意気になったなと的外れなことを考えた。そして苦笑する。

「やれやれ、そういう単刀直入で切り込む性格は誰に似たんだか」

「どっちかっていうと母さんだろうな。父さんはもっとねちっこいし」

今もこうやって話を逸らそうとしてるしな、と付け加える。

「はは。……確かに私が帰ってきたのは仕事もあるけど、お前に関することもある。」

お前をほったらかしにして何もせず海外を渡り歩いてたわけじゃないからね」

「やっぱり組織関連か。何を掴んだんだよ」

「掴んだ、というより少し気になることがあってね。インターポールの友人がいると以前話しただろう？ その彼を介して特別に、日本にいるFBIの動きを教えてもらったんだ」

「じゃあ知ってるのか。ジョーディ先生たちのことを」

「話伝いにね。だが私もはつきりと何かを知っているわけじゃない。そういう意味ではお前のほうがもっと知っているだろう。まあ、安心なさい。何かわかったらちゃんと教えるから」

「……本当だろうな」

「もちろんだとも。そのかわり、お前も何か情報掴んだら父さんに教えるんだぞ」

その言葉に少しだけコナンの顔つきが曇ったものになる。やはり、もうすでに何か気になることでもあるのだろう。

「父さんがこっちにいる間だったらな。いつまでいるんだ？」

「しばらくはいるつもりだよ。本当に仕事の用もあるしね」

「そうか。あまり無謀なことするんじゃないぞ。じゃあ、俺は一旦蘭のところに戻るから」

「ああ。しかし、いい身分だねえ。好きな子と一つ屋根の下なんていや、一つ壁越しか」

「うるせー！好きでやってるわけじゃねーよ！ー！」

コナンはそう言い捨てて不機嫌そうな、でも少し赤い顔を隠すように踵を返して、

来た道に戻っていった。

小さな体で箱を持ち、重そうな足取りである。

そんな息子の背中を優作は無表情で見つめていた。

コナンが工藤家を後にして数時間後、まだ少し肌寒い強風の中、黒いコートを羽織り優作は家を出た。メンテナンスをしておいたバイクでとある病院に向かう。

杯戸中央病院。

FBIがキールこと水無怜奈を確保している病院だった。

最上階のVIP専用病室のエリアに、特定のIDカードを見せて進んでいく。

そしてあらかじめ指定されていた番号の病室の前に行くと一人の外国の女性が立っていた。

「工藤優作と申します。あなたがミズ・ジョディですか？」

「ええ。はじめましてミスター・工藤。ジョディ・スターリングです。あなたのことはインターポールから伺っているわ」

互いに名を乗って優作とジョディは握手をする。

そして彼はいたずらっぽく笑った。

「私のことをちゃんと調べなくていいのですか？ 完璧に変装できる人物がああ組織にはいるのでしょうか？」

暗に、あの女優のことを指している。

ジョディが以前痛み分けをしたあの女のことだ。

彼女はそんな問いに苦笑した。

「いつもならそうするけどね。……でもあなたはクールキッドと雰囲気がとてもよく似ているわ」

「なるほど」

言外に、彼女がコナン「新一」と知っていることがわかる。

でも新一ではなく「クールキッド」だと呼ぶあたりに彼女の優しさが垣間見えた気がした。

彼女はそのまま優作を指定した病室のとなりの部屋に案内する。

そこには誰もいなかった。

「知っていると思うけど、あの病室には水無怜奈がいるわ。まだ目を覚まさないけど、組織が彼女を探しているという情報もあるから、ここの警備はかなり頑丈に固めているの」

「そうみたいだね。見る人が見たらわかる、独特の雰囲気を持った人間をここへ来る途中何人か見かけたよ。君の仲間だろ？」

「ええ。……それで、インターポールによるとあなたは私達に色々聞くことがあるそうだけど？」

「ああそうだった。君みたいな美しい人を見たせいですっかり忘れていたよ。込み入った話になるけどいいかい？」

「今みたいに余計なお世辞を入れないならね」

「OK。君達、というより君に聞きたいことがあってね……」

「ただいまー」

「おかえりコナン君！」

コナンが20世紀梨の入った箱を持って事務所のドアを開けると蘭が出迎えてくれた。

「帰ってくるの意外と早かったんだね。楽しかった？」

「うん！ あ、これおみやげだから」

箱を差し出すと蘭は「まあおいしそう！」とにっこり笑って受け取った。

そして机の上にある菓子箱の隣にそれを置く。

「ありがとうコナン君。そうだ、今新一のお父さんが日本に帰ってきてるんだよ。コナン君と親戚なんでしょ？ 会ってきたらどうかしら」

え、とコナンは驚く。

どうして昨日帰ってきた自分の父を知っているのだと。

「蘭姉ちゃん、新一兄ちゃんのお父さんに会ったの？」

「ええ。昨日自宅に戻る途中で会ったからご挨拶したのよ。今から家に帰るところって言ってたかなあ」

あの人にもおみやげ頂いたのよ、と蘭は嬉しそうに箱の側にある外国の高そうなお菓子をを見せてくれた。そして後ろを見ると、机で朝っぱらから呑んだくれている小五郎の前に洋酒が。

——こういうところは抜け目ねえなあ男……

息子には何もあげなかったくせに、毛利家にはちゃんとおみやげを用意する辺り邪な考えが伺える。

自分と蘭の分だけのロス行きチケットを送りつける有希子といいどうもウチの両親は先走りすぎてるような気がする。

いや、別に嫌なわけではないけれど。

むしろ嬉しいけれど。

しかし将来のことを考えすぎだ。

「僕も今日優作おじさんに会ったよ！ 博士の家から出るときに会ったんだ」

「あらそうなの。そうそう、今日は他にも来る人が居てね……」

その瞬間バン、という大きな音と共にドアが再び開かれた。

「よー！ 久しぶりやなあ！ くどつ……ボウズ！！」

「平次兄ちゃん！？」

「蘭ちゃん、コナン君おはよう！」

そこには平次と和葉がいた。

コナンは後ろから湧いて出てきたような平次に驚く。

相変わらず「工藤」とみんなの前で呼ぼうとする癖は抜けられないらしい。

コナンとしては早く抜けてもらわないとこっちの心労が重なる一方なのだが。

しかし今はそんなことどうでもいい。

「どうしたの二人とも！？」

「蘭ちゃんと昨日メールしたら、工藤君のお父さんが帰ってきてるって

教えてもらったよ。それを平次のおばちゃんに話したらな……」

「うちのオカン、闇の男爵シリーズの大ファンでなあ。俺に詰め寄って、明日からの連休また東京行くんやろ？ そうやろ？ って言うてきよってん。サイン色紙手に持ってな。まあ俺も工藤優作さん

の本好きやったし、それなら明日の朝から飛行機でちよつと行つた
るかな、と」

高校生が大阪から東京まで「飛行機でちよつと」上京するのか。
中々侮れない二人である。

これ見よがしにサイン色紙を取り出す平次に、蘭が思い出したように
告げた。

「でも優作さん、朝は出かける用事があるって言ってたから、会い
に行くのは昼からのほうが良いわね。一人で戻ってきていらつしゃ
るから、お昼ごはん作って持っていてあげようと思うの。私なん
かの手料理お口に合うかどうかかわからないけど」

「え、優作おじさん出かけているの？」

「そう聞いたわよ？ なんでも仕事の用事だっておっしゃっていた
けど」

朝会った時には何も聞いていない。

自分から今日は何をするんだと聞いてもいないので非難はできない
だろう。

しかし、出かける今日の朝に会っているのだし何か息子に言っても
いいはずだ。

それをしないということは、理由として考えられるのは、唯一つ。

——組織関連の調査か。

一体何を自分の父は考えているんだといぶかしむ。
自分をはるかに越える推理力を備える彼の行動を読むのはかなり難しい。

帰宅したところを問い詰めるほうがよさそうだ。

「そら残念やなあ。よしボウズ！ 兄ちゃんとちょっと外ぶらぶらしに行こか！ 和葉のことは姉ちゃん頼むわ」

ぼんと手をコナンの頭に乗せ平次が提案する。

コナンは勝手な提案に文句を言おうとしたが、

一瞬平次がこちらを見下ろしこっそりウインクをして見せた。

「……！うん、僕この辺の面白いところ案内してあげるよ」

その意図に気付き、コナンも賛成する。

「全く、どっちが子供かわからへんなあ。コナン君、平次のこと頼んだでー？」

「お前俺をいくつやと思てんねん」

「はい！ じゃあ平次兄ちゃん、早く行こ！」

平次はぶつぶつ不平を言っていたが、コナンの元気の良い返事にかき消され

そのまま外へ出かけていった。

端から見ると本当に仲の良い兄弟みtaiである。

「どっちかって言うと、コナン君のほうがお兄さんみたいやなあ」

「あはは。そうだと和葉ちゃん。これから昼ごはんの買出しに行くんだけど、ついて来てくれない？今日は三人分量が増えるから」

「もちろんええよ！そういえば、ここ来る途中桜見つけてん。まだ咲いてるところあるねんなあ」

杯戸中央病院に数本桜が咲いていた。

季節はずれの桜に平次と和葉は感嘆したのである。

「今年の春は涼しかったからね」

「そうやね。帰りにまた見れたらええなあ」

5（後書き）

優作にジヨディに平次に和葉。
いよいよ登場人物が増えてきました。

事務所を出て数分後、コナンと平次は阿笠宅に来ていた。事情を知らない者に聞かれたくないことなら

ここで話すのが一番いい。

二人が阿笠宅に訪れると、まだ眠そうな哀が出迎えた。

今朝出て行ったコナンが平次を連れてきて戻ってきたことに多少驚きながら。

中に入れさせてもらって、彼女と博士も交え早速本題に入る。

「で？ サインもらうためだけに来たわけじゃねえだろ？」

優作といい平次といい言い訳がもっともらしすぎて怪しいのだ。

「そらなあ。だからこうやって二人で話せるよう連れ出してやったんじゃないか」

そう言っただけは平次はずいといとコナンに顔を近づけた。隠し事はあかんで、という表情である。

「鳥取行ったんやろ？ どうやったんや？」

哀が顔を曇らせる。

ちらりと横目でそれを見たがコナンは正直に答える。

「……俺達が行った時、宮野家は火事で全焼していた」

「っなんやて!？」

がたん、と音を立てて平次が立ち上がる。

そして何かを考えるように手を顎に当てて神妙な顔つきになった。

「その鳥取行きのこと、誰かに話したんか？」

「鳥取行き自体は教えていないが、知り合いの刑事達におっちゃんの声で宮野家の場所を聞きまわった」

「なら、もしかして……」

やはり平次は頭の回転が早い。

事態の大きさを理解しているようだ。

コナンも彼の考えてることが聞かなくてもわかった。

「ああ。もしかすると、いやかなりの可能性で誰かが俺達の動きを読んでいるということだ。

そしてそれは……お前にはあまり言いたくないが、警察関係者の可能性もある」

周りが警察関係者ばかりの平次には言いづらいが、そう考えるしかなかったのだ。

コナンの告白に博士と哀が声にならない驚きを示す。

まさかそんな。

一方平次は別段気分を害した様子もなく、神妙な感じでうなずいた。

「俺にまで気を使わんでもええ。お前の考えが一番妥当や。でもそんな奴らが敵やったらどないするんや？」

もし警察関係者が組織の人間だった場合、いざという時頼れる者は格段に減る。

FBIもアウェイである日本であまり目立った動きはできないのだ。そんな中で組織が行動を起こしたら。

最悪の事態がそこにある。

背筋に冷や汗が流れるのをコナンは感じた。

そのとき、ズボンのポケットから振動が伝わってきた。

「電話？」

ディスプレイにはどこかへ外出した「父」の文字が。

直感的にそれが組織がらみだと悟ったコナンは側に哀がいるのを考え、「家族のことっぽいし、少し席を外す」と三人に伝え急いで立ち上がる。

組織絡みの大事な用件なのだろうと見抜いている平次は彼を止めずそのまま前を通した。

コナンはそのまま走って別室へと去っていく。

「……何かまだ言いたそうね」

黙って通した彼をどう捉えたのか、哀が尋ねた。

「いや、他の考えもあるかもしれんなと思って」

「他の考え？」

「そうや。別に警察関係者やなくても、盗聴や監視しとけばわかるんとちやうかなあって」

「それはあまり考えられないわ。盗聴されるということは私達の正体がばれてるってことよ。

なのに彼らは私達に何のアクションも起こさない。何故だかわから

ないけど、行動はばれてるけど正体はばれていないはずなの。……でも警察の場合だとしてもこの疑問は解決できないけどね」

「なるほど。あーややこしいことになってんなあ！ どないせえっちゅうねん」

平次は複雑怪奇な状態に頭を抱えた。

哀も出来ることならば、らしくないが何かを蹴飛ばしたい気分だった。

その頃、別室ではコナンが優作からの電話を受け取っていた。そして驚愕の知らせが聞かされる。

「外務大臣の息子の暗殺だと！？」

父から聞かされた内容はあまりにも突飛過ぎた。

今、優作はジョディ達というという。

その辺の事情も聞きたかったが、そうもいかない事態だ。

「ああ。昨日辺りから水無怜奈を探す組織の動きが影を潜めたそう
だ。探してはいるが、どうも形だけみたいらしい。それで彼らが違
う大きな何かを起こすのではないかと予測して、私もさっきまで一
緒に調べていたんだ。すると……」

「外務大臣の息子が狙われていることがわかったってわけか」

「そういうことだ。詳しいことは後で話す。とにかく今すぐ来てく
れ」

「わかった！」

6 (後書き)

2話連続更新。

やっと大きなことが起こります。

話は少し遡る。

コナンが電話を受け取る1時間ほど前。

優作は病室でジョディから気になることをいくつか聞いていた。

「では最後の質問。あの子はそのやりとりに気付いていたのかい？」

「いいえ、多分気付いていないと思うわ。刑事と話してたみたいだし」

「……そうかありがとう。これで色んな疑問が解決したよ」

彼は礼を述べたが、その顔からは何を考えているのかわからなかった。

ジョディは何か引つかかるものを感じて口を開こうとしたが、

「失礼。ジョディ、少しいいかね？」

ノックと共に上司のジェームズが入ってきた。その神妙な顔つきに二人とも嫌な予感がする。

「私はお暇したほうがいいですか？」

「……いや、あなたの助言が必要かもしれないのでそのまま居ても
らえませんか」

工藤優作の助言が必要なことといえば事件しかない。
やはり何かあったのだ。

「で？ どうしたのですか？」

「うむ。その前にジョーディ、水無怜奈を探す組織の手が緩められて
たのに気付いていたかね？」

「……ええ。確証はありませんけど、そんな感じはしてました。諦
めたと考えるには不自然ですね」

「私もそこが気にかかり、彼らが他に大きなことをしでかすのでは
ないかと予測したのだ。また暗殺関係かもしれないと踏み、組織の
動きを探っていたのだが驚くべきことがわかった」

「ターゲットがわかったということですね」

優作の言葉にジェームズはうなずく。
彼は冷や汗を一筋流した。

「彼らは今の日本の外務大臣の息子を数日前から監視していたのだよ。そして今日、その監視の人数が倍増した」

「なんですって!？」

現職の外務大臣の息子といえば若手の国会議員である。

その立場やカリスマを感じさせる演説で未来の首相とも目されている人物であった。

「詳しく調べると、どうやら彼は今日群馬県警本部長の娘と会う予定らしい。これはまだオフレコだがね」

「なるほど。確かターゲットの人物は既婚者。そしてその本部長のご息女も昨年結婚したばかりのはず。マスコミが飛びつきそうなスキャンダルですね」

「うむ。なぜそのような日に監視が増えたのかがよくわからないのだが……」

現場の写真を押さえて、それをネタに強請るくらいなら監視は増えないはず。

殺すにしても一人のときを狙ったほうがやりやすいはずだ。

それを何故、不倫現場で襲撃を計画するのが不可解であった。

「恐らく、不倫現場で襲撃を実行し二人の関係を表に出させる狙いもあるのでしょう。普通、息子を襲撃された大臣というのは民衆の

同情を集める。しかしその息子が不倫していたとしたら。今後の政治活動に支障が出ることは間違いないでしょう。将来の首相候補と現職の外務大臣の失墜。この二つが同時にできるというわけです」

「な、なるほど」

一を聞いて十を知る優作にジェームズは、さすがあのクールキッドの父親だと舌を巻く。

「なぜこの二人の権力者を狙わなければならないかはわかりませんが、今日がそのXデーだという可能性は非常に高い」

「では急いで仲間に連絡してその現場に向かわないと……！」

「場所はわかっている。夕方に六本木で会うようだ」

皆を呼び寄せて計画阻止のシナリオを作るべく、ジェームズは踵を返した。

そして思い出したようにこちらを振り返る。

「ミスター・工藤。助言感謝します。これからあなたはどうしますか？ 私達はあなたを危険なところへ誘う権利は無い」

「いや、ここまで聞いたら一緒に一緒にさせてもらいますよ。息子にも教えていいですか？」

「父親のあなたがそう言うのならいいでしょう。あの子には私達も色々助けられている。……いい息子さんですね」

「ありがとうございます。でも、まだまだ未熟ですよ」

——もっと強くなってもらわないと。

優作は心の中でそう付け足した。

ジェームズと優作たちが現場へ向かうべく、地下の駐車場に行くと入り口からバイクのエンジン音がこちらに近づいてきた。
一人の青年の後ろには小さな子供が乗っている。
そのバイクは目の前に急ブレーキで止まった。

「父さん！」

「早かったな新一。そのバイクの子はもしかして……」

「あ、はじめまして。服部平次といいます」

ヘルメットを取り外して平次がおじぎをする。

「うちの子からよく話は聞いているよ。こんな愚息によくしてくれて本当にありがとう」

「いやこちらこそ……」

世界的推理小説家に礼をされて平次はあわてて恐縮する。

うわー本物の工藤優作やー、とか考えていそうな興奮気味の表情だ。

「こいつのは親切じゃなくて、おせっかいていうんだよ」

ミィハーな平次に、何しにここ来たと思ってんだお前とツッコミを入れつつ父の言葉を訂正する。

平次に色々面倒を見てもらっていると思われるのが嫌らしい。

「なんやてお前？　今までこの平次兄ちゃんがごんだけお前に世話焼いてやったと思てんねん！　今かてこうやってわざわざバイクをご近所から借りてきてやなあ……」

「頼んでないし鬱陶しいし」

「あつ言いよつたなお前！？ そんな恩知らずにはこうじゃー！」

「うわっ何すんだよ！！」

脇の下をくすぐる平次とそれに怒るコナン。

今の状況には不似合いだったが、彼らの年齢だと似合っていた。

一方優作はそんな二人を珍しそうに見つめる。

息子がこうやって同年代の子と戯れるところを見たことが無かったからだ。

頃合を見図って、以前就いていた教師のようにジョディがパンパンと手を叩く。

「さあ、行くわよ二人とも。ここから少し遠いから今から行つてギリギリだわ」

「おお、そうやった。にしても久しぶりやな、ジョディ先生」

「ええ。あなたと共同線を張る日が来るとは思わなかったわ」

そのままFBIの面々は車にそれぞれ乗り、コナンは平次と、優作は一人でバイクに乗り目的地へと急行した。

7（後書き）

話はずいに第一段階の佳境へ。

この話の最初のXデーは次の次、更に次くらいです。

42巻あたりを手にとって読んでいただければよりいっそう理解が深められるかと。（笑）根気よく読んでやってください。

さあ、カウントダウン開始です。

辺りが夕焼けに染まる頃、とある駐車場でジンは愛車の中で煙草を一服吸っていた。

いつもは助手席にいるウォツカは今回いない。

周りに他の仲間もいなかった。

彼一人である。

利用する車が少ない時間もあり、黒いポルシェは地下で鈍色の光を放ちながらその時を待っていた。

そう、外務大臣の実子、現職国会議員の暗殺を。

車内につけたモニターで彼はそのターゲットの人物を観察する。

外にいる構成員の一人が映像をこちらに送っているのだ。

モニターに映るターゲットは、自分の置かれている状況など全く気付かず女性と仲睦まじく歩いていた。

一応簡単な変装を二人ともしているようだが、コソコソすることはなく、堂々と歩いているので却って周りの通行人も彼らに気付かないようだった。

「こちらキャンティ。もうすぐ標的が目的地に着くよ」

「わかった。こちらが合図を出すまで待て」

無線からスナイパー達の陣頭指揮を執っているキャンティから報告

が入る。

目的地とは大通りから少し外れた所に出る脇道のことであった。

今回の暗殺に組織はかなりの人数を動員している。

以前未遂に終わった元自衛隊幹部・土門康輝以上に世間に影響の出る計画だからだ。

——まあ、「別件」のことも含め目立つ必要もあつたしな。

東の名探偵を更に上回る数少ない人物の一人である彼は、何十手、何百手先のことを考えて人知れず不適な笑みを漏らした。

「さあて、今日はたくさん観衆が用意された暗殺だよ。コルン、興奮して先に周りの羊達に撃つんじゃないよ。標的が先だからね。ア
ンタは胸でアタイが頭。他の奴らは女だよ」

耳につけたイヤホンとマイクで四方のビルの屋上にいる仲間達に注意する。

キャンティは脇道の右側のビル、コルンは左側のビルの屋上でスタンバイしていた。

右側、左側といっても脇道に面したビルではない。

数百メートル離れた場所だ。

「……わかってる。俺、もう殺し損ねたくない」

「アタイだってそうさ。前みたいに邪魔が入る手前に撃ち殺したいよ」

FBIが阻止したあの事件以来久しぶりの仕事である。

武者震いがするのを止められない。

四方に準備しているほかのスナイパーだってそうだろう。

「まあでも、邪魔が入ってもそれはそれで組織には好都合なんだけどねえ」

ジンとあらかじめ計画を話し合っていた彼女はマイクから少し口を離して呟く。

全くあの男は底が見えなくて恐ろしいと感じた。

「もうすぐターゲットが女と共に脇道に入る。道の中程で殺れ」

その恐ろしい男からゴーサインが出る。
キャンティたちはいつせいに構えた。

ターゲットは女と手を組み脇道に入った。

誰もいない道なので、自然とその組んだ手はより親密になる。

ゆっくりと、ゆっくりと、その二人の時間を愛おしむかのように一歩一歩進んでいった。

「……あと五歩だね」

5、

4、

3、

2、

1、

パシュッとサイレンサーを通して乾いた音が空に響いた。

それと同時に何かが落ちるけたたましい音が地面にこだまする。

それは誰による音だったのか。

「Freeze or I'm going shoot!!」
(止まちなさい、さもないければ撃つわよ!!)

屋上への扉がぶち開けられ、ジョディとその仲間が入ってきた。
全員その手には銃が構えられている。

「……へえ、結構早かったんだねFBI」

別段驚く様子もなく、キャンティは一瞬止まってしまった手を降参のポーズに上げる。

ちらりと片目につけた望遠レンズで周りを見渡すと、自分と同じように他スナイパー達もFBIに囲まれていた。

「まさかあそこで看板を打ち落とすとはねえ。いいアイデアだよ。
おかげでアタイらの手止まったし」

カウントがゼロになると同時に響いた銃声と落下した音は、赤井秀一によるものだった。

コナンたちが現場に近づきつつ車から辺りを見回すと、スナイパー達が脇道をサイトに捉え銃を構えていた。その道にターゲットがいるのだと確信した優作は、同行していた赤井に

「あの道には一つ大きな看板がある。彼らが撃つ寸前にそれを打ち落としてくれ」

と、頼んできたのである。

赤井はその難問に眉一つ動かさず「それが最善策のようだな」と承諾し見事やってのけたのだった。

その大きな音でスナイパー達は驚き、構えた手が緩んだ。

「無駄口は後でたっぷり聞いてあげるわ。さあ、観念しなさい」

ジョディは射撃範囲に捉えながら彼女に近づいていく。

この先はもう無い。

出口は自分達が立ちふさがっている扉のみ。

だが、追い詰められた状況の中相手はふっと笑った。

「誰が、観念するだつて？」

その瞬間キャンティの姿が視界から消えた。

いや、飛び降りたのだ。

「っ！？」

急いでジョディ達が見下ろすと、軽い身のこなしで彼女がロップを伝い地上へと下っていくのが見えた。

あらかじめ彼女の腰には命綱が結んであったようだ。

「こちらジョディ！ 敵一名が飛び降り逃走しました！ 急いで確保を！！」

「……他のスナイパー達も一斉に飛び降りたよ。四方に散ったから分担して追うことにしよう」

地上で成り行きを見守っていたジェームズの声からは明らかに落胆の色が混じっていた。

まさか飛び降りる準備をしているとは思っていなかったのだ。

側と一緒に待機していたコナンや平次、優作も追う準備をする。

「工藤！ ちょっと乱暴な運転になるしそっちのジェームズさんの車に乗せてもらえ！」

「ああ！ お前も気をつけろよ！！」

同乗者に気を回せないほど本気で運転する気らしい。

一歩間違えればコナンが振り落とされかねないと判断したのだろう。

コナンはそのままジェームズの車に乗り、「じゃあ服部は東、父さんは好きにしろ」と言って急発進して去っていった。

父に何も言わなかったのは、自分よりも的確な判断をするだろうと思ったからだ。

自分が言う必要はないということだ。

平次はコナンが去っていった逆方向にバイクを構えエンジンをかける。

隣を見ると優作はまだバイクに乗っていなかった。

何かを考えているようだ。

「どうしたんや先生！？ はよ行かんと逃げられてしまっで！！」

しかしまだ優作は動かない。

「先生！！」

「合点がいかないな」

「え？」

平次のハンドルを持つ手が離される。

「あまりにもあつさりすぎている。失敗してもまた次の手を考えるのが、彼らのやり方なんだろう？　だが、彼らは抵抗する様子もなく銃を捨てて逃げ去った」

一度計画した暗殺はその日中に遣り遂げることが彼らは方針にしている。

銃を捨てて逃げるその態度が不可解なのだと彼は言う。

「先ほどから思っていたんだが、数日前から水無怜奈を探す手が緩められたというのも疑問だ。そんな、他に何かをやらかすようなことをほのめかす行動を彼らが取るだろうか？」

暗殺を止めてみると言わんばかりの計画のわかりやすさではないか。

「……ほかに、何か目的があるっちゅうわけやな」

「そういうことだ。私達の目をこの暗殺劇に向かわせ、何かをしよ
うとしているかもしれない」

自分達がここへ来ることと及ぼされることといえば。
平次がはっとする。

「——っ！？まさかあいつら……！！」

「そうだ、彼らの真の目的は恐らく水無怜奈の奪還。私達がここへ
来ることで、彼女の監視は手薄になっている。そこを狙われれば間
違いなく奪還は成功するだろう」

優作は珍しく焦った顔を見せた。

息子やジョディから話に聞いているジンという男の仕業だろう。
暗殺よりも情報流出阻止を選んだのだ、あの男は。

「全く、賢い判断だよ」

「そんなこと言ってる場合とちゃうで先生！ それならばよ病院戻
らなアカンやんか！」

平次は焦っているのに行動に移さない彼に痺れを切らす。

何を考えているのか、彼は無表情で返した。

「……そうだね。彼女の病室は最上階だから恐らく彼らはヘリを使うはずだ。急いだほうが良さそうだ」

逃げた構成員も追わなくてはならないので、彼らはコナンやFBIには連絡せず病院へとバイクを発進させた。

「さあ……そろそろ杯戸中央病院へ行く時間だ、ウォツカ」
「了解」

ジンは無線を気だるそうに置いた。

日没はもつすぐだった。

8 (後書き)

あと、もう少しだけがんばります。

すっかり暗くなった杯戸中央病院に一機のヘリが夜に紛れ静かに向かってくる。

カモフラージュのため救急用のヘリに塗装されたそれには、ジンから特命を受けたウォツカと構成員数人が乗っていた。予定していた時刻を過ぎ始めている。

「ちっ、今日は風が強いな。おい、降りれるか」

「もうすぐ風が止むと思いますので、少しお待ちください」

構成員のパイロットは風に煽られないよう巧みに機体を操縦する。しかし早く実行しなければ、FBIの面々が気付いて戻ってきてしまふ可能性もあるのだ。

彼は焦っていた。

その時脇に控える構成員の一人が窓を見て叫んだ。

「ウォツカ様！ 着陸地点に誰かが来ます！！」

「何だと！？」

いくらなんでも早すぎるのではないか。

他の構成員がFBIを引き付けていたはずだ。

望遠鏡で確認すると、男二人が走って屋上にやって来ていた。

「二人とも男のようですが、ヘルメットを被っているため顔はわかりません。どうされますか？ 撃ちますか？」

男達は何かを言い合いながらこちらを指差している。

FBIに違いない。

正体不明の男達を同じく望遠鏡で見下ろしながら、ウォツカは今何を一番優先させるべきか考える。
その答えはすぐに出た。

「……いや、撃つのはその2人じゃねえ。キールを撃て」

「キール様をですか!？」

「ああ。ジンの兄貴からは承諾を得ている。どうせ奪還しても殺すつもりだったしな」

予定は狂ったがキールを殺せば問題は無い。
ある筋から得た情報で、彼女は裏切り者だった可能性が非常に高いのだ。

「早くしろ！」

「りよ、了解！！」

両脇に居た構成員が窓から遠方用ライフルを身構えた。

「っ先生！ あいつら俺等を狙ってへんで！！」

なんとか間に合った優作と平次は、顔を見られぬようヘルメットで隠しへりを見上げる。

「あの位置からすると……水無怜奈の病室か！！」

組織の意図を悟った優作はポケットからあるものを取り出し上へと掲げた。

ためらっている暇は無い。

「日本ではあまり使いたくなかったけどね……！！」

ダン！ という銃声と共にへりの窓ガラスが割れる。
操縦ができる程度に機体にも何発か当てた。

左右に機体が激しく揺れる。

「ダメですウォツカ様！このままでは機体を安定させられません！！」

「くそっもういい！このまま引き上げる！！」

「はっ！！」

飛び散ったガラスの破片で顔を切ったウォツカは齒を食いしぱりながら、退避命令を出す。

このまま墜落するよりましである。

「またジンの兄貴にどやされるぜ……。しかしあの男共、FBIの人数にいたか……？」

あの二人を加えると把握していた人数を越えるのだ。

これも報告すべきだろうなと彼は血を舐め取って思案した。

「くそっ！こっちも逃げられてしもうたな……」

「そうだね」

平次は悔しそうにヘルメットを地面にたたきつけた。

一方優作はさほど悔しく無さそうだ。

第一の目的である、奪還阻止はできたからか。

サイレンサー無しで心配だったが、どうやら病院の者には気付かれなかったようだ。

交通量が多い都心の病院だったおかげである。

「これからどうする？ あんたの息子と合流するか？」

構成員を捕まえたかどうかはわからない。

確保した可能性は低いだろうと二人とも予想はしていたが。

「いや、また彼らもこちらに戻ってくるだろう。ここにいたほうがいい」

携帯を取り出そうとした彼を制止する。

そして小型銃をポケットに仕舞った。

彼はそのまま息をすうつと吐いて平次に向き合った。

ちようど、彼らの間に屋上の移動ライトがてらてらと明かりを灯す。
ライトのリングが二人を囲う。

「……それより、今ちようど新一がいなくて都合がいいから、少し私の考えを聞いてくれないか？」

「先生の考え？」

「ああ。私も自分なりに組織のことや息子の周辺の謎について考えたんだ。でも一人で推理しても客観的な意見が無ければ、確証は薄いだろう？　かと言って当事者である息子に聞かせても、正確な判断はできない。だから新一と同じレベルの推理力を持つ君の意見が聞きたいんだ」

「あの工藤優作の推理か。おもしろそうやん、ええで。聞かせてえな」

襲撃事件の直後とは思えないほど、優作は穏やかに提案し平次は興味深そうに返事をした。

「まず一つ目はベルモットと名乗る女性が計画した幽霊船事件。哀君を殺害しようとした事件だね。あの事件の後、記帳に書いてあった中で事情聴取に来なかった人物が1人だけいる。もちろん連絡先

もわからない」

これは帰国してすぐに立ち寄った警視庁で聞いた事実だ。

「組織の人間が計画したパーティーなのだから、そこに仲間が潜入していたと考えてもおかしくないだろう？　しかしそれだとある疑問が浮かび上がる」

「疑問？」

その探偵のような口調に、まるで工藤みたいやなと平次はふと思った。

「波止場でミズ・ジョディと相對したベルモットは仲間を一人だけしか呼んでいなかったことだよ。FBIを誘い込むなら、もっと大勢の仲間がいたほうがより安全だったはずだ。にも関わらず、彼女は一人しか呼んでいない。……彼女が組織に黙って計画を実行した可能性が非常に高いと言えるんだ」

組織が計画したものなら、あそこでベルモットが失敗して逃げるようなことはなかっただろう。

内密に実行したからこそ彼女はしくじったのだ。

「ではなぜ、黙っていたにも関わらず組織の人間が幽霊船のことを

知っていたのか。……誰かが組織に、ベルモットの計画を密告した
としか考えられない。内密に実行された計画を知ることができた人
物にしかそれはできないんだよ」

幽霊船のパーティーとその裏で操るベルモットの陰。
両方を知るものでなくては、それはできない。

「次に今回の息子の鳥取行き。目的地の宮野家が全焼したことだ。
あの時も息子の行動を知っていなければできないことだった。正体
がばれないのに行動がばれるなんてどう考えても不可能なんだよ。
ということは残る可能性は唯一つ」

「……正体を知ってるけど、それを組織には教えず行動だけ報告し
たってわけやな」

「そういうことだ。息子の近くに、組織の構成員がいると考えて間
違いない」

——誰かが宮野家に探りを入れようとしている。だから先手を打っ
て家を消してしまえ。

そう組織に言えばいいのだ。

これなら正体を知っていてもそれをばらすことなく行動だけ伝えら
れる。

「そしてもう一つ。私はアメリカである驚くべき秘密を知った。それこそが、私が帰国した最大の理由だよ」

「秘密？」

「いわゆる、「黒の組織」のボスの名前。いや、コードネームと云うべきか」

風が彼らの間を吹き抜けた。

二人ともその風に臆することなくお互いに視線を合わせる。

彼らは何を考えていたのか。

「それは「ある人物」が書いた研究書に載っている「ある薬」の成分の一つだった……」

その成分を見て、彼は背筋が凍つたのを覚えている。
その成分から浮かび上がる人物はただ一人。

「パイカル。君が初めて新一に会った時に持ってきた酒の名前だよ」

息子の身近に構成員がいるという事実。

そしてボスのコードネームを初対面で見せ付けたという事実。

それは変えようの無い真実。

「そう……君の演技は完璧だった。あの子の、いや全ての者の前で」

そしてそれは私以外で。

そう彼は言つと目の前にいる男に向けていた視線を少し横にそらした。

あまりこの男を直視できなかった。

こんな真実を用意した男を。

闇夜の町に一閃風が吹いた。
満月が雲間から姿を見せる。

「君が彼女のことを必要以上に知っていたことがきつかけだったよ」

なぜ、あの時素性が一切不明だったクリスのことを賢いと言ったのか。

なぜ、あの時ジョディに対して牽制をかけたのか。

「そして、あの幽霊船での出来事がそれを決定付けたんだ」

組織の人間が居たにもかかわらず、無事で居られたそのワケ。

「……できればもっと違った場所で君とは話がしたかった」

きつと楽しい会話が出来ただろう。

しかし目の前の男はまだ何も話さない。

「君が彼女に問いかけた言葉をそのまま返すよ」

工藤優作は一旦一呼吸置いた。

息子には言わせたくない言葉だった。
だからこそ、自分が言うのだ。

「君は、何者なんだい？」

服部平次はその状況にそぐわぬ穏やかな笑みを浮かべた。

「真実を解き明かすだけでは、何の解決にもならへんで？先生——」

春の桜が闇夜に散った。

10 (後書き)

BGM：愛内里菜「DELIGHT」

彼が優作の推理を否定しなかったことに息を飲んだ。

否定されるとは思っていなかった。

それでもやはり、認められるとどこか失望する気持ちがあった。

どうして彼は否定してくれなかったのだろう。

「ではやはり……」

「自分で確信しといて何言ってるの。そうや、俺はあんたが推理したとおり組織の人間やで？」

ホンマすごいわ、アンタ。

平次は嬉しそうにそう付け足した。
本当に嬉しそうだ。

正体を見破られて何がそんなに嬉しいのか。

「でも先生の推理って俺が組織の人間やていう前提で始まってや

んな。どこで俺を疑うたんや？　パイカル持ってきただけで疑うのはちょっと強引やろ」

いつもと同じような陽気な声で問う。

しかし優作はそんな彼に合わせることなく真剣な顔つきで答える。

「君が自分から新一のいる毛利探偵事務所に来たからだよ。新一が幼児化してから出会った人たちはほとんど偶然だった。事件現場然り、旅先然り……待ち構えて新一に会った人はいない。だが、探偵事務所に自ら来るなら話は別だ。新一と出会ったのは偶然ではなく必然となる。更に、そこに来訪した人物の中で今なお親密に交際を続けている者と考えれば、構成員候補は限られてくるんだよ。沖野ヨ一コ氏、本堂瑛祐君、……そして君だ」

西の高校生探偵として、東の高校生探偵工藤新一を探しにやって来た少年。

本当に探しに来ただけだったのかといぶかしんだのだ。

「あーなるほど。意外な盲点やったわ。でもこの事実ばかりはどうにもならんなあ」

本当に今気付いたというように手をぱんと叩いた。
優作は話を続ける。

「そこから君に疑惑を持った私は、帰国してFBIに今の状況を聞くことにした。有希子から聞いていた幽霊船のこともね。そして阿笠博士にも今朝電話で色々聞いたよ。それで君への疑惑が確信に変わった」

「……幽霊船のことはわかるけど、あの阿笠っちゅう爺さんには何を聞いたんや？」

あの人の前でボロ出した覚えあつたかいなあ、と呟く。

「新一がクリス・ヴィンヤードが組織の人間ではないかと、君や博士に言ったことだよ。その時君が何を言ったか覚えてるだろう？」

——クリス・ヴィンヤード……アメリカのムービースターだ!!

——ク、クリスってあの有名な2世女優の……

——チチのでっかい、きれいで賢い姉ちゃんか!?

「……ホンマ、すごいわ。なんでアレに気付くねん」

「全く私も自分で自分が嫌になったよ。なんで気付いてしまったの

かつてね」

クリス・ヴィンヤードはプライベートが一切謎に包まれた女優だった。

学歴や母親との関係、果てには父親さえわからない人物だ。銀幕にしか出ない、秘密だらけのムービースター。

なぜその彼女のことを賢いと知っていたのか？

そこから導き出せる答えは一つである。

「君はミズ・クリスが組織の人間、つまりベルモットだと知っていた。つまり、新一が疑っていたミズ・ジョディが黒ではないと最初からわかっていたんだ。だから彼女の家に行き正体を探った。……そしてFBI関連だと気付いていたのかな、君は。新一に悟られぬように彼女に対して牽制をかけたんだよ」

——あんた何者や？——

そう聞かれたとジョディは言っていた。

日本語が下手な振りをしていると流暢な英語で指摘されたとも。

新一はその時刑事と話していて気付かなかったらしい。

「まあ俺が組織の人間やていう証拠は置いて、目的はどうするんや？　なんで俺は工藤やちっさい姉ちゃんのことを組織に言わんと、ずっとアイツと仲良うやってるんやろか？」

確かに、組織が灰原哀を血眼になって探していることを考えれば平次の行動は矛盾していた。

彼女や新一の居場所を教えていないかと思えば、幽霊船や宮野家といった組織に関する

場所に行く際はすぐさま伝えている。

加えて、組織を追う新一に対する彼の貢献度も並外れている。

そんな彼が組織の人間だとは夢にも思わないだろう。

再び風が吹き始める。

桜の花びらとともに彼らのコートがひらひらとたなびいた。

あくまで自分からは何も言わないつもりなのか、平次は推理を聞いて、それに対して正解か否かを教えるに留めている。

そのスタンスは優作を試しているようでもあった。

「これは私の推測だが……君の目的と組織の目的は少し違うのではないかい？　君は組織を守ろうとしているが、新一達も守ろうとしている。だから君はずっと新一たちの側にいるんだよ」

そしてそれは希望論でもあった。
しかしその希望すら彼は打ち砕く。

「んー、それはちょっと惜しいな先生。俺が工藤に連絡を取り続けるのは、組織を探るやつらを見つけるためでもあるんや。組織の薬と関連するアイツの周りには、ようけ組織の敵が来よるし。……しかも俺にはそういうことなんでも話してくれるしな、アイツは」

彼は、「親友」の信頼に対して苦笑した。

新一に対して心の中では無用心な男だとも思っていたのかと、優作は眉を顰める。

「でも俺一応組織の仕事するときは黒い服着てたんやけどなあ。ジヨディ先生の時とか幽霊船の時とか。まあ、普段もよう黒っぽい服着てるし、それだけで気付けっちゅうんも無理な話かもしれへんけど」

そのとき、平次の携帯のバイブが振動した。

電話だろうか？

だが彼はそのままポケットの中で通話ではなく電源ボタンを押し振動を止める。

「もうそろそろ工藤らが戻ってくるみたいやな。どうする先生？俺をこのままつきだすか？」

今の電話は組織からだったのかもしれない。
優作は苦笑で答える。

「それはしたくてもできないし、する気も無いよ。まだ君は息子をどうしようとか、考えてないみたいだね。……それに君が組織に関わっている以上、君のご両親も全く関係が無いとは思えない」

日本警察で二番目の地位を持つ警視監が組織の関係者。

それは最悪のシナリオだった。

彼の父親が警察官僚である限り、彼を捕まえることはできないだろう。

「ならばよ俺を捕まえなあかんで？ 俺の親父、あと数年したら警察庁の長官候補に挙げられるみたいやし」

白馬の親父が長官候補を辞退して俺の親父を薦めたらしいで？
そう言っていたはずっぽく口の端を上げた。

「そうになったら、この国はもう組織の手中ということになるのかな？」

「そういうこっちゃ。……じゃあ俺は寄り道してから和葉のところに戻るわ。俺は先生の言うとおり工藤たちに危害を加える予定は当

分無いし、全然これからも普通に先生と話せるけど、そちらがもう俺に顔合わせたくなかったらすぐアメリカに帰ることやな」

ほな、と気軽に挨拶をしてコートを翻した。

扉へと進み力チャリと階段へと続くノブに手をつける。

優作は、ここから彼を帰せばもう後戻りはできないと感じた。今は何もできないとわかつてはいても、思わず言葉をかける。

「待ってくれ。君は本当に……」

その瞬間彼のノブを回す手がふと止まった。

「そうや、初めて本当の俺を言い当てた人やから教えといてあげるわ」

優作の言葉を遮るかのように、今までの中で始めて見せる「構成員」としての笑みを浮かべる。

「……スピリタス。それが俺のコードネームや」

そう告げて彼は扉の向こうに去っていった。

階段を降りる音が扉越しに聞こえ、徐々に小さくなる。

そのコードネームを聞いて、優作は彼を止めることができなかった。
一体どういふつもりでその名前がつけられたのか。

一人になった屋上に、下から吹き上げられた桜がまだ舞っていた。
ライトに照らされそのまま再び地上へと落ちていく花びらは、無常
を表しているようにも見える。

この世の無常というものがそこにあった。

スピリタス。

それは世界最強として知られる酒の名前だった。

11 (後書き)

コミックス10、24、34、42、54巻参照

「ホントにごめんね博士、いきなり押しかけちゃって」

「全然構わんよ、おかずを持ってきてくれるとは本当に助かったわい」

蘭は阿笠宅でリビングの変わったデザインのテーブルに、タッパに入れたおかずをいくつか置いていく。

高校生が作ったとは思えない品の数々だ。

和葉も蘭の料理を手伝い、今も一緒にテーブルに並べている。

「ううん、こっちこそ助かったし……いきなりコナン君達が昼ごはんいらないうって言うんだもの。作った後に、コナン君からメール来たから焦っちゃったわ」

蘭はそう言っただけで困ったような顔をした。

彼女と和葉は六人分の昼ごはんを作っていたのだが、中々二人が帰って来ず連絡もつかなかった。

その後二時過ぎにコナンからメールがあり、「偶然優作おじさんに会ったから三人でどこかに食べに行くよ」という内容が送られてきた。

これによって三人分余分に昼食が余る事になり、ついでに夜ご飯のおかずも作ってしまったため処分に困ったのだ。

そこで蘭は、小さな子供と住んでいる博士におすわけさせていた

だこうと提案したのである。

小学生と老人、と言ってもまだ五十代なのだが、二人だけで住んでいては食事も大変だろうと考えたのだ。

二人は早速博士に電話をかけ、そのことを伝えたと「夜ごはんの用意がまだだったからこちらとしてもありがたい」という返事をもらった。

そして十九時頃、家を訪れたのだった。

小五郎には一人で食事を取るように言っ、二人はここで一緒に食べることにしている。

コナン達はその後再び連絡が取れなくなったので、帰ってきたら別で食べてもらうことにした。

「ホンマ、昼いらんならほ言ってほしかったわ。平次もそういうことは全然氣い付かんしなあ」

不平を漏らしながら和葉はタッパの蓋を取っていく。

そしてそれをレンジに入れた。

耐熱性のプラスチックがゆっくりと回り始める。

「あれ？ あの女の子はどうしたん？ 見かけへんけど」

「哀ちゃんのことかしら？ そういえば見当たらないわね……また地下かしら？ 博士」

蘭が尋ねると博士は内心ドキリとしながらも平静を装って答える。

「ああそうじゃ。地下の研究室におるよ」

コナンから組織の暗殺計画を聞いていた哀は、その場に行っても足手まといなことはわかっていたため研究室にずっとこもっていた。

自分に出ることやろうと。

彼は必ず生きて帰ってくると信じて、彼女は解毒剤を作るしかない
と思っていた。

そして博士も同じく家でじっと彼らの無事を願っているのだった。

「じゃあアタシ呼んでくるわ！ もうごはんやでーって」

「ああそれならわしが……」

「ええてええて、博士はもう座つといたらいいし！」

彼が止める間もなく彼女は軽快な動きで階段を降りていった。

地下の整備された研究室で一心不乱にキーを打ち続ける。
頭をよぎる不安をかき消すように、いつもより強くキーを打った。
一人しかいない地下室でその音はやけに長く響く。

己だけの世界が思い知らされるような反響だった。

その世界の中で、哀はパソコンのディスプレイをじっと見つめていた。

画面には複雑な記号と数字の羅列しか映されていないが、それは全ての闇を打ち消す鍵の一つである。

シルバースプレットに真の力を戻す唯一の方法だ。

組織を追いに行った彼らが心配でないといえば嘘になる。

だが、以前のような「殺されるかもしれない」という不安は何故が無かった。

——彼への信頼感が強まっているのだろうか？

あまり考えたことは無かったがそういうこともかもしれない。

哀は静かに微笑んだ。

その時、いきなり部屋の扉が開いた。

「哀ちゃん！ もうご飯やし、上来てなー！」

和葉の明るい声が部屋に響き渡った。

それまで集中していて、びっくりした哀は驚いた顔で振り向く。

真面目に考え込んでいたところだったので、本当に驚いた。

「え、ええ……すぐ行くわ」

「あっノックするの忘れたてたわ」

驚かしてごめんなー、と慌てて謝る。

そして、哀が向かい合っていたパソコンにふと気付いた。

煌煌と光る画面に無数の数字が踊っている。

彼女は興味深そうにそれに近づいてきた。

哀は慌てて画面を消そうとしたがまだデータを保存していなかったため、それができない。

「それ哀ちゃんが作ったん？」

「……そんなはずないでしょう。博士が作った薬のデータに興味が出たから見たたの。でも、数字ばかりでよくわからなかったわ」

まさか小学一年生の姿をした自分がこんな難解なデータを作ってる
とは言えない。

「へえー哀ちゃんってこういうのに関心があるんやなあ。……でも
これ一つ間違ってる部分あるで」

「え？」

和葉は少し屈んで哀の横から画面を覗き込んでいた。

「Fの……6やな。その数字が間違ってる。でもそれ以外は全部合ってるし、ただの入力ミスちゃうかな？　また博士に言っといえな」

彼女は背筋を戻しにつこりと笑う。

そのまま踵を返し、哀ちゃんもパソコン消してはよ一階きてなー、と付け足して扉の向こうに去っていった。

スリッパのする音がだんだんと上に上がっていったのがわかる。

哀は、和葉が出て行ったドアを見つめて呆然としていた。

「この数式を一瞬で理解したというの……？」

彼女が作った画面の数式は三時間以上かけたものだった。

「哀ちゃん、どうだった？」

「すぐ来るやって」

哀になぜか避けられていると感じていた蘭はほっとする。

今回もまた、自分のせいで彼女が出てこないのではと思ったのだ。

「それにしても、コナン君達まだ戻ってこないのかな……。おかずまだ少し温かいのあるし、なるべく早いうちに帰ってきてほしいのに」

皿に盛り付けた夜ご飯の品々を見て残念がる。

あとはもう箸を置くだけだ。

自由奔放なのはいいが、食事くらいは時間どおりに来てほしい。

そう思うのは致し方ないだろう。

「でも時間も時間やし、もうあきらめよ。おかず冷めるのはもうしやーないて」

「そうだね。あーあ、久しぶりに博士達と食べられるのは嬉しいけど、こんなことになるのなら昼のうちに夜の分まで作るんじゃないかな」

「ホンマ、蘭ちゃんは大変やなあ」

食費の節約を考える、いまどきにしては珍しい女子高生の嘆きに和葉は慰めて元気付ける。

「でも後悔先に立たずっていうやん。蘭ちゃんは自分でええと思ってやったことやる？ それに連絡して来おへんあっちが悪いんやし、もう放っておき！」

「……そだね、ありがと！ じゃあもう食べよっか？」

やっと蘭が持ち前の明るさを取り戻し、箸を置き始めた。その様子を見て和葉は優しく笑う。

——それに……

心の中で付け足す。
カーテンが風で大きく棚引いているのを見つけ、窓に歩み寄った。少しだけ窓が開いている。

「時の流れに人は逆らえへん……それを無理矢理ねじ曲げようとすれば……人は罰を受ける……」

彼女の弦きは窓に叩きつける風によってかき消された。

12 (後書き)

20 巻参照

寝台横にあるランプ以外何の明かりも無い薄暗い部屋に男はいた。男の側には一台のパソコンがデスクの上に乗っており、画面には何も触れなくても

勝手に文字が更新されていく。

「キャンティ、A地点に帰還」

「ウォッカ、現在F地点上空」

「ジン、V-5地点にて行動中」

構成員の行動がどんどん画面に現われる。

「スピリタス、A地点にて申告」

最後の行にはそう載った。

側に踊る文字に気にすることなく、ベッドの半分が四十五度ほど角度をつけた面に背中をもたれさせ、男は顔をゆっくりと隣に向ける。

そして、弱弱い動きで口を動かした。
声は出ない。

「オマエニ、ケガハナイノカ？」

側の椅子に座る青年は優しい笑みを浮かべて答える。

「ああ、俺は全然大丈夫ですよ？ どこも怪我してへんし、心配せ
んとして下さい」

その言葉に男はあまり動きの無い顔をなんとか緩め安心した表情を
見せた。

男はそれほど年を取っていなかったが、その全身から生気というも
のが全く感じられない。
何も知らない人間が見たら死んでいると思うかもしれないほど。

青年はそんな男にいたわるように話しかける。

「携帯に連絡来たとき、容態が急変したかと思て焦ったんやで？
あの時俺結構真面目な場面におったっちゅうのに」

そう青年が言うと男は再び口を開こうとする。

「あ、ええてええて。無理せんといて下さい。別に謝らる必要はないんですよ？ 話を切るにはちょうどええタイミングやったし。」

青年の言う「真面目な場面」というのは、先ほど来訪してすぐに報告済みであった。

男は何かしら思うところのある目で青年を見る。

——オマエハ、ソレデイイノカ？

その言葉の意味するところを理解した平次は、覚悟を決めてるような澄んだ顔をした。

「そんなん、今更や……アンタは何も心配せんでええ。俺はアンタの夢を絶対に実現させて見せる。絶対に……」

二時間ほど阿笠宅にお邪魔した蘭と和葉は、空になったタツパを入れた風呂敷を持って家路についた。辺りは訪問した時から暗かったが、風のほうは先ほどより強さを増しているようである。

「余るかと思うけど、全部食べれて良かったなあ」

「うん！ 久しぶりに博士とも食べれたし結果オーライだね。それに、哀ちゃんとも少し話せたし」

蘭は機嫌が良さそうだ。

哀と話せたというのが大きな原因だが会話は、

「哀ちゃんのお口に合うかな？」

「……ええ」

「あ、これお醤油つけて食べるやつだから」

「……わかったわ」

この二つだけである。

この程度の会話なら以前からでも交わしていたが、哀は蘭の目を見て答えることは無かった。

しかし今回はちゃんとこちらを見て答えてくれたのだ。それが彼女にはとても嬉しかった。

「そうやね。でもあの子、博士の何なん？ 親戚？」

「さあ、確か知り合いの子供だったかな。親が入院しているとかで博士が預かってるって聞いたことあるわ」

蘭もちゃんと博士に哀のことを聞いたことは無い。

コナンに聞くと今答えたような返事が返ってきたのだ。

知り合いの子供とは言っても博士は哀に孫、いや娘同然のように接しているように見える。

「親が二人とも入院することなんてないから、もしかして片親しかおらんのかなあ」

「そうかもしれないわ。私達と一緒にね」

「でも蘭ちゃんはあるのおっちゃん次第でどうにかなるんちゃうの？」

ニヤリ、としながら和葉が悪戯っぽく問う。

毛利家が冗談じゃないほど深刻な状態ではないのを知っているからだ。

夫婦二人が両思いなくせに、子供っぽい意地の張り合いを続けている、とも。

「もう、和葉ちゃんったら！ うーん、でもあれはお父さん次第よ。コレに関しては二人とも私達の一回り以上長く生きているとは思えないわ」

どれだけ私がお互いを会わせるのに苦労してるか、とため息をおおげさについて肩を落としてみせた。

和葉はそんな彼女の背中を「お疲れ様」とぼんぼんと叩く。

そうこうしているうちに二人の目の前に探偵事務所が見えてきた。道路に面した窓ガラスからテレビの明かりがチカチカと光っている。

「よかった、お父さん起きてるみたい。一人で食べていると勝手にたくさんお酒飲んで寝転んでることよくあるから……」

蘭が上を見上げて父親が起きているのを確認している側で、和葉は向かい合ったビルの方で「あるモノ」に気がついた。

あまりにも遠いため、他の人間になら気がつかないモノだが彼女に
なら感知できる。

——この感じ……この匂い……

「あ、蘭ちゃん先に戻つといてくれへん？ 向かいの歩道で今歩いて
いった人知ってる人かもしれへんねん」

「この東京に？」

「うん、以前東京に引越した知り合いっぱいねん。ちょっと挨拶
してくるしわ！」

蘭が止める前に彼女は走って道路を挟んだ向かい側へと渡っていつ
てしまった。

数十メートル離れたビルの屋上から、まっすぐ先を見据える。望遠鏡から見える毛利小五郎はビールを飲みながらテレビを見ていた。

他に何かをしている様子は全く無い。

「やはりあの男はシロか」

ジンは望遠鏡を目から離して一人呟く。

彼は今日の暗殺計画の裏側でキール奪還も画策していた。どちらも失敗に終わったように見えるが、彼にとっては収穫があった。

一つ目は、ターゲットの国会議員のスキャンダル発覚。

人通りの多い六本木のわき道で起こった巨大看板落下は大勢の野次馬を呼んだ。

慌ててターゲットとその相手の女は逃げようとしたのだが、目の前に落ちてきた看板を前にして腰が抜けてしまい民衆に知られてしまったのである。

これで彼の父である外務大臣にも悪影響が出るのは間違いない。

FBIとしては、暗殺計画さえ阻止できればよかったのでターゲットの保護はしていなかった。

もう一つはキール奪還を阻止した二人の男の存在。

把握していたFBIの人数とは合わないとウォッカから連絡を受けたジンは、他に協力している者がいると確信した。

実は暗殺を計画した時から、毛利小五郎にはその日に監視をつけることにしていた。

FBIにわざとばれるように計画したので、あの男もしかしたら何らかの動きを見せるかもしれないと考えていたのである。

そして今日、一日中部下に監視を命令していたが彼は何の動きも見せなかった。

数百メートル離れたところから監視していたので気付かれたとは考えにくい。

その結果を聞いたジンは念のため自らの目で今確かめたのだった。望遠鏡から見えるのは、飲んだくれのただの中年男。

どうやら本当に彼は関係ないらしい。

ちつと舌打ちをして口にくわえてた煙草を吐き捨てた。

するとその捨てた先に人の足が見えた。
それも女の。

「こんなところで何してんの、ジン。ここはあんたの管轄ちゃうやろ?」

13（後書き）

1日の読者数が初めて300人超えました。
このような長い話に付き合ってくださって、
皆様本当にありがとうございます。

部屋を出ると扉そばの壁に女が背をもたれかけて立っていた。
青い目をした、ブロンドの髪に整った顔。

この地下の無機質なコンクリートだらけの場所にはもったいなと彼は思った。

「小姓役も大変ね、スピリタス」

こちらに向かって含んだ笑みを投げかける。

「どっちかっていうと側近で言うてほしいなあ」

平次は苦笑で返す。

「どちらでもあなたにとっては一緒じゃない」

「ならあんたは奥御前か？」

彼が悪戯っぽく言い返すと、「それは違うでしょう」とベルモットは否定した。

「ボスが今も昔も愛していらっしゃるのはあの女だけ。私とはただの戯れに過ぎないわ」

ベルモットの言い草に彼は少し首をかしげる。

「そうやるか？ あの人はいぶあんたのこと気に入ってると思うけど」

「それだけならあなただってそうじゃなくて？ 私たちは「あの方のお気に入り」なのだから…」

「まあ、それでやつかみも多いけどな。行動を制限されへんのは助かるけど」

彼女はそんな言葉に首をすくめて「それもそうね」と答えた。

ベルモットとスピリタス、この二人だけは「あの方」の部屋にあったパソコンに勝手に名前が載ることはない。

ほかの構成員には発信機などがつけられているため自動的にパソコンに載る。

だが二人は自ら申告して載せるのだ。

自分の行動を知られたくないときは申告しなくてもいいという待遇だった。

これが、この二人が「あの方のお気に入り」といわれる所以である。

「あの方」から絶対の信頼を得ているのだ。

「あなたこれからどうするの？」

「待つとる奴おるし一旦戻るわ。……もしかしたらもつかいこつちに来るかもしれんとは言つてあるけどな。カンパニーのことが気になるし」

「ああ、あのキール絡みのやつね」

コナンを「利用」して本堂瑛祐の素性を探った彼は、キールがいわゆるカンパニーに関係しているかもしれないと組織に報告してあった。

ジンがウォッカに、キール殺害を許可したのもそのためである。FBIに加えカンパニーまで敵に回すのは少しきつい。

「立場もわかるけど、側近ならもう少しここに来なさいよ。ボスが寂しがっているわ」

「それはあんたの力でどうにかしてもらわんと。俺かて都合つけてここ来るの大変なんやしな。あんたと違って、俺はまだ保護者うちゅーもんが要る年なんやで？」

あまり大変そうな素振りを見せない顔で不平を言う。
どう見ても最後の言葉は嘘だ。

ベルモットは「保護者」という単語に声を上げて笑った。

「保護者、ねえ？同盟を結んだ本部長がボスに会いに行くあなたを止めるとは思えないけど？」

「まあ、そういうことにしといてえや」

あまりこの話題には触れたくないのか、「ホンマあんだとの会話は
疲れるわ」と会話を切り彼は再び足を進めようとした。
背中越しに、彼女が思い出したように問いかける。

「そついえばあの子は元気にしていらっしやるのかしら？」

「さあ、誰のことやるか？」

「わかってるくせに」

暗闇のビルの屋上で黒服をまとった金髪の男と、真っ白なジャケットを着た女が面と向かい合っていた。

「……ラムか。何の用だ」

ジンが捨てたタバコに視線を下ろし、眉をひそめた和葉は男に厳しい視線を向けた。

「その名前で呼ばんといってくれへん？ 私、あんたらの仲間になつた覚えはないし」

不機嫌そうに言い返す。

ラムと呼ばれるのが本当に嫌らしい。

「毛利さんの監視は平次の管轄のはずやろ？ 自分から頼んでおいてなんでいんねん」

「フン……俺は用心深い性格だからな」

「これ以上この米花町にうろつくなら、私も殺される覚悟で防ぐで」

「言われなくても今日で打ち止めた。袖に暗器を忍ばせておいて、殺されるとはよく言つたもんだぜ」

牽制をあつさりとかわし、和葉のそばを通り過ぎていく。

一瞬暗器の針を使おうかと考えたが、打ち止めたと答えたので思い止めた。

横目で彼が過ぎていくのを見過ごした時ジンがふと止まりこちらを

見る。

彼女は目で追わなかったので振り返ったのがわからない。

「……それにお前は「あのお方」の血を引く唯一の人間だ。そんなやつを殺すほど俺は身の程知らずではないからな」

和葉はジンに向かって一度も振り返る素振りも見せず黙っている。返事は期待していなかったらしく、そのまま彼は去っていった。

二十一時を過ぎた東京はここからが本番だと言うように煌煌とライトが照らされている。

人通りはまだ多い。

ジェームズの車に乗っているコナンは後部座席から外の様子を見た。

どうやらまだ風が強いようだ。

通行人の上着や道路沿いの並木が風に煽られ後方に棚引いている。

——俺に吹いている風も逆風なのかもな

彼は、手に持っていた地図をくしゃりと握り締めた。

構成員を追うときに利用したものである。

ついさっきまで暗殺計画を実行した構成員を追っていたコナン達だったが、出遅れたせいもあって全員逃すことになってしまった。

暗殺阻止という最低限の目的は果たしたとはいえ、組織に関する手がかりが全くつかめなかったことが悔しかった。

「あまり自分を追い詰めることは無い。これから組織と対峙することはまだあるだろう。一回、一回のチャンスを手に入ればいいのさ」

心中を察したかのようにジェームズが声をかける。

「わかってるさ。でも俺だって感情に負ける時もある」

探偵でも人間なのだから。

努めて冷静でいようと常に心がけているが、冷血ではない。

うるたえる事もあれば悲しむこともある。

それで我を失っては元も子もないのだが。

その辺の境界線は自分には出来ているだろうかと思った。

ふと、自分のポケットから振動が伝わってくる。

本日二回目の「父」の表示。

急いで通話ボタンを押した。

「もしもし？　大丈夫だったか、父さん」

「ああ。……もう知っていたのか」

「さっき服部から電話があったからな。あいつは残党を追ってもう少し遠くまで行ったって言うてたけど」

杯戸中央病院へ戻るこの車で、先ほどコナンに服部から電話が入っていた。

水無怜奈の奪還計画に優作が気付いたから二人で病院へ戻ったと。そして撃退した後、逃げた構成員を追って平次はバイクを走らせた。とコナンは聞いている。

「深追いすんなっていつも言ってたんだろ？」と注意したが、彼は「しゃーないやん、せっかく見つけたんやし追いかけんと」と悪びれ

る様子も無く電話越しに笑っていた。

相変わらず血の気の多い奴だと、彼のセリフを聞きながら苦笑したものだ。

そんな息子の返事に優作は少しだけ間を置いて、告げた。

「これから父さんは少しの間東京を離れるよ」

父の声がさつき別れた時よりもいくぶん無機質だと思ったが、襲撃直後でまだ気が張っているのだろうかと思いコナンは気にしなかった。

それよりも東京を離れるという言葉に驚く。

「離れるって、アメリカに帰るのか？」

「いや、日本にはいるよ。ただ少し調べたいことがあるから遠出をするつもりなんだ」

「調べものってなんだよ」

「それはわかってからちゃんと教えるよ。……それまで、気をつけるんだぞ新一」

「……ああわかった。父さんもな」

そこで親子の会話は終わり、コナンは電源ボタンを押した。

短い会話だったが親子は通じ合うものがあつたらしい。

父の調べ物に興味はあつたが彼が教えるつもりが無い以上、こちらから聞き出すことは不可能だと判断していた。

しかし、東京に来てすぐまた遠出とは。

彼は何かが引つかかるものを感じた。

「父親からかい？」

「ああ。少し東京を離れるってさ」

「そうか。水無怜奈奪還の阻止をした礼を言いたかったのに残念だな」

また俺から言っておくよ、とコナンはフォローする。

そしてしばらくバックミラーを眺めた後徐に口を開いた。

「なあ、ジエームズさん。俺の身边に構成員がいるって言ったら信じるか？」

ジエームズは同じくミラー越しに少年を見る。

少年の顔は真剣だった。

どう答えたものかと一瞬躊躇する。

「……我々や君の動きが組織に知れているとしたら、その可能性は大きいね」

彼の答えは限定的だった。

「だから捜査協力を日本警察に要請しないんだろ？」

はぐらかせはしないとはかりに聞いたです。

証拠が無いという理由だけでFBIが日本警察に黙って、ここまで極秘潜入をするのもおかしいと以前からコナンは気付いていたのだ。

「君は警察に組織関係者がいると推理しているのか」

「可能性として念頭に置いていただけさ。だが……」

建物を出た平次は停めてあったバイクからヘルメットを取った。

周りに人はいない。

静かな場所である。

携帯をコートから取り出し「今から戻る」とメールを打った。

恐らく心配してるだろう、彼女は。

また怒られるかもしれんなと彼は苦笑した。

送信してバイクに乗ろうとしたが、なんとなく来た道を振り返る。

コンクリートで整備されたその建物はとても冷たく感じられた。

外見も、中身さえも。

——カンパニーも動いたとなると、FBIも何かやらかすかもしれないな。

今回の暗殺未遂においても、逃走中の構成員が一人撃たれている。

サイレンサーをつけていたとはいえ、日本の都市で銃を撃つのはかなり彼らが覚悟を決めているということだ。

いつ開き直って組織に向かってくるかわからない。

ボスには一応「あまり目立った動きはしないほうがいい」と進言している。

だがそれだけでどこまで抑えられるか確信は無かった。

強風が雲をはじき月が姿を見せる。

コナンと平次は違う場所で、混沌とした状況で、同じ星空を見た。

「そろそろ守りは終わりがちなあ、工藤……」

「不可能な物を除外していつて残った物が例えどんなに信じられなくても……それが真相なんだ」

カウントダウンは始まったのか終わったのか。

それとも――

前編 / 完

15（後書き）

はい、ここで一旦区切ります。前編終了です。

次からは後編ですので、また見に来てください。

前編と後編で大きく話が変わってきますので、コミックスやこの前編を色々深読みしてみるのもいいかもしれません。

15・5（前編まとめ）

ちょうど前編が終了しましたので、少し今までの話の展開を説明しつつ

人物紹介を載せようと思います。

後編は前編以上にややこしくなってくるのでここで一つおさらいを兼ねて。

少し後編の伏線も含んでいます。

退屈しのぎに読んでやってください。

（後編にも出てくる人物）*他にも増える可能性があります。

江戸川コナン：表の主人公。哀とともに組織を追う。自分の身近に構成員がいると気付いて

いるが、それは警察関係者だと思っている。（ある意味当たり）

灰原哀：元構成員。「あの方」の正体を知っているものと思われる。
父・宮野厚司の

幼少時の作文を入手中。

工藤優作：息子に代り平次の正体を追求。どうやってボスのコードネームを知ったかは

今のところ謎。現在東京を離れ何かを調査している模様。

赤井秀一：FBIの捜査官。射撃の腕前が抜群。灰原と顔を合わすわけにはいかないらしい。

ジョディ・スターリング：FBIの捜査官。優作から組織関連のことを質問された。

ジェームズ・ブラック：FBIの捜査官。ジョディの上司。コナンから「警察関係者に

組織の人間がいるのでは」と聞かれ否定しなかった。

服部平次：裏の主人公。組織構成員。コードネームは世界最強の酒である「スピリタス」。

「あの方」のお気に入りで、側近を務める。任務は恐らく小五郎の近辺、

FBIの監視。「あの方」から絶対的な信頼を寄せられている。

遠山和葉：コードネームは「ラム」。しかし本人は認めていない模様。

組織の人間ではないらしい。ジン曰く、「あの方の血を引く唯一の人間」。

哀に劣らない程薬学の知識に富む。

ジン：組織構成員。恐らく幹部。平次のことを完全に信用してはい

ない。和葉に関する

何かしらの事情も知っている様子。

ベルモット：組織構成員。いわずと知れた「あの方のお気に入り」。
多分こっちが第一号。

ボスに対して何かしら思うところがあるのは公式設定。

ボス（あの方）：組織のトップ。コードネームは「パイカル」。

前編を見る限り、体が弱いらしい。なぜか平次と
ベルモットを寵愛する。

こんなところでしょうか。

さて、次からは後編です。前編に比べはるかに捏造設定が増えます。
むしろ大半捏造。原作の伏線も「あるネタ」に関してだけ確実に使
う予定。

APT X 4 8 6 9 ネタも多分使います。

後編の最初は自分の短編ネタも引っ張ってきていますので、知って
いる方だけニヤリと
して下さい。（笑）

それでは、後編もお楽しみいただけたら幸いです。

後編：序章

高校一年生の、春の頃だった。

「きゃっ」

「うおわっ」

突然後ろに振り返った拍子に階段を段差から足を踏み外した和葉は、平次に受け止められる。

幸い平次のほうが先に階段を降りていたため、下からしっかりと彼女の体を支えることが出来た。

「いきなり何やつとんねん！ 危ないやろ！！」

「う、ごめん……」

日曜の夕方、円山公園の桜を見ていた二人はそのまま八坂神社の階段を下って四条へ出ようとしていたのだ。

そんなに早く降りていたつもりは無かったのに、彼女がいきなり自分の左上から倒れてきたのでびっくりした。

平次の右目には大きな眼帯。

死角の右から倒れられたらえらいことになっていただろう。
そんな危機感と驚きから、思わず怒鳴ってしまった。

怒鳴ってから後悔したが言ってしまったものは仕方が無い。

いつもの彼女なら言い返すところだが、今日は謝るだけで理由は言おうとしなかった。

桜を見ていたときふと平次が漏らした一言が、和葉を再び公園へと振り返らせたのだ。

——なんで桜の下には死体があるんやろう

本当に死体があるのかと確認するように振り返った。

距離的にも、あの公園の桜が見えるはずも無いことはわかっていただけ。

「けがはないんか？」

「う、うん」

——そんな痛そうなもんしておいて、私のほうを心配してくれるんやね

全く、ホンマどんくさいやつぢやなあと言いつつ平次は安堵した表情を浮かべて、彼女をしっかりと立たせる。
そして再び階段を降りはじめた。
和葉もその後を追って下る。

「なあ平次」

「ん？」

「来年も、一緒にここ来ような」

「ああ。ええで」

来年も、いくつになっても、また二人で一緒に……

後編：1

国会議員暗殺事件と水無怜奈奪還計画が未遂に終わった次の日の朝。

コナンは優作が出て行った工藤家へ一人で来ていた。

いや、「戻っていた」と言っただろうが正しいか。

自分の家なのだから。

ちなみに平次は和葉とともに横浜に行っていた。

横浜に自分の母方の祖父が住んでいるそう。

以前言っていた、あの色黒の遺伝を持ち合わせた方なのであろう。

「久しぶりに俺らに会いたいそうやし、ちょっと行ってくるわ」と言っ二人でバイクに乗って行った。

平次の中型バイクや、二人の東京までの交通費はほとんどその祖父から貰っていたらしい。

鉄道会社や航空会社の大株主で、優待券が山ほどあるらしくそれを平次にあげていたそう。

あの東京へ来る頻度を考えると年間パスを貰っているのかもしれない。

平次の両親も、祖父がもう高齢で使う機会の無い優待券を孫にあげていることは大目に見ているのだとか。

——どうりであの男が東京に来るのにためらいが無いわけだ。

親からゴールドカードを貰っている自分が言えた義理ではないが、

あの男も親からは厳しくされている分祖父に随分甘やかされているのだろう。

そんな朝のやりとりを思い出しながらスペアキーを鍵穴にいれ、扉を開けるとあらかじめ予想をつけていた部屋へと向かった。

優作の書斎部屋である。

コナンは自分の父親が帰国して調査をしているものに疑問を抱いていた。

帰国してすぐFBIに会いに行ったり、かと思えば次の日は東京を出てどこかに行っている。

一体どんな手がかりを掴んで父親は調査をしているのかと気になったのだ。

ちゃんとした事実がわからない限り、自分に言うつもりは無いと優作は言っていたが、恐らく何かしらの真実は手にしているだろうとコナンは踏んでいる。

あの推理に関しては完璧超人な彼がはつきりとした事実の無いまま動くとは思えない。

鍵のかかかっていない書斎部屋の扉を開けてすぐ机の引き出しに歩み寄る。

小さな背を精一杯つま先立ちして上からどんどん開けていった。

様々な書類が中にどっさり入っている。

アメリカに行く前から置いてある物が大半だ。

しかし彼が使う部屋といえばこの書斎か居間しかないから、帰国して何かをするとすればここしかない。

優作が掴んだ事実の何か手がかりがあるはずだ。

やがて一番下の引き出しに手をかけて中を覗き込んだ。

「……！これは……」

真新しい透明なファイルに入った何かのコピーが数枚出てきた。
何かの名簿のようだ。

中身を取り出しざっと全てを見る。

ファイルに入っていた紙は二種類あった。

一つはまだ新しい名簿をそのままコピーしたもの。
もう一つは随分古い名簿を見やすくするためカラーでコピーしたもの。

後者の名簿には覚えがあった。

「美國島の儒艮祭りの名簿じゃねえか」

平次に誘われて行った人魚の住む島と言われる美國島。

そこで起こった連続殺人事件で犯人に見せてもらった、祭りの参拝者歴代名簿だった。

この祭りとは、永遠の命を授かるという言い伝えがある有名なものだ。

毎年名だたる著名人がお忍びで来るらしく、村の皆で冷やかしながら名簿を見ていたという。

殺人事件でその永遠の命も薄れてしまっただろうが。

——しかしなぜそんな名簿を父さんが？

いぶかしみながら以前も見たことのある名簿を一つ一つ見ていく。

事件の時は平次と手分けして名簿を探っていた。

自分は比較的新しいほう、平次は昔のほうから見ていたのを覚えて
いる。

優作のファイルにはそのどちらも載っていた。

しかし数枚なので、限定してコピーしたということなのか。

「一体何があるっていうんだこれに……」

平次が見た、古いほうの名簿には数十年前の国の権力者が名を連ね
ている。

例えば、

元外務大臣・夷千恵蔵

官房長官・大黒連太郎

日銀総裁・豊田敬二

平次曰く「昔、日本を動かしたお偉いさん」がたくさん載って
いた。

「俺らが生まれる前の権力者しか載ってないな。それでこっちが俺も見た最近の名簿か」

二度目と言うことで、パラリと表返してなんとなく眺める。
が、見知った名前を見つけ凝視した。

「宮野……志保」

そつえばあの事件の時もこの名前は見つけたが、「永遠の若さと美貌を欲しがるタマじゃねーし」と素通りしていた。

しかし、優作もこの名簿を見たということはやはりこの「宮野志保」は灰原のことなのか。

隣に書いてある名前にも注視する。

まさかと思ったが、隣の名前もしかすると。

「魚塚三郎、黒澤陣……っておいこれ……!!」

宮野志保が灰原だとすると、隣はウォッカとジンではないのか。

「永遠の命を司る祭りに組織が調査に行っただのか……？」

前々から、組織が命に関わる何かを作っていることは大体予想して

いた。

灰原が時々漏らす言葉からもそれは受け取れる。なので、それに関連してこの祭りにも調査に行ったということは想像にたやすかった。

「じゃあもう一つのほうの名簿は……」

その勢いで真新しいほうの名簿を手取る。

自分がまだ見たことの無い名簿だったが、載っていた名前は見知ったものばかりだった。

毛利小五郎、鈴木園子、と並んで蘭の名前が無いところからするとベルモット絡みで起こった幽霊船の参加者名簿のようだ。事実、園子の隣には「工藤新一」と達筆な文字で自分の名前が書いている。

そしてその横には「明智文代」。

「服部と母さんだな」

自分に代わって幽霊船に乗船してくれた友人の名前と、それに協力した母の偽名が載っていた。

幽霊船の名簿には他にも大勢の名前が書かれていたが、全員コナンの知らないものたちばかりであった。

なぜこの名簿を優作が手に入れたのかはわからないが、美國島の名簿にはコナンも思い当たるところがある。

宮野志保、ジン、ウォッカの名前。

父は組織の行動を探っていたのかもしれない。

そしてそんな名簿を自分の息子に見られるような場所に置くところから、自ら言わない代わりに見つけられても構わないとも思っていたのか。

とにかく、コナンは当の「宮野志保」にこの名簿のことを聞こうと隣の家に向かうことにした。

後編：1（後書き）

コミックス28、42巻参照

コナンは工藤家を出た足でそのまま隣の阿笠宅へと向かった。呼び鈴を押すと出てくるのは大体哀である。

博士の腰を気遣ったのこらしく、この訪問客への対応はほとんど彼女が行っていた。

今も例に漏れず、彼女が出てくる。

「よお」

「……なんか用かしら」

いや、そこまで嫌な顔をしなくても。

コナンは少しだけ顔をひくりとさせたが、なんとか笑顔を見せ「少し聞きたいことがあるんだけどいいか？」と聞いた。

哀は一瞬眉を動かす。

だがすぐに「いいわよ別に」と言って先立って中に入ってしまった。彼もその後が続く。

中に入ると、一昨日と同じくコーヒーが出された。

博士も隣にいる。

コナンと哀を纏う重い空気におどしているようだった。

三人ともその辺にあったインテリアのチェアに座り話し合いの準備は整う。

「で？ 聞きたいことって何かしら」

哀はまだ不機嫌そうだ。

この彼女の機嫌が斜めなのはコナンのせいであつた。

昨日の暗殺未遂事件の連絡を帰るまですっかり忘れていたからだ。

事件が長引いたのは彼の責任ではないが、連絡を忘れたのは言い逃れできない。

病院で平次と合流して帰宅したのが十一時過ぎ。

蘭にも散々怒られたが、哀のように怒らないまま黙っていられるのも中々怖い。

心なしかコーヒーも前のブラックと同じはずなのに、より苦いような気がする。

内心冷や汗を掻きつつ、内容が内容だけに居住まいを正して单刀直入に切り込んだ。

「この名簿。覚えがあるだろう？」

藤家から拝借した美國島の名簿を取り出して見せる。

彼女が少し目を見開いた。

「……それがどうかしたの？」

「俺も行ったことのある美國島の長寿を願う祭りの参拝者名簿だ。ここにお前の本名が載っていた。隣にはジンやウォツカらしき名前もあつたんだよ」

頼むから教えてくれ。

彼の目はそう強く言っていた。

その時一瞬間ができる。

だがすぐに彼女は合わせていた目を横にそらした。

博士もそんな彼女を心配そうに見つめている。

「……もうそろそろ、いいんじゃないのか？お前の父さんの家は全焼するし、昨日は国会議員が殺されかけた。早いとこ手を打たねえと、俺達の正体だってばれかねないんだ。俺が聞くことだけでも教えてくれないか？」

その言葉に、彼女は記憶に残っていたあのセリフを思い出した。

——いつもいつも、あと少しというところで……

三日前コナンが言ったものだ。

組織の足取りを掴もうとすると寸前でその手がかりが消えてしまう。この事実と彼が推理していた「身近なところに組織の人間がいる」という可能性を考えるなら、自分が黙秘し続けるのに害はあっても利益は無い。

言いたくないことと自己の保全は結びつかないのだ。

哀はため息を一つついた。

「ええそうよ。ジン達と私はその美國島に行ったわ。……組織が開発している薬の参考のためにね」

ついに重い口を開いた彼女に、コナンは息を飲む。

「その薬ってというのは……」

「それに関してはまだ言えないわ。ただ、あそこに言ったのは永遠の命がもらえるという、信ずるに難い言い伝えのためだけではなかったの」

意外な真相を彼女は告げる。

何故か博士が驚いたような顔を見せた。

コナンの後ろにいたため彼には気づかれていなかったが。

「つまり、言い伝え以外にもあそこに行く理由があったということか」

「そういうこと」

一旦コーヒを啜って、ふう、と息を吐く。
そして天井を見た。

その先は中々言いにくいことなのか、彼女は躊躇っているようにも見えた。

しかし、

「……今のボスの先代、つまり組織の初代統括者が昔あそこを訪れていたのよ」

がたん、と大きな音が居間に響いた。

コナンが椅子を倒すほどの勢いで立ち上がったからだ。

「ボスは二人いたのか!？」

可能性として考えていなかったわけではない。

しかし組織の構成員の中にはピスコのような老人もいたし、他にも権力者が多数属していることは想像できた。

だから、そのような者達を束ねるのなら様々な経験をつんだ老獪な人物なんだろうと踏んでいたのだ。

若い者があそこまで巨大な組織を作り上げることは不可能だとも。

「厳密に言うと、今で二代目のはずね」

だが一代目が存在して、そちらが組織の土台を作り上げ二代目で組織の勢力を拡大させたのなら話は別だ。

むしろその考えのほうが無理が無い。

「一代目はまだ生きてるのか？」

「死んだから二代目に移ったって聞いたわ。多分老衰だったんじゃないかしら。先代がかなりお年を召していたっていうのは聞いた事があつたし」

彼女は何でも無い事かのようにさりと言つ。

コナンは暫く考えるような仕草をしていたが、再び哀に目を合わせた。

先ほどよりも目つきが厳しい。

「前にも聞いたが、お前はボスの正体を知っているのか？」

以前ボスのアドレスが「七つの子」と博士に告げたとき、側にいた彼女はコナンに警告をした。

「開けてはいけないパンドラ」だと。

そして「ただでさえ信じ難い人物が浮かび上がってくるかもしれないんだから」と言つたのである。

あの時は答えをばぐらかされたが、彼女がボスの正体を知っている可能性は大いにあつた。

しかし当の本人は苦渋の表情で首を振る。

「……知らないわ。会ったことないもの」

その答えにコナンは満足しないようであった。

まだ彼女が隠していると思っているのかもしれない。

「ご不満のようね。……じゃあもう一つだけ言っておいてあげるわ」

そんな彼に哀は何かを含んだ笑みを浮かべた。

「前にも言ったけど、私はA P T Xを毒薬のつもりで作っていなかった。それだけは断言できるわ」

「俺は毒薬でもなんでもない薬で小さくなったっていうのかよ」

「工藤君や私が飲んだ試作品は偶々毒薬だったのかもしれないわね」

二人の間に不穏な空気が流れた。

博士が慌てて取り繕うように割って入る。

「ま、まあ、その辺にしておいたらどうじゃ。コーヒーもすっかり冷めてしもったわい」

博士の言つとおり、彼らのコーヒーは今の二人を表す様な冷たさだ
った。

2 (後書き)

コミックス18、24、46巻参照

正午過ぎ、平次と和葉は横浜市内をバイクで走っていた。平次の祖父宅を訪問した帰りである。

元政治家である祖父宅は寝屋川の服部邸を上回る大邸宅で、そんなところに縁の薄い和葉は訪問中緊張し通しだった。

優しい人だったがやはりああいうところは慣れない。

幼い頃から遊びに来ていた平次は全く気にしてないようだったが、挨拶程度の訪問だったので、数時間話した後すぐ東京へ戻ることになった。

バイクに乗りちやうど東京と横浜の県境の休憩所に寄って、少し体を休める。

二人乗りというのはバランス感覚が必要となるので見た目よりも神経を使うのだ。

平次が備え付けの自販機でお茶を二本買って、バイクに凭れ掛かって待っていた彼女に渡す。
そして明るい声で告げた。

「和葉、俺お前を姉ちゃんちに送ったらまた出かけるわ」

その言葉に和葉の顔が曇る。

「一人で？」

「そうや。夕方頃には戻るし適当に理由つけといてくれへんか」

何も聞かないでほしいと彼の顔は言っていた。

しかし昨日から気にかかることがたくさん出てきた彼女は、そういうわけにはいかなかった。

「組織のところ、行くんやろ？」

開いていないペットボトルを両手で持ったまま彼に視線を合わせる。バイクに凭れ掛かっていることもあり、少し見上げる形になった。

「昨日の夜探偵事務所の近所でジンを見つけてん。あの人、事務所を見張ってたわ。平次におっちゃんの監視を頼んでおいたのに自分でも確認してた。……それに、昨日は平次のおじいさんの政敵やっただ家系の国会議員のスキヤンダルがあつた日やし」

「……和葉、」

諫める様に平次が彼女の名前を呼ぶ。
しかし構わず言葉を続けた。

「あと、阿笠博士の家でA P T Xのデータが入ったパソコン見つけたんよ」

平次が息を飲んだ。

「平次は何も言わへんけど、あの人、やっぱりそうなんやろ？ 蘭ちゃんやそのお父さんは何も関係ないと思う。でも工藤君はやっぱり組織に……」

「和葉！！」

先ほどよりもきつい口調で呼ぶ。

そこから先は言うてはいけないと。

だが彼女は彼よりも更に声を上げて訴えた。

「わかってんねん！ 私が組織のことを知ろうとしたり、平次達の行動に対して何も言ったらあかんことは！！ でも、でもな……」

凭れ掛かった体を立ち上がらせる。

そしてまっすぐ彼と向かい合った。

「心配くらい、させてえな……っ！」

搾り出すような悲しい声。
彼女の瞳は揺れていた。

少し、平次が驚いたように見えた。

「私は、真実を知る代わりに組織に関わらんことを誓った。それは約束やし破らん。でも、平次のことが心配やねん。心配で心配でたまらんねん」

そのまま和葉は俯いて黙ってしまった。

平次はそんな彼女を苦しそうに見つめていたが、暫くして頭をぽんぽんと叩いた。

「……心配せんでも、俺は大丈夫や。昨日かて無事やったやろ？ お前は何も不安がることはないねん。何もな……」

それに、と付け足す。

彼女にだけ見せる穏やかな表情だった。

「あの薬の研究、消滅させたくないんやろ？」

その言葉に和葉は俯いていた顔を上げる。

「俺はあの人の夢も実現させたい。そのためには、やらなあかんことがあるんや」

「そのために、今から行くんか？」

「そうや」

そこで彼らの会話は終わり、再び東京へとバイクを走らせた。
走っている間二人は無言だった。

米花町まで着くと、事務所から彼らが見えないぎりぎりの場所で彼女を降ろす。

そして今まで何回も言った言葉をまた繰り返した。

「あのお守り持った？」

「ああ、ちゃんと持ってたんで。安心し」

そのまま平次は再びバイクに跨り、来た道に戻っていった。
彼の消えていった方向を和葉はずっと見た。

——それが二人で交わす最後の会話になるかもしれないとは知らずに。

コナンが哀に組織について質問し、平次が和葉と横浜市内をバイクで走っていた頃、優作は大阪に来ていた。

ある人物と会うためである。

昨日の夜のうちに、「彼」が今日大阪府警本部にすることを警視庁で確認していたため、行き違いになることはないと言っている。少しでも会える確立を高くするため、交流のある警視庁のさる上官に頼んで、前もって「友人の工藤優作がそちらへ行くから好感ある対応を望む」と朝のうちに私的な連絡がしてあるはずだ。

しかし仕事を理由に断られることは可能性として高かった。断られないほうが低いかもしれない。

果たしてこの来阪は吉と出るか凶と出るか。

こればかりは流石の推理小説家もわからない。

ただ、今まであまり親らしいことをしていなかった分やれることはやろうと決めていた。

「服部本部長、警視庁から連絡のありました工藤優作氏がこちらへ参られたようですが、どうされますか？」

日本警察で二番目の階級を持つ大阪府警本部長の執務室には、その部屋の主が革張りの椅子に座ってファイルを手にとっていた。彼がいるだけで辺りは威圧感に包まれているように感じる。

来客の知らせに服部平蔵本部長は少しだけキャスターのついた椅子を動かした。表情に変化は無い。

「お通しせえ」

低く、よく通る声が静かに部屋を響いた。

数分後優作がノックと共に入ってきた。

暫く間が空いたのは、何回目かの身体検査を受けたからだ。

このご時勢、警察官僚に一般市民が突然会いに来るのはどうみても怪しかったのだろう。

まだ優作を疑って一緒に入ろうとする警備員を平蔵は外で待機するよう命じ、部屋には二人だけにする。

警備員が扉を閉めると、優作は一礼をし急の訪問を詫びた。

「突然の訪問真に申し訳ありません、服部本部長。あなたのご子息の友人である工藤新一の父親で工藤優作と申します」

推理小説家としてではなく、「工藤新一の父親」として名乗り上げる。

平蔵の右頬が少しだけ動いたように見えた。

「いや、こちらこそウチの愚息がホンマに世話になっております。どうぞ、おかけになってください」

自身も椅子から立ち上がってデスクの前に設置された、机を挟んで向かい合う二つソファの片方に歩み寄った。促された優作も会釈してから座る。

お互いが向かい合う形になった。

「昨日から連絡は来とりました。随分色んな人脈を持ったはるみたいですね」

警視庁の松本管理官から連絡が来れば無視はできないだろう。彼のセリフは暗にそれを示していた。

「仕事柄よくお会いした時期があっただですよ。……しかしあなたとお会いしたかったのは仕事のせいではありませんけどね」

すぐ本題に切り込む言葉に、元々張っていた空気が更に張り詰めたものになる。

しかし平蔵は何も言わない。
そのまま続けろということだろうか。

「ところで遠山刑事部長は今日はいらっしゃらないんですか」

「……あいつは今別件で出ておりますわ。何か用があっただんですか」

「いえ、ご本人ではなくてもあなたに聞けばわかることだと思えます」

遠山不在の返事にあまり残念そうな顔はせず話を戻す。

「昨日、あなたのご子息である平次君と会いましたよ。とても利発で良い子ですね」

一昨日の夜に、優作に会うため平次と和葉は大阪を出たのだからそれは知っているだろう。

しかし昨日の暗殺未遂事件の真相に関しては、息子から直に知らされていたのかどうかはわからない。
全く知らないわけではないということは確実だろうが。

「ウチのはまだまだ未熟ですわ。やのに、変に頭だけは良く回るから始末に困つとります」

「それは私の息子もそうですよ。頭と心の成長が比例していないうちに探偵をやり始めたから
今色々と苦労しているみたいです」

「色々、ですか？」

色々。

それは幼児化してからの新一の様々な出来事を意味する。

平蔵の質問はそんな優作の言葉の真意を読んでいるかのようだった。

この男はコナンをどこまで知っているのか。
そして本当に黒の組織に繋がっているのか。

ここからが優作の腕のためしどころだった。

4（後書き）

うちの優作さんは良く動く。（笑）

さあ、次からはこの作品の真相に触れ始めます。

「色々、ですか？」

「ええ。理屈だけではまかり通らぬ事件に遭遇する度苦勞しているようですね」

平蔵の試すような問いかけにあっさりと流す。
本題は息子のことではないのだ。

「息子が小さい頃から放任主義過ぎたのもいけなかったのでしょう。あの子は外に出ず毎日家に籠っては読書三昧な日々を送っていましたから……。おかげで息子はあまり人の情というものを理解しないまま高校生になってしまいました」

昔からの付き合いである蘭や園子以外の人間とはさほど心を通わすことがなかった。

困ったように彼は苦笑する。

「しかし、最近息子は変わったように見えます。年相応の心といえますか……。少年らしい心を持ち始めた」

昔馴染み以外にも、本当の自分をさらけ始めた。
その理由はただひとつ。

「生まれて初めて自分と同等の能力を持つ親友に出会えたおかげだ
と思います」

頭脳明晰な高校生探偵として名を馳せる同じ立場の人間。

それが平次だった。

新一自身が認識している以上に、平次との出会いは大きな影響を与えているのだ。

「平次君は新一にとっても大切なものをくれました。それは幼馴染の
蘭君でもできなかった、
何かを共有する喜びというものです」

誰かと何かを分かち合い、それをお互いに喜び合うという経験。
今まで新一が知らなかった感情だった。

そして自分の考えを認め、尚且つそれを実行してくれる人間として
も彼の存在は大きかった。

『推理で犯人を追い詰めてはいけない』『推理に上も下もない』

そして、

『最後に残ったものがたとえどんなに信じられなくてもそれが真実』

「しかし昨日平次君は私にこう言いました」

一体何者かと聞くと彼は穏やかな笑みを浮かべてこう答えたのだ。

「『真実を解き明かすだけでは、何の解決にもならない』」

その言葉に少しだけ、平蔵の眉間が動いたように見えた。

「我々の息子の年代では、真実を知ることがどういうことかまだはつきりとはわからない

時期です。様々な事件を体験した新一でも、真実を求めることが唯一の正義だと信じている途中です。どれだけ信じられないことだとしても、それが真実である限り認めなければならぬと。……しかし、平次君は更にその上の何かを知っているように見えました」

真実を見つけるだけでは事件は終わらない。
平次はそう言ってるかのように思えたのだ。

「あの年齢で、あの言葉が出てくること自体があまりにも残酷ではありませんか。彼は自分を罪人の様に言っていました、私にはどうしてもそうは思えなかった」

あの言葉は罪人が言う言葉ではない。
あれはむしろ――

「彼はあのまま放っておくとどこか深いところへ進んでしまうような気がします」

罪人である筈がないのに、去り際コードネームを伝えるとき「黒」の顔をした少年。

どこまで彼は迷宮の十字路に引き摺り込まれていくのか。

どこまで進んでも黒しかない迷宮からは、もう抜け出せないのか。

優作は感情を押し殺した声で力強く訴えた。

「私は、息子にそんな形で親友を失って欲しくないのです」

少しだけ、間が出来た。

時計の針だけが音を刻む。

外からの車の騒音がかすかに部屋に届く。

ため息をついたのはどちらのほうだったのか。

口火を切ったのは平蔵である。

何かを決意したような面持ちだった。

「工藤さん」

平蔵は厳しい目つきを更に深める。

「私の義父を知ったはりますか」

突然の質問だったが素直に答える。

平蔵の義父、つまり服部静華の実父。

横浜に住んでいる元政治家であり、そして何より、

「ええ、元総理大臣ですからね。存じ上げております」

すぐには返事をせず平蔵が腕を組みなおす。

「……あの人の人脈を使えば、公安を動かすことも出来ます」

公安が、動く。

しかし、どちら側として？

その判断をしかねた優作に驚きが襲った。

「それでもあなたは真実を解き明かそうと思わはりますか」

自分達警察が黒かもしれない。

勿論白の可能性だってある。

どちらともわからないこの状況でも、自分の信念をあなたは貫けるのか。

平蔵はそう優作に覚悟を問うているように見えた。

ここで否定すれば、そのまま今の会話は無かったこととしてお流れになるのだろう。

では肯定した場合。

彼ら警察が白であれば自分はまだ身の安全が保障できる。

だが黒だった場合は――

一寸先は闇。

それでも優作は笑ってこう言った。

「ええ。私は自分があずかり知らぬところで謎が生まれていくのを放っておくのが嫌な性質なんです」

真実を選んだ優作の答えに平蔵はため息をついた。

そして先ほどまで自分が見ていたファイルを机の上に置く。
プリントが数枚顔写真と共に入っている。

「……親友と言えるかどうかはわかりませんが、平次にも以前”何かを共有する喜び”を分かち合う人物がおりました」

それは誰かのプロフィールが載った紙だった。

促されるように優作はその紙を手にとって見る。

——片品陸人、享年三十五歳、死因・ガス漏れによる引火爆発事故

優作は思わず目を見開いた。

この紙を見せたということは、つまり彼らが――

一つの確信を得た彼は、自分がカードとして持っていたある事実を切り出した。

「勝手ながら、平次君の今までの履歴を調べさせてもらいました。そして中学3年の3学期辺りから高校一年の3学期までのちょうど一年間の記録が、全く無いことに疑問を持っていたんです。彼がいづから探偵を始めたのか、何故お金を取らないのか、最初の事件は何だったのか。そういう今の彼に結びつく重要なものが一切過去から抜け落ちていました。……これはあなたが行ったことでしょうか？」

不自然なほど完璧にそれは消えていた。

公の権力が無い限りできないことであろう。

平蔵はその指摘に、弁解はしない代わりにこう教えた。

「最初の事件がわからないのは当然でしょう。……まだあいつの最

初の事件は解決しとらんですから」

それで優作は全てを悟る。

悲しい真実だった。

「……そうですか。これで空白の一年間の謎が解決しました。ついでにもう一つよろしいでしょうか？」

平蔵は黙って頷いた。

「平次君を調べていると、自然と和葉さんがその過去に登場します。幼馴染だからそれは当たり前でしょう。うちの息子と蘭君も似たようなものですから。しかし、平次君と和葉さんには息子達とは決定的に違うものが一つだけありました」

平次には十五歳から十六歳までの一年間分の記録が抜け落ちていた。それと同じくして、彼女には――

「彼らが出会ったのがこの世に生を受けた一年後の春。つまり一歳です。あなたと刑事部長が昔からの付き合いだというのに、子供同士が初めて会ったのは一年後なんです。この生まれてから一年間、彼女の記録もまたありませんでした」

どこの病院で産まれたのか、母親が妊娠した記録はどこへいったのか。

平次と出会うまで、彼女は一体どこにいたのか。

「最後にお聞きしたい」

自分の考えは事実を元に生み出したただの推測に過ぎない。
しかし何故かこれには確信があった。

「和葉さんは、本当に遠山刑事部長の実の娘さんなのですか？」

東京都内の某病院。

そこにジョディ達FBIの面々は拠点を移していた。

昨夜組織に水無怜奈の居場所である杯戸中央病院を襲撃されたせいである。

翌日すぐに別の病院に移し替え、様々な人脈と裏取引でこの彼女の入院は秘密裏なものとなっている。

彼女の病室の隣に同じく部屋を借り、そこにFBIは拠点を構えなおした。

昨日の襲撃で明らかになった警備の問題や役割分担のバランスを見直し、彼らはもう一度体勢を整えることにしている。

そんな中正午過ぎで昼食を取るため院内へ人が集中したため、辺りが閑散とした、外の庭の木陰でジョディと赤井が声を潜め話し合っていた。

「本当に伝えるのか？ あの少年に」

赤井の声はいつもより不機嫌そうだった。

とはいっても、普段から機嫌が良い時等なさそうだが。

「ええ。彼は私達の同志よ。言わないわけにはいかないわ」

彼女の肯定に彼は反対する。

「同志だからと言って、やっていいこととやらなくていいことがある。あの子達のことを本当に考えているのなら、より安全なほうを取るべきだ」

確かに彼の言うことにも一理ある。

しかし彼女には彼女なりの理念があつた。

「安全な選択とは時に『逃げ』を取ることもなるわ。別に、自分で逃げを選択することは仕方ないと思つている。でも、自分の知らないところで勝手に逃げを選択されていたら誰だつて嫌でしょう？ 私達は、あの子達に出来る限り与えられる選択肢を知らせ、あの子達自身にその選択をさせるべきよ」

運命を決めるのは、他人ではなく自分自身だ。

これはジョーディの信念でもある。

父親を組織に殺され、証人保護プログラムを受けるのを決めたのは彼女自身だった。

ジエイムズに強く説得されたとはいえ、決めたのは紛れも無く自分なのだ。

プログラムによって辛く寂しい少女時代を送ることになったが、それでもここまで生きられたのは自分がその人生を選んだから。だからこそ強く在れた。

彼女はコナンや哀にもそうなって欲しいのだろう。

「あなたが彼女を心配するのはよくわかるわ。でも彼女にも彼女の人生がある。……証人保護プログラムも拒否したしね。だからこそ私は、彼女やあの少年にやりたいことをして欲しいの」

その言葉の後、少しだけ沈黙が訪れた。

小鳥のさえずりと羽ばたきが彼らの上を舞う。
しかし彼らの視点はそこに移らなかった。

その沈黙から数秒後。

ジョディの真摯な願いは赤井に届いたのか否か。
ただ、諦めたように彼女に背を向け踵を返した。
そして、後ろを向いたまま聞いてくる。

「ジェームズには言っているのか？」

「彼は私の一任に任せると言ってくれたわ」

コナンや哀に関しては彼女のほうがよくわかっている。
ジェームズはそれを考慮して認可したのだろう。

「……ならいい。勝手にしろ」

そのまま赤井は院内に足を進め去っていった。

その後姿を見届けながら、彼女は苦笑した。

ここまで彼が特定の人間に執着するのは珍しいと。

「彼女」があ女性の肉親だからだとわかつてはいるのだが。

そう考えながら携帯をポケットから取り出した。

あの小さな探偵に新たな真実を伝えるために。

そう、それは昨日の襲撃がきっかけで明らかになった組織のアジトの場所だった。

6（後書き）

コナンと哀・平次と和葉・優作と平蔵・ジヨディと赤井。

この4組はほとんど同時進行だと考えてもらえたらいいかと。

朝から昼過ぎにかけての時間帯です。…益々ややこしくなってきました。

すいません、がんばってついてきて下さい。

哀との「探りあい」に頃合をつけコナンが阿笠宅を去ろうとした時、携帯の振動が伝わってきた。

ボスの二代目説や哀のAPTX関連の話でいつもより冷静さを欠いていた彼は、彼女の目の前で電話を取った。

電話の相手はジョディ。

昨日の暗殺事件の経緯の話かと思ったが、それが本題ではないとすぐに悟ることになる。

「組織のアジトだと!？」

思わず叫んだコナンの声に哀がはつとする。

電話越しで今の彼らの状況を知らないジョディはそのまま話を続けた。

「ええ。覚えているでしょ？ 昨日シユウが構成員を一人撃つたのを」

暗殺を未遂にした後、組織の構成員達は四方に逃げて行き、それをFBIやコナン達は追っていった。

街中で拳銃を発砲することはできないため、ただ車で追いかけるしかなかったのだが郊外まで出たときついに赤井が発砲したのだ。

サイレンサー付きの一発だけとはいえ、よく撃つたものだ。

赤井の銃弾は見事に防弾チョッキの合間を貫き、構成員の一人に当たった。

ジェームズの車の中からその銃撃を見ていたが、致命傷ではないだろう。

ただ重傷には違い無さそうだった。

今まで慎重に動いていたFBIが発砲したという事実は、コナンに疑問を抱かせた。

撃つても逃げられる可能性が高かったのになぜ発砲したのか、と。

「……まさか」

コナンはある一つの考えに行き着く。

そんな見えない相手にジョディはうなずいた。

「そう。彼の撃った弾丸には発信機が埋め込まれていたの。それを摘出不可能な人体の一部に打ち込み、その撃たれた人物が行き着く場所を探知していたのよ」

えらく思い切ったことを。

内心コナンは舌を巻いた。

以前の毛利小五郎暗殺未遂の時にジンに向けて撃った赤井が、教訓として発信機を埋め込んだのだろっが、まさかそれを物にではなく人体に撃ちいれたとは。

彼にしか出来ない芸当だった。

「それで、アジトがわかったってわけか」

「昨日は闇医者にでも行っていたのでしょね。発信機がうるついていたから。それで摘出しないほうが生き長らえると医者が判断したため、弾はそのまま人体に残った。早朝には再び発信機が動き始めて、さっきある場所に留まったところよ」

つまりそれが組織のアジトである可能性が非常に高い、ということ
で。

コナンは固唾を呑む。

「そのある場所っていうのは……」

「東京のとある郊外よ」

「東京……!!」

まさかそんな近くに奴らが潜んでいたとは。

「しかも発信地点からして、あれは国立の医療研究機関がある場所
よ」

「なんだって!?!」

国の施設に組織がいるということはつまり。

「まあ、とは言ってもとうの昔に閉鎖していると国の資料には書いてあったけどね」

「今はその閉鎖状態のままなのか」

「表向きはね」

誰もいなくなった国の研究施設に組織がアジトを作ったということなのか。

何か嫌な予感が背中を走った。

「それで、ジョディ先生たちはどうするんだ？」

「発信機が気づかれるのも時間の問題だわ。そしてこの国自体が組織に関わっている可能性も出てきた以上、誰にも頼れない。米国に指示を仰いでいるうちに組織に感づかれる可能性も非常に高いから、行くのなら今日しかない」

「……強行突破ってわけか」

「東京で騒動を起こせばもしかしたら私達が逆にテロと思われかねない。でも、そうなる前に彼らを白昼の元に曝し出してみせる」

死ぬ気か。

コナンは一瞬思った。

だがジョディはそんな考えを見通したのか、ふっと笑った空気が伝わってくる。

「大丈夫よ。まったく勝機のないまま突入するわけでもないし、彼らを全滅させるのが目的でもないわ。あくまでも彼らの行ってきた犯罪を証明するものだけを手に入れることが最優先よ。……組織はまだ発信機に気づいていない。そして組織のボスはすぐには動けない体。速攻こそが私たちの勝機につながるわ」

「ボスを知っているのか!？」

「日本人で、おそらく病弱だろうってことぐらいわね」

「……」

文句は言わなかったが、彼の沈黙が、何故そこまで知っているんだと訴えた。

「あなたの倍以上の時間をかけて私たちは組織を追いかけているのよ? これくらいはすでに知っていて当然でしょう」

確かに、数十年かけてFBIは組織を追っているのだ。

手元にある情報量はコナンのそれをはるかに上回るだろう。

「で、ここからが本題。……あなたはとうする？」

声を低めて選択肢を与える。

自分で彼に伝えることを決めていたのに、それでも彼に断って欲しいと彼女は思った。

しかし、彼は不敵な笑みを浮かべて即答した。

「そこまで言うておいて行かないとでも答えると思った？」

今まで何のためにこうやって組織を追いかけてきたと思うのだ。

全ては元の体を戻して「彼女」の元へ帰るため。

そして、人々を苦しめる組織を潰すためだ。

こんな絶好のチャンスに居合わせないはずが無い。

——たとえ、死にも近い危険がそこにあったとしても。

言葉にはしなくてもジョディにはそのコナンの思いが伝わったらしい。

諦めにも似た苦笑が聞こえてきた。

「伝えはしたけど、私たちはあなたを実質的な戦力としては見なさないわよ?」

「それはわかってるさ。でも、俺には頭脳がある。それに俺の目的は組織を潰す以前に薬を手に入れることだ。それが達成しない限り無茶はしないつもりさ」

FBIのように銃を持つことは出来なくても、アドバイザー的役割なら十分果たせる。

以前の国会議員候補者暗殺事件においてこれは実証されているのだ。それがわかっているからこそ彼女は「実質的な」戦力ではないと言ったのだろう。

「……わかったわ。あの子には伝えるの?」

「いつもなら黙っておくけどな。でも、今回ばかりはもう言っしかないと思うぜ」

横で会話をこわばった表情で見つめている哀をちらりと見る。

電話の内容は大体わかっていているはずだ。

これで隠せるはずがないし、隠すつもりもなかった。

「そう。あの子のことはあなたに任せるわ。2時間後、そちらに迎えに行くから、準備をしておいてね」

「うん、……本当にありがとう」

——子ども扱いせず、同志として見てくれて。

心の中でそう付け足し、そのままピツと電源ボタンを押して切る。
自分の正体を知って知らないふりをしてくれる彼女を、本当にありがたく思った。

——彼女達となら、なんとかできる。

コナンには漠然とした自信があった。
心配そうな顔をする哀に、大丈夫だと言うように笑みを見せる。

しかし、その自信と共に何か胸騒ぎのようなものが彼にはあった。

ついに組織と対峙できる武者震いでもない、
ましてや恐怖でもない。

ただ、とても悲しいものが迫ってきているような気がしていた。

とてもとても、悲しいものが。

その悲しい正体を知るのはもうすぐだった。

「……ついにわかったのね、やつらの居場所」

「ああ、中々大胆な方法を取ってくれたものだぜ」

ジョディとの電話を聞いていた哀と博士に正直に内容を話した。博士は二人を冷や汗をかきながら見守っている。

思ったよりも彼女は冷静だったが、どこか思いつめたような顔をしていた。

そんな彼女を見て、コナンは優しい表情で肩をぽんと叩く。

「俺は行くよ。戦力にはならなくてもサポートぐらいならできるかな。ジョディ先生たちも全滅を狙っているのではなく、日本警察に出せるやつらの犯罪の証拠を手に入れることが目標だ。死に行かわけじゃない」

そして自分はアポトキシンのデータを手に入れることが最優先。

死に行くつもりは毛頭無いが、死ぬ可能性はある。

「服部君には何も言わないのかね？」

今ちょうど東京に來ているというのに。

隣から博士が伺う様に問う。

「ああ……今までも十分すぎるほどあいつは俺に協力してくれた。幽霊船の時なんかあいつだってもしかしたら命を狙われたかもしれない。のくに、快く引き受けてくれたんだ。だからこそ、巻き込みたくない。あいつはこの事件には直接関係してないんだ。俺の都合であいつを危ない目に合わせたら、彼女にも顔向けできないしな」

本当に彼を親友と思っているからこそ、今回のことだけは話さないつもりだった。

都合よく彼は今日横浜に出かけている。

帰ってこない内にここを出ようと思っていた。

「……工藤君、もし私が行くとしたら何か役立てることはあるかしら」

一応頭は人よりいいつもりだが、コナンのようにずば抜けて推理が出来るわけではない。

行ったところで足手纏いになるなら意味が無い。

「そりゃあるさ。だってお前は組織を内部まで知っている唯一の人間だ。何かわからないことが出てきたときお前がいればかなり助かるだろう」

だけど、と厳しい目つきで彼は付け足す。
少しだけ間を置いて静かに告げた。

「俺の意見を言うならば、お前には行つて欲しくない」

後ろからクラクションを鳴らされたような、心のどこかを貫かれたような痛みが彼女を突然襲う。

「解毒剤を唯一開発できるからとか、そんな理由一切抜きにして、お前には危ない目に遭つて欲しくないと思つてゐる」

そう言う彼の目はとても澄んでいて綺麗だった。

恋愛感情とか、友情とか、そういうものとは又違う思いがその目にはある。

哀は少しだけ呆けたような顔をしていたが、その後ふつと笑った。
普段は見せない柔らかい表情だ。

「……そう。なら行くわ」

彼の願いとは真逆の答えになったが、一方の彼もそれを予想してい

たらしい。

苦笑して「わかったよ」と言った。

「無茶はするなよ」

「お互いにね」

行って欲しくない、そう言ってくれただけでもう満足なのだ。

今自分の心の中に巣食う「ある戸惑い」はもうしばらく仕舞って置こう。

それが彼にもわかるのはもしかしたら今日かもしれない。

ただそれで彼に迷いが出てはいけない。

その時が来るまで、「戸惑い」の原因である「この事実」を隠しておこうと

哀は決意した。

十八歳になる自分へ母・エレーナが贈ったカセットテープの最後の

言葉を。

——そろそろあなたに言ってもいい頃かも……実はお母さんね……

8 (後書き)

コミックス42巻参照。今日は2話連続更新となりました。

二時過ぎ、和葉は平次を見送った後まっすぐ事務所に向かっていた。

手元には横浜の中華街で買った中華まん。

少し買いすぎたかもしれないが、全員揃えばおやつ代わりですぐ無くなるだろうと思っていた。

このビルの家主とその娘、そして小さな居候の載った表札を横目に扉を元気良く開ける。

「蘭ちゃんただいまー！」

「あつ和葉ちゃん！ おかえりー！」

扉の向こうでは蘭がソファで何やら至近距離で携帯を見つめていたが、驚いたようにこちらに振り返り笑顔で迎える。

「あれ、服部君は？」

「それがなあ、平次のやつ横浜のお祖父さんに事件の依頼されて、またどっか行っでもてん」

考えておいた言い訳をさらさらと連ねる。

悪いことをしているはずはないが、やはり嘘というものは心が痛んだ。

「へえーそうなんだ。大変だね服部君も」

「うん。ホンマごめんなあ、せつかくこつち来たのにバタバタして」

昨日は平次がコナンと出かけたまま夜遅くまで帰ってこなかったし、今日は朝から彼と一緒に横浜まで行っていた。落ち着いて皆で話すことがまだなかったため心の底からすまなく思った。

しかし蘭はにつこり笑って首を横に振る。

「いいのよ、和葉ちゃん達と会えるだけでも嬉しいもの」

「そう言ってもらえると助かるわあ。……あれ、そういえばおつちやんやコナン君もおらへんの？」

いつも机で新聞の競馬欄とにらめっこしている家主がいない。

「コナン君は博士の家にゲーム、お父さんはパチンコに行くって言うてたけど、多分お母さんのところだと思っわ。明日、お母さんの誕生日だから」

「へえー！　もしかして、もしかせんでもええ雰囲気なんちゃうの？」

「うん！ だから何も言わないで送り出してあげたんだ。前の初デート記念日みたいに、邪魔しちゃ悪いから」

三人で一緒にまた暮らしたいとずっと願ってきたのだろう。そう言う彼女は本当に嬉しそうだった。嬉しそうな彼女を見てこちらもなんだか幸せな気分になる。

「ほんまえ子やなあ、蘭ちゃんは。そういえば今何携帯とにらめっこしてたん？ えらい眉間に皺寄ってたで？」

「え、そう？」

一瞬蘭の目が泳ぐ。

私と違ってこの子は嘘をつくのが滅多に無いのだと思った。

「うん、なんか思いつめた感じやったけど。もしかして、工藤君絡みなんか？」

「……和葉ちゃんってホント勘がいいわね。何でわかつちゃうの？」

「そりゃあ蘭ちゃんがそんな顔するなんて工藤君以外で私知らんもん。で、なんかあったん？」

「う、うん。別に大したことじゃないと思うんだけどね、さっき新一から電話があったんだ」

「工藤君から？　何か用でもあったん？」

工藤新一。

蘭の幼馴染で平次の親友。

まだ一回しか会ったことが無いが、いい人だということはわかる。

あの二人がとても彼のことを大事に思っているのだから。

悪い人はずがない。

厄介な事件を抱えているとかで、行っただけで帰ってこないらしいというのはいきなり聞いた。

だが、突然平次が東京に行きだしたのも彼がいなくなっただけだし、彼自身訳アリっぽいことが見受けられたので、恐らく組織がらみの何かに巻き込まれたのではと予想している。

さっき平次にそれを言おうとして止められたのだが。

「それが……何か大きな事件があったらしくて、もしかしたらしばらく連絡できないかもって……」

まさか組織と何かするのでは。

瞬間的にそんな考えが頭によぎり、思わず声を上げてしまう。

「それってもしかしてめちゃ危ないことしてるかもしれへんやん！」

「そうなの。だから私ちよつと心配で……」

「他に何か言つてはらへんの？」

「連絡はしばらくなくても絶対にまた電話するつて。でも今までそんなこと言つたことなかったのよ、新一。連絡が途絶えることつて今までにもあつたけど、そのときは事前に連絡がなかったもの。だからわざわざ今回電話してきたことが妙に引っかかつて」

「うーん、でも工藤君の居場所はわからへんしなあ」

「私もずっとそんなこと考えて携帯眺めていたの。……でも、私にできることは待つだけなんだよね」

「蘭ちゃん……」

「居場所がわからないのにおろおろしても仕方が無いわ。あいつが居場所を言わないのは、私を危険な目に遭わせたくないのもあるつていうのは前聞いたの。でも、私だったら、新一の事件解決の助けにならないかもしれないけど、彼を守ることぐらいはしたいと思つた。でもそれも出来ない以上、私には待つしかないの」

「できることをやる。」

「それが蘭の決意だつた。」

「アイツが帰ってきたらね、言つてやろつと思つて」

いたずらを考え付いた子供のような笑顔を見せる。

「私は新一に心配されるほど弱くないわよって」

最近また空手の新しい技身につけたのよね、と組み手の仕草を見せてくれる。

確かに、彼女はその華奢な体からどこにそんな力があるのだろうと不思議がるくらい強かった。

言葉通り、彼女なら工藤新一が心配しなくても大丈夫そうだと思うせるほど。

——なんてこの子は強いんだろう

和葉は目の前の少女の思いに心が締め付けられた。

「蘭ちゃんて、強いなあ。空手とかやなくて、心が」

「そう？ 和葉ちゃんのほうがもっと強いと思うけど」

「……私が？」

「うん！ だって服部君が事件の依頼でどこかへ行っても和葉ちゃんおろおろしないもの。彼だったら大丈夫ってすごく信頼しているのわかる」

「そう、かなあ」

おろおろしないのは、彼を信頼してるから。

あまりピンと来なかった。

自覚してないだけなのだろうか。

今でも、彼が組織のアジトに戻ったことを内心とても心配している。

けどついて行ったところで足手纏いになるのはわかってたし

組織にいることは私の役目でもない。

蘭とは違い、和葉には平次の居場所がわかっていたが、役目が無い以上そこへは行けないと考えていたのだ。

「そうよ。私だったら居場所わかるなら飛んで行くかも。何か役割が無くて勝手に追いかけてちゃうんだから」

「勝手に……」

生まれて初めて聞くような考えにはっとさせられる。

「ええ。あの時……トロピカルランドで別れた時も、私が追いかけていればもしかしたら新一はいなくならなかったかもしれない。だから、今度会うときはもうアイツを一人にはさせないの」

強い意志を持った目で悲痛な決意を表す。

しかしすぐに弱気な顔になった。

強い意志を持った目が急に悲しみの色を交える。

「でも、これって私のエゴなんだよね。私がそうしたくないからそうするっていうのは。新一はもしかしたら私なんてもう必要ないかもしれないのに」

「そんなことない」

即座に和葉が否定する。

「和葉ちゃん？」

「絶対、そんなことないよ。だって文化祭の時も、工藤君ずっと優しいそんな目で蘭ちゃんのこと見てたんやし。工藤君だって蘭ちゃんが追いかけてきてくれたら嬉しいと思うよ」

自然と言葉が口から出てきた。

気がついたら必死になって蘭の思いを肯定していた。

彼女にはその思いを貫いて欲しいと思ったからだ。

「……ありがとう。やっぱり和葉ちゃんは優しいね」

和葉の必死な姿をどう捉えたのか、彼女はふわりと微笑んで感謝の意を述べた。

それにつられるかのように和葉も笑う。

その後二人で買ってきた中華まんを食べることにした。

今頃小五郎と英理はどうしてるか、新一の学校の単位数や父親の多忙な仕事のこと、様々なことを話し合った。

お互い似た環境の二人は話が良く合う。

だが仲良くしゃべりながらも、和葉の脳裏にはある言葉がずっと残っていた。

——役割が無くても勝手に追いかけてちゃうんだから
——もうアイツを一人にはさせないの

蘭の思いは和葉の心に強く印象付けられた。

9（後書き）

この彼女達の会話、頭の片隅にでも置いてもらえたらいいかと。後で繋がります。

都心から数時間のところにある閑静な郊外。

点々と大きな建物が建てられているその土地には住宅というものがあまりなかった。

研究所や会館、工場等の都心ではなくてもあまり関係ない施設がポツリポツリとあるだけだ。

そのほとんどはもう使われていないものだったが。

そしてそこに例外なく外観は無人にしか見えないコンクリートで建てられた、一階建ての研究所がある。

ぱっと見はわからないが、この建物は地下が何層もあった。

一階に人が見られないため、地下に潜んでいると考えられる。

鉄製で錆だらけの横開き式の門には南京錠が掛けられていた。

そこからすぐには研究所は見えない。

広大な敷地内にも大きな木が生い茂っているので、中の様子を門外から見ることは不可能だった。

夕方ということもあり、鳥の鳴き声くらいしか音らしいものはない。

「なるほどな。ここなら誰が出入りしても怪しまれないわけか」

「そういうこと。車で入ってもどこかの若者が遊びに来ているかと思えないでしょうしね。他の無人建物もたまに深夜若者が出入りしているらしいから、組織の拠点もそう思われているみたいよ」

研究所から数キロ離れた同じく無人の工場にコナン達は潜んでいた。赤井は工場外の敷地に停めた車内にいて、この場にはいない。無線でこの場の会話を聞いているらしい。

哀はコナンの隣に控えていたが博士はその場にいなかった。

二人が、家にとどまるよう説得したためだ。

「何かあったとき、蘭たちへのフォローを頼めるのは博士しかない」と言つて。

博士は長く渋っていたが最終的には二人の願い通り家にいることになった。

FBIの面々、およそ30人弱は一見普段着に見えるが中は防弾やら防刃やらのチョッキやベルトを着込んでいる。

ヘルメットはしていないため頭を狙われたら御仕舞いだ、そこは既に覚悟済みだ。

「ではもう一度計画をおさらいしようか。まず始めにグループA。君達は南の外壁から飛び越え一階の南方入り口へ潜入、すぐ側にある通路を左へ進んでくれ。Bは東から一階の東方入り口、入って右側の地下へ続く階段へ。そしてCは中央門から正面突破だ。……特にCには気をつけてもらいたい」

車のボンネットの上に地図を広げジェイムズが指揮を出す。
ちなみにBには赤井、Cにはジヨディが配属されている。

ジェイムズが言ったとおり正面突破するグループCは危険度が高かった。

はつきり言えばCは囹である。

ジヨディ達は力強くうなずいた。

手に持った銃を握り締める。

それを見届けたジェイムズはそのまま自分の左を見下ろした。

「そして、君達。君達には私と共に研究所の外壁側で車内から中の報告を待つことになるが、いいかね？」

「ああ、わかったよ」

「ええ」

素直に二人は応じる。

一緒に突入することはどう見ても出来ないのだ。

それくらい彼らも自覚している。

車内から計画のサポートをすることが彼らにできる唯一のことだった。

ジェイムズは視線を彼らから戻して辺りを見回す。

「あと、これが一番大事なことだ。私達の目的はあくまでも彼らの

犯してきた犯罪の証拠を手に入れること。構成員を倒すことではない。先ほど指示した場所まで行き、データや資料を奪うことを最優先してもらいたい。無理やり突破することには違いないが、それでも入手不可能だと判断すれば即座に引き返してきてくれ」

言外に、「死に急ぐな」と伝えている。

一同はもう一度、更に強くうなずいた。

その後すぐに彼らは解散し自分の指定地へと向かう準備をし始める。

ジョディも愛車・ジャガーの運転席で弾の確認をしているとドアを開けて後部座席から哀が入ってきた。

コナンは離れた場所でジェームズと話しているようだった。

ミラーで彼女を確認したジョディは振り向かず、銃の安全装置に手をかけながら声を掛ける。

「What's your problem?」(どうしたの?)

「一つ、聞きたいことがあるの」

いつもの抑揚のない口調でミラー越しに問いかけた。

「ボスのこと、どれくらい知ってるの？」

「……そうね。日本人で病弱。そしてまだ若いかもしれないってことかしら」

カチリ、と安全装置が外れる音がする。

「今のボスが二代目だと知っていたのね」

「ええ。だって私達は初代ボスが死んで今の二代目に引き継がれたのを察知していたもの」

哀の、膝に置いた手がぎゅっと握りこまれた。

「それっていつ頃なの？」

「確か、十六年くらい前かしら。その時期から組織の勢力が急激に拡大していったから間違いないと思うわ。それに以前は動きのあったボスが急に音沙汰無くなったし、あまり体が動かない、つまり弱っているって判断できたのよ」

「十六年前……」

ジヨディは銃を置いて、何かを考え込んでいる少女のほうに振り向く。

「何か気になることでもあった？」

「少し、ね」

「それは聞かないほうがいいのかしら」

「そのほうが助かるわ」

すまなさそうに哀は肩をすくめて苦笑した。
日本人というより自分達アメリカ人がしそうな仕草だ。

「大丈夫よ。別に言わなくても今からの突入に害は全く無いから」

「それはわかっているわ。……でも、あまり思いつめないでね」

自分と似た境遇を持つ哀には特別思い入れがあるのか、優しくそうに微笑んだ。

その彼女に、流暢な日本語の中に僅かに残る訛りのある口調は母を思い出させる。

カセットテープに残ったイギリス人の母の声と。

「ええ。ありがとう」

すっきりした顔つきで答えた。

十六年前引き継がれた、日本人で病弱な二代目。

哀の覚悟はそこで決まった。

10（後書き）

一体哀は何を決意したのか？すぐにわかります。
もうそろそろ話は最終章へ向かう頃かと。

男の高級そうな靴の廊下を歩く乾いた音がゆっくりと鳴る。
鉄筋コンクリートで囲まれた地下では足音が良く響いた。

ジンはある部屋の前に立つと帽子を取りノックを3回した。

「Come on in!」（お入り！）

高飛車な女王のような声の中から呼びかけてくる。
彼はそんな高慢な英語に少しか眉間に皺を寄せたが、すぐにいつもの鉄仮面のような無表情に戻りドアを開けた。

「なんや、珍しいな。アンタが連日来るなんて」

「フン。その言葉、そのままお前に返すぜ」

中にいたのはこの研究所の主で組織の統括者、「パイカル」とその
お気に入りベルモット、そして同じく気に入られ側近となってい
るスピリタス。

この無機質な建物には不似合いなくらい優雅に女と少年はコーヒ
ーを飲んでいた。

二人がそれぞれ座っているチェアの側にはパイカルが横になっ
てい
るベッドがある。

特に重用されている二人が同時に部屋にいることは珍しい。

両脇に控えられてさぞかしボスは機嫌がいいだろうとジンは思った。

「で、何の用なの？」

カップを横の机においてベルモットが問う。

ボスの代わりに口頭で伝えるのが彼女達の役目でもある。

二人がいないときは、ベッドの側にあるパソコンでそのまま伝えていた。

「キールの件で一応ボスにご報告しておこうと思ってな」

「キールのか？」

興味を示したようにスピリタスが身を乗り出す。

「俺がこの前伝えた情報を伝手にしたんか？」

「まあ、そうだな」

キールが以前殺害した”鼠”がカンパニー、つまりCIA絡みだっ

たとコナンを介して知った彼は組織に警戒をするよう呼びかけてあった。

そしてその情報を元にジンは部下に調査を命令していたのだ。

「やはりあの鼠はカンパニーだったようだ。FBI以上に調査が困難したが間違いない」

「……まさかとは思ったけど、本当にこの日本まで来るとはね」

ベルモットも神妙な面持ちで敵の行動を思い巡らす。

「なら、あんまり目立った行動は当分せんほうが身の為やろうな。昨日の暗殺事件かて止められたし。大きな組織二つに挟まれたらこの支部くらいすぐに潰されるわ」

流石に全滅はせんやろうけどな、とスピリタスは面白そうに笑みを浮かべて言った。

だが対するジンはそんな彼に向かって厳しい視線を送る。

「随分逃げ腰だな、スピリタス。お前はそこまで弱気な奴だったか？」

「そんなんとちゃう。慎重やと言って欲しいわ」

あくまでも笑みは崩さず挑むような目で言い返した。
少しだけ、そこに間ができる。

ベルモットはそんな二人を興味深そうに眺めていたが、

——ソノクライニ、シテオイタラ、ドウダ

かすかな息の音に三人がはっとしてボスのほうを見る。
すぐさまパソコンの画面に文字が浮かんできた。

『スピリタスの言うとおり、暗殺は暫く止めておこう。しかしFBIとCIAの動きは
続けて調査しろ。薬に関してはもう少し待て』

「Yes , boss」

「りょーかい」

ベルモットとスピリタスは即答する。
ジンも不満そうだったが結局は同意した。

「わかりました。では早速偵察部隊に知らせを……」

深々とボスにお辞儀をしその場を去ろうとした。

が、その時。

ドオンッ！

「な、何なの！？」

突然地鳴りのような大きな音と共に床が揺さぶられる。
台に備え付けてあったランプがぐらりと床に落ちて割れた。

「これは地震やないなっ！」

「そうだな。……何かの爆音だ」

急いでベルモットはボスの安否を気遣い、ジンはドアを開ける。
そしてスピリタスはパソコンから内部の監視カメラを映し出した。

「——っ!!」

カメラに映った、正面入り口にいる集団を見て思わず息を飲む。

「FBIか」

背後から画面を確認したジンが呟いた。
最悪な状況なのにその顔は笑っている。
楽しみにしていたものがやっと姿を現したかのような不適な笑みだ。

「ついに来たようやな」

服部平次も冷や汗を掻きつつ口の端を右に上げた。

——この場にいる以上、もう言い訳はできひんな

すぐそこに迫った運命を目の前にして彼の心は誰にもわからなかった。

ちらりと彼に視線を向けた、ボスを除いて。

車内からは外の音は入ってこないが、無線越しに潜入した彼らの様子が聞こえてくる。

不意打ちには組織の裏をついたようで、今のところ死亡者は出ていないようだ。

「This is group B! Nothing is found in the first floor!」

（こちらB！一階には何も見当たりません！！）

「Roger. Just sneak into a basement」

（了解。そのまま地下へ潜入せよ）

無線機でジェームズは冷静に指示を出す。

コナンもこの辺の地図を見ながらその様子を聞いていた。

思ったとおり、一階には何も無いようだ。

組織の奴らは地下に潜伏しているらしい。

せめて地下の見取り図があればもっと動きが取れるのと思ったが、仕方が無い。

手当たり次第部屋を調べていくしかないようだ。

敵の数は未だ不明。

三十人で突入しても、相手が倍以上いれば達成率は限りなく低くなる。

しかし、それに関してはあまり心配しなくても大丈夫だろうとコナンは踏んでいる。

この研究所の敷地面積や、地下にしか人がいないことを考慮すればそこまでの人数がいるとは思えない。

恐らく構成員は通常離れ離れにどこかに潜んでいて、何か話し合うときだけここに来るのではないかと予想していた。

——ここに誰かが普段から住んでいるとすれば、ボスとその身辺警護をする奴らくらいだ

絶好の条件に、彼はデータ入手の期待を膨らませていた。

「What's the matter!? All right
!?!」

（どうした！？大丈夫か！？）

突然ジエイムズが叫んだので、驚いて前を見る。
無線に向かって何かを早口で話していた。

「どうしたの!?!」

「地下に入った途端反撃が来たらしい。やはり地下にはどうやって
も進ませたくないようだ」

つまりそれは、地下に目的の物がある可能性が非常に高いということだ。

ボスももしかしたら地下にいるかもしれない。

その可能性はありえるかと哀に聞こうとして横を振り向く。

そして目を見開いた。

自分の目に写ったのは、空になった革張りの座席だけ。

「灰原……！？」

今一瞬前を向いた隙に、彼女は側からいなくなっていた。

朱色の夕日がそろそろ黒に変わり始めるころ、和葉は博士の自宅の前に来ていた。

蘭はいない。

恐らく小五郎と一緒にいるであろう英理から電話があつたためだ。

「一緒に夕食を食べよう」と。

もしかしたら復縁の話を持ち出すのかと蘭は喜んだが、今日は和葉がいる。

一緒に行くこともどこか変だし、かと言って一人で事務所に居させて置くのも躊躇われた。

小五郎は和葉が平次と一緒にいるから、娘を呼び出しても大丈夫だ

と思ったに違いない。

母からの電話を側で聞いていた彼女は、迷っている蘭の背中を押した。

「私なら大丈夫やって！ もうすぐ平次も帰ってくるし！！ それに、この余った中華まん、温かい内にまた博士の家に持って行ってあげようと思ってるねん。今から私も出るし、蘭ちゃんもはよ行ってあげ！」

平次がすぐ帰ってくるというのは嘘だったが、博士の家に持っていくのは本当だった。

「こんな機会絶対逃したらあかんよ！」と、半ば強引に彼女を送り出した。

対して蘭は、そんな和葉の気遣いに感謝して急いで両親の元へ向かったのである。

そして今、彼女に言ったとおり和葉は博士の家の前にいた。

他にすることも無いし、あの哀ちゃんとかんばって打ち解けてみよつかとも考えていたのだが

何やら人気が無い。

昨日来た時の様に明かりがついていなかった。

「嘘やん……もしかして博士達もどっか行ってるの？」

まさか一人でこのまま夜まで過ごす羽目になるのだろうか、ため息について門に体をもたれかけた。

すると、ぐらりと背中が後ろに傾きかけて慌てて立ち上がった。

門の鍵が開いていたのだ。

自分の背中で押した時に門が開いたらしい。

「不用心やなあ。もしかして、中にはるんやろか？」

念のためインターホンを鳴らす。
しかし誰も応答しない。

——まさか泥棒！？

思わぬ展開にうろたえたが、しばらく考えた後、門を手で押し開けて入っていく。

中の様子を見て泥棒が確認できたら通報したら良いし、何事も無く博士や哀がいればそれに越したことは無い。

幸い自分には合気道もある。

慎重に行けば大丈夫だろうと、やはり鍵のかかっていなかった玄関のドアを開けた。

首だけを恐る恐る出して中の様子を見回してみる。

見たところ誰も辺りにはいないようだ。

ごくりと唾を飲んでゆっくりと家の中に入っていく。

「……やっぱり、誰もおらへんなあ」

もしかしたら地下かもしれないと思い階段へ向かおうとした。

が、その時デスクに置いてあったパソコンの電源が入っていることに気付く。

不思議に思い、画面を覗き込むと突然メールを知らせるウィンドウが開いた。

「え、何なん？」

彼女の戸惑いを他所に、そのメールは何故か自動的に中身が開かれた。

勝手に見てはいけないと思う間もなく目の前に文が飛び込んでくる。

メールに書いてあった文はたった一行。

『もう駄目だ。あの子だけでも救い出してやってくれ、阿笠パイカル』

——パイカル！？

その名を知る和葉は息が止まるかと思うほど心臓が跳ね上がった。

このパイカルがメールを出した相手の阿笠はやはり自分の予想していた

通りの人物なのか？

そして「あの子」とはまさか……！？

あまりの衝撃に一瞬頭が真っ白になる。

「か、和葉君！？　いつのまに！？」

背後からメールの受信者の驚いた声がした。

はつとして振り向くと、博士がおたおたしながら近づいてくるのが見える。

やはり地下にいてインターホンが聞こえなかったようだ。

「こっこれは……！！　もしや見たのかね！？」

画面のメールを確認した彼は焦って和葉に問いかけた。

しかし彼女は謝ることなく、逆に彼に詰め寄る。

口が震えて思うように声に出せない。

「なあ、これどういうことなん？　何かあったんやろ、あの人に」

「——っ！？　知っておるのか！！　君は一体……！？」

思わぬ言葉に博士は更に驚く。

「お願いがあるわ。……アタシをあそこまで連れて行って」

「それはならん!!」

強い口調で拒否を示す。

彼女の正体は見当つかないが、連れて行くことだけは絶対にいけないとわかっていた。

「メールに載ってるあの子って平次やる!? 何か大変なことが起こったんやろ組織に!!」

思わず彼の白衣の襟を掴んで揺さぶる。

パイカルの言う「あの子」が平次を指すことを博士は知らなかったが、組織に何が起こったかは知っていた。

FBIの、強行突破。

それによって今組織が危険な状態になっていることはわかっている。しかしそれを目の前の少女に言うわけにはいかない。

「ワシは何も知らんのじゃよ！ 君も深入りしてはならん！！」

「白を切らんといて！！ あんた、あの人の親友やった人やろ？
あの人が組織に入ったとき一緒に誘われたけど断った人なんやろ！
？ こんなメールもらつといて行かへんつもりなんか！？」

誰も知らないはずの事実を口に出され、彼の強い口調がぴたりと止んだ。

衝撃的なことを立て続けに言われて、彼も思考があやふやになって
いるのかもしれない。

「……それでもワシは、そこには行けん」

その途端、バンという大きな音が辺りに響き渡った。
和葉が壁を叩いた音だ。

「まだわからへんの！？ あの人が気に入っているベルモットと、
あの人がアタシに名付けたラムをあわせたらアガサっていうお酒に
なるんやで！！ なんてあの人がアタシ達にそんな名前付けたかわ
からへんことないやろ！！」

「……まさか君は……っ」

一瞬頭をよぎった考えに、彼は口を大きく開けることしか出来なかった。

こんなことがありえるのか？

だが、彼女の正体はそうとしか考えられない。

「救い出してつて頼まれたんなら、はよアタシを組織のアジトに連れて行って！！ それにあの人はあんたのことをずっと待ち望んでいたんや！！」

全てを包む空は既に黒く染まりつつあった。

世界を血に染める太陽の断末魔は、もう聞こえない。

哀がいつの間にかいなくなっていることに気付いたコナンは、急いで運転席のジェームズに伝える。

彼もその想定外の出来事に愕然とした。

なぜ、そしてどこに、というのは言葉にしくなくても咄嗟に二人の頭の中に浮かぶ。

「……この場で消えたとしたら、向かう先は一つと考えていいかね」

「ああ。どういっつもりかわからないけど、そう考えて間違いない。今からアイツを追いかけるよ」

焦った表情でコナンがドアを開けようとする。
急がなければ手遅れになる可能性もあるのだ。
しかし、ジェームズはそんな彼を呼び止める。

「待て！ あそこはとても危険だ。行くなら私が……！」

もし彼女が普通の少女であれば、FBIの上官がわざわざ行くことは無いだろう。

目的達成に支障を来すような行動は絶対取らないはずだ。

それで彼女が死んだとしても、だ。

しかし彼女は普通の少女ではなかった。
ベルモットがこれまで行ってきた犯罪を証明できる唯一の証人だ。
数少ない手がかりをここで逃すわけには行かない。
自分の代わりはいても、あの少女の代わりはいないのだ。

「ダメだ！ ジェイムズさんはここにいて皆に指示を出すという一番重要な役目がある。でも俺はここにいる以上に、灰原を追いかけるほうが役割としては大事だ。大丈夫、捕まえたらすぐ戻ってくるさ」

コナンのほうが正論である。

ジェイムズは苦渋の表情でうなずいた。

「……わかったよ。では気をつけて」

「ああ！」

コナンは車を飛び出し研究所へと向かった。
銃撃が鳴り響く、あの場所へ。

哀はひたすら走っていた。

あの男のいるところへ。

自分に行かなければならない。

——それが私の責任……！

生い茂る庭を通り過ぎ、正面入り口へと辿り着く。
爆破したおかげで入り口は大きく穴が開いていた。

研究所の一階には、もはや誰も居ない。

足元から銃声が響いてくるのがわかった。

構成員もFBIも、全員地下にいるのだろう。

息切れた体を再び持ち上げて中に入ろうとする。

だが、その瞬間急に後ろから強い力で腕が引っ張られた。

「何やってんだ灰原！！」

「工藤君……」

彼女以上に息の切れたコナンが肩を大きく上下に揺らしている。
全力疾走したらしい。

彼はすごい剣幕で彼女を怒鳴りつける。

「お前一体何のつもりなんだ！ 死ぬ気か！？」

「……違うわよ」

捕まれた腕を振り払った。

そして彼の視線と真っ向から向き合う。

「逃げてばかりじゃ勝てないからよ。私はあそこへ行かなくちゃならないの」

そう言う哀の脳裏にはあの小さな、自分とは違う本当の意味での少女が映った。

大事な大事な友人の姿が。

「……待機することは逃げじゃない。俺達がこれから先に進むために必要なことなんだ」

彼は、彼女が罪悪感からここへ来たのだろっと思っていた。
組織の犯罪に間接的とはいえ加担したことを償いたくて、居ても立

つてもいられず車を飛び出したのだろうと。
だが彼女の本当の理由は違っていた。

「私はあなたと違ってあそこへ行かないと前には進めないわ。これから先に進むためにも、この行動は必要なもののよ」

だから、お願い。

哀は頭を下げた。

今までの彼女からは考えられないことだ。

コナンはその嘆願を少し驚いた顔で見つめていた。
まだ彼女は頭を上げない。

その無言に音を上げたのは、彼だった。

「……しゃーねえな。その代わり、俺もついていくぜ」

ため息混じりに問いかけてくるコナンに哀はぱつと顔を上げた。

「何がしたいのかわからないが、死に行くんじゃないってことは

わかった。オメー、どこに行きたいんだ。我武者羅に突っこむわけでもないんだろ」

彼女は安堵した表情を見せた。

しかし目的は言い辛いのか、すぐに俯いて迷う素振りをする。地面を少しだけ見つめて、覚悟を決めたように顔を上げた。

「ボスのところよ」

「何だつて？」

彼女は背を向けていた入り口に再び体を向けた。

「どうしても確認したいことがあるの。それが出来ない限り私の魂はここから離れられない」

そう言うと突然中へ走り出した。

「お、おい待てよ……！」

コナンも慌てて彼女の後を追いかける。

その後ろで、入り口の大きな穴を支えていた柱が乾いた音を立てて崩れていった。

哀に追いついたコナンが真つ暗な一階を見渡すと、そこには銃撃戦の跡と思われる破片や血が飛び散っていた。

さながら戦争のような光景だ。

いや、これも戦争といえるのかもしれないが。

地下から大きな音と振動が上まで伝わってきていて、激しい攻防が繰り広げられているのがわかった。

ボスのところとはいえ、丸腰の自分達が今地下に進んだら瞬殺されるのがオチだろう。

どうやって進んだものかとコナンが思案していると、哀がある壁際にしゃがんで、隅にはめてあった通気構の鉄製の格子に手をかけた。

「お前、この場所の見取り知ってるのか？」

「多分ね。この研究所の中だけは何かの機会で写真を見たことがあったの。外観は見てなかったから、入ってみないとどの場所をあの写真が示していたのかわからなかったのよ。でも、ここに来て思い出したわ。この通気構から潜り込んで進めば誰にも会うことなくボスの部屋まで直結していける」

その蓋の向こうには暗く細い空間が広がっている。

子供でないと入れない大きさだ。

確かにここを通れば誰にも見つからない。

「なるほどな。で、ボスのいる部屋もわかるのか？」

「進んでいって行き止まりの右側だと思うわ。他の部屋の中は写真に写ってたけど、そこだけは何も中が写っていなかったから……」

側に落ちていた小石で床に大体の地図を描く。

一階は正面にあるホールより向こうが入り組んでいるが、地下のほうは意外とシンプルな造りらしい。

コナンはその地図を頭に刻み込んだ。

「よし、じゃあ行くか」

「ええ」

二人は共に時計型ライトのボタンを押し、身を屈め真っ暗な穴の中に入っていく。

コナンのほうが先である。

湿気った匂いが鼻についた。

この通気構は地下の天井部分の上に配置されてるみたいで、時折自分の真下で銃声がある。

しかし彼らは止まることなくそのまま進んでいった。

FBIにはFBIの目的が、そして彼らには彼らの目的がある。

ここで違うものに気を取られてはいけないのだ。

匍匐前進の要領で進み始めて数十分後。
二人の腕の力が流石に限界に近づいてきた頃、行き止まりの壁が見えてきた。
通気構はそこから左右に分かれている。

「この右側だから……こっちか」

右のほうに首を向けると、部屋からの光が差し込んでいる格子があった。
ゆっくり進み中をのぞく。

誰もいないようだった。

しかしそれはコナンも予測済みである。
FBIが突入してきたのだから、ボスが真っ先に逃げた可能性が高いと踏んでいた。
ここに構成員が大勢居るはずはないし、統括者がすべきことは唯一つ。
逃げるだけだ。

FBIの目的は犯罪の証拠となる資料やデータの入手だったので、ボスが逃げることは承知の上だったのである。

そして、だからこそ哀がボスの部屋に行くことをコナンも許したのだ。

誰もいない部屋に行くなら大丈夫だろうと。

「誰もいないな。行くぞ灰原」

「ええ」

彼はキック力増幅シューズを使い、格子を部屋に向かって強く蹴り降ろした。

けたたましい音と共に格子が外れ、床に落ちる。

銃声のおかげでその音は目立たない。

首だけを出して部屋の中を確認する。

さほど床との距離が開いていなかったのも、二人は思い切って飛び降りた。

足を地につけると、数十分一定の姿勢のままだったため凝り固まった体に開放感が訪れる。

そのまま部屋の中を見回すと、辺りを灯すランプは床に割れた状態で放置されていた。

外側は割れたが、中のランプは無事だったようで未だ部屋を薄暗く照らしている。

大きなベッドの両脇には椅子があり、側の台にコーヒークップが二つ置いてあった。

「冷え切ってるけど、まだ中身が残ってるな。急いでこの部屋を出たってわけか」

カップの一つを手に取り中を確認する。

ベッドの毛布が半分裏返っていることから、

病弱なボスがここから出て行ったことを示していた。

ここには少なくとも二、三人はいたようだ。

ここでどうするつもりなのかとコナンが哀のほうを見ると、彼女はベッドの近くにあったパソコンのデスクの前で佇んでいる。

「灰原？」

彼女はデスクの上に置いてある「白い物」を凝視したまま動かなかった。

「一体何を見つけ……」

彼女に近づいて、自分もその「白い物」を見た。
そしてはっとする。

手紙だった。

横書きの真つ白な封筒がそこにあった。

表向いた封筒にはあて先人の名前が書いてある。

——『志保へ』

哀は震える手でその封筒を手を取った。

影になってわからないが、差出人の名もちゃんと記してある。

彼女はこの名を予想していたのだろうか？

この自分宛の手紙の差出人を。

この名が示すものはただ一つ。

この部屋の主、その人だ。

彼女はゆっくりと封筒を裏返した。
床に落ちたランプがその名を照らす。

——『宮野厚司』

歪んだ字で、その名前は書いてあった。

——志保へ

お前に手紙を送るなんて初めてかもしれないね。
いつかこんな日が来るかもしれないと思い、この手紙を残しておいた。

お前が私のところへやって来るその時を予想して。
これを読んでいるということは、お前は組織の実態をほとんど知っているんだろう。

さあ、どこから話そうか？

とりあえず私がこの組織に入ったきっかけから書いてみようか。

お前も知つての通り、この組織は数十年前作られた。
いや、組織を作っているつもりはなかったのかもしれないな。

「あのお方」は。
いつの間にか巨大なグループが出来てしまっていたと言った方が正しいかもしれない。

この組織を作った人物、つまり初代の名は大黒連太郎。
昔この国の官房長官を務められていたお方だ。

連太郎殿が数十年前、薬品開発のための研究所を設立した。
この研究所の代表者には自分の息子夫婦を立てた。

この息子夫婦はとても優秀な科学者でね。
彼らは自分の理想を求め、ある薬品の開発に心血を注いでおられた。

それがアポトキシン。
お前も研究しているその薬だ。
あの薬の開発は大黒夫妻が始めたものなんだよ。

そして研究所が発足して数年後、連太郎殿は自分の息子夫婦の手助けとなる助手を探すことになった。
元々研究所に、科学者は息子夫婦のほかにも当然いたのだが、アポトキシンの開発難易度があまりにも高かったためついていけなかったらしい。

アポトキシンの開発と似た研究をしている科学者を探された連太郎殿が、やがて私達の研究論文に目をつけられた。

そう、阿笠と私が発表した論文が。

エレナもその研究には協力してくれていたが、主な活動は私と阿笠でやっていた。

私達が発表した論文は当時「夢物語だ」と、誰にも相手にされなくてね。

高すぎる理想だと言われたよ。

だが、そんな論文を連太郎殿は大変評価してくれた。
「我々と一緒に崇高なる理想を実現させよう」と。

全てはこの地上に生きる人間のため。

その理念に共感した私は研究所に入ることを決意した。
……阿笠は断ったがね。

「どれだけその研究が素晴らしいものだったとしても、あまりにも高すぎるその理想は様々な物呼び寄せてしまう」と。

アポトキシンは人間に幸福をもたらすが、それと同時に様々な人間の悪意をもたらすだろうと阿笠は私に警告してきた。

その時は彼の言うことがわからなかったね。

ただ私やエレナは、アポトキシンが絶対にして唯一の正義に見えたんだ。

その後、阿笠と決別をして私達は研究所に入った。
大黒夫妻と私達宮野夫妻。

大黒夫妻が主力、私達が助手となって薬の開発に取り組んだんだ。

その頃からだったかな。

研究所に科学者以外の人間が出入りするようになったのは。

薬品開発には多額の資金が必要だったし、その開発を心待ちにしている資産家がたくさんいた。

彼らが派遣してきた部下が連太郎殿と何やら話をしているのを何回か見かけたことがある。

高額の資金や研究員を管理する集団が出てきたり、パトロンと交渉する担当まで現われた。

開発が進むにつれ研究所は研究所ではなくなっていくたような気がするね。

組織になっていったんだよ、あれは。

君が生まれたのもその頃だった。

そんなある日、突然大黒夫妻が亡くなった。
死因は研究中の事故死。

開発途中のアポトキシンと別の薬品を混ぜ合わせたら予想外の化学反応が起こったらしい。
反応によって発生した有害なガスが原因で彼らは死んでしまった。

それが十六年前の出来事だ。

急死した大黒夫妻の跡を当然の如く私とエレーナが引き継ぐことになったんだ。

彼らがいなくなった痛手は大きかったが、私達もそれなりに研究には重要な役を担っていたから代わりが勤まらないわけでもなかったよ。

一方、その頃にはもう連太郎殿もお年を召されていてね。
特に、自分の息子が亡くなってからは急激にお体が弱り始めた。

ついに息子の急死から一年後、後を追うようにして連太郎殿は亡く

なられてしまった。

短い遺言を残して。

その遺言に書いてあったものは私を本当に驚かせたよ。

「この組織を宮野厚司氏に譲る」

一研究者である私をあのお方は組織の2代目統括者に推薦したんだ。

最初は断ろうと思った。

しかし、私が思っていた以上に組織は大きくなりすぎていた。

組織の大本である薬を研究していた私はいつのまにか内部を知り尽くしてしまっていたんだ。

もう逃れられないところにまで来てしまっていたんだ。

私がこの遺言を守らなければ、組織は新しい統括者を立てるべく権力闘争が起こるだろう。

この巨大な集団でそのようなことが起ればとんでもないことになる。

葛藤の末、私は2代目を引き継いだ。

研究を続けるため。

組織を暴走させないため。

まだ幼かったお前や明美はその時別々に知人宅へ預けたんだよ。

そして再び二人だけとなった部屋で、私達は研究を続けた。

息子夫婦が急死し、連太郎殿が病死し……この薬は何か呪われているんじゃないかという予感があった。

そしてその呪いは研究を引き継いだ私達にもふりかかってくるのではと。

この望まれない予想は悲しくも的中することになったよ。

アポトキシンがついにまともな形態を取るようになって、実験が必要になったんだ。

この薬を飲み、本当に効き目があるのか試す実験が。

モルモットで試すには限界があるからね。

どうしても人間の体で実験しなければならなかった。

薬は二種類できていた。

どちらかが成功で、どちらかが失敗に終わる可能性の高い、非常に危険な薬だった。

成功とは生存、失敗とは死を意味するほどに。

自分の研究で他人が犠牲になることが許せない私達は自ら薬を飲む

ことを決意した。

エレナと私。

二種類の薬をそれぞれ飲んだ。

どちらかが生存すれば、生き残ったほうが研究を続けたらいいし
どちらも死ねば、こんなに研究しても死亡する確率がほぼ100%
である薬をこれ以上作れないということで、止めてしまえばいいと
思っていた。

結果は君も予想しての通りだ。

エレナは死に、私は生き残った。

彼女の死で私の中の何かが変わったような気がするよ。

何かを為すには何かを犠牲にしなければいけないと身にしみてわかった。

それで覚悟を決めたのかもしれない。
組織を統括し、薬を完成させる覚悟を。

私は生き残ったが、その代償として体がおかしくなった。
弱る時もあるれば健常者と変わらない時もある。

この辺のことはお前ならよくわかるだろう。

私はエレーナを愛していた。
だからこそ、彼女の死を捧げた薬を完成させなければならない。

その決意によってベルモットやスピリタスの運命を大きく変えてしまったことは、とても後悔している。

彼女達は何も悪くは無いはずだ。

だが私のエゴのせいで二人は狂ってしまった。

エレナ之死も、ベルモットの哀しみも、スピリタスの絶望も、

起こってしまったことは取り返しがつかない。

前に進むことだけが償いとなるのだ。

そのためには更に大きな代償がいるのかもしれないが。

明美は組織に入り込んだ密偵と繋がっていた。
だから殺さなければならなかった。

この手紙はお前に対して許しを請うものでもなければ、謝罪するものでもない。

ただ、私の覚悟を知って欲しかった。

手紙を読んでどうするかはお前次第だ。
場合によってはお前を殺さなければならぬかもしれない。

全てはアポトキシンの完成のため。
完成を望んだエレナのため。

薬の研究を引き継いだことはとても感謝している。

組織に刃向かうにしろ、戻るにしろ、願わくばそのまま研究を続けて欲しい。

それが唯一父親として娘に望むことだ。

もうお前は私のことを父とは思っていないだろうが。

お前を心から愛しているよ。
そして明美も愛していたよ。

エレナと同じくらいに。

そんな感情さえも無にして為さなければならぬものがある。

それだけは覚えておいてくれないか。

次出会うことがあれば、それは戦場ではないことを祈る。

——厚司より

一通り読み終えた哀は手紙の端を握り締めた。
顔に変化はない。
ただ握る手が震えていた。

「知っていたのか、父親のこと。……博士のことも」

躊躇いがちに彼女に横から聞く。

コナン自身、この宮野厚司の告白に動揺が隠せないでいた。
先代である大黒連太郎は、美國島の名簿に名前が載っていたのを覚えていた。

彼女が言っていた「初代が美國島に行った記録がある」というのは彼のことだったのだ。

しかし、阿笠博士に関してはすんなりとは受け入れられない。

あの博士がボスの知り合い？
宮野厚司と一緒に組織に誘われた？

じゃあ今までの俺に対する接し方は何だったんだ？

頭の整理が追いつかない。

が、ここでこの事実を否定したところで意味は無いのだ。戻ってから博士には聞くことにしようと思つて心の中で決めた。

「博士のことは以前から知っていたわ。お父さんの昔親友だった人だつて。でも薬の研究の理念がお互い違う方向を歩き始めて、袂を分かつことになったとお姉ちゃんに聞いたことがあったの。だから組織から抜け出した時博士の家に向かったのよ」

「え？ お前確か俺の家に行こうとしてたつて……」

「博士の家を目指してたら、その一歩手前であなたの家の前で倒れてしまっただけよ。幸い博士本人に見つけられたから良かったけどね」

哀の言う真相には納得がいった。

会ったことの無い工藤新一の家に行くより、父親の親友であつた博士の家を目指したといったほうが合点がいく。

「組織の理念に反した考えを持っている博士なら私を殺しはしないと思つたの。倒れていた私を拾ってくれた彼は私にこう言つたわ」

——君がこんな運命をたどった責任はワシにもある。すまんかった

「……なるほどな、あまり人を信じないお前が他人の家で居候する理由がやっとわかったよ」

博士だったから、哀はその家に留まる事にしたのだ。
薬の研究を理解し、そして自分さえ理解してくれる彼のところなら安心できる。

「博士も苦しんでいるみたいだったわ。なんであの時あの人を止めなかったのだろうって。ずっと罪悪感に苛まれていたのよ」

無理にでもこの部屋に行こうとした彼女の本当の理由がコナンにはなんとなく想像つき始めた。

博士を苦しめ彼女自身も苦しんだ元凶がもしかしたら自分の父かもしれない。

それを確かめたくなつたのだろう。

「父親のことはいつからわかっていたんだ」

「そんな予感はずっとしてたわ。組織の奴等はお母さんのことは教えてくれても、お父さんのことはまったく話そうとはしなかったもの」

母以上に謎に包まれていた父。

宮野厚司というマッドサイエンティストはタブーの存在のように扱われていた。

「だからお前以前俺がメルアド知ったとき、信じられない人物が浮かび上がるかもしれないって言ったのか」

七つの子がメールアドレスを示すと博士に伝えた時彼女は警告を鳴らしてきた。

彼を抑えようとした彼女はどこか自嘲気味に見えたのだ。

——まさか私の父親がボスだとはあなたでも予想しないでしょう。

そう心の中で思っていたのかもしれない。

「でもその疑惑はこれまで全然確証はなかったわ。もしかしたら、ぐらいにしか
思っていなかったもの。はつきりわかったのは、お母さんのテープを聞いたからよ」

「父親がボスだって言ってたのか？」

「いいえ。ただ、自分の死は事故ではないと」

——もうそろそろあなたに言ってもいい頃かも……実はお母さんね……

十八歳になる宮野志保へ送ったエレナのテープには最後にこう付け足されていた。
聞いた時は一瞬どいうことかわからなかった。

——ジコデシندانジャナイノヨ ジブンデクスリヲノンデシン
ダノヨ……

コナンは思わず息を飲んだ。

「よくよく考えたら、自分の死期を予想してテープを残すなんて、突然の事故死だったらできないじゃない。前もって自分が死ぬ可能性がないとテープを作れないわ。……知っていたのよ、お母さんは。アポトキシンの実験で自分が死ぬかもしれないって」

だから私にテープを残せたんだわ。

そう言うと彼女は苦しそうに、握り締めたせいでできた紙のしわを

ゆっくり引き伸ばした。

「お母さんが薬で死んだのなら、父も飲んだんじゃないかってことは簡単に予想できたわ。でも同じものを飲む訳が無い。なら父は生きていた可能性もある。生きているとすれば、なぜそのことに私に言わないのか？ そう考えたら、ボスだということもありえるなって・・・」

最後のほうはだんだん声が小さくなり、そのまま俯いてしまった。そんな彼女を彼は見つめる。

「じゃあ俺にその内容を言わなかったのは……」

「人の良いあなたのことから、私の父がボスだなんて知ったら変な気遣いするんじゃないかって思ったのよ。ボスの名を知っても知らなくても組織を追うには損害なかったしね」

哀の配慮にコナンは批判できなかった。

実際に彼女の父がボスと知っていたら今回の突入も、もう少し慎重にするよう進言したかもしれないからだ。

少し何かを考える素振りを見せた彼は次に手を差し出した。

「ちよつとその手紙見せてくれないか？」

「ええ、いいわよ」

手渡されて、その文章をじっくりと観察する。

さつきから横で見てて疑問に思っていたことがあったのだ。

そして、今直接手紙を見てそれが確信に変わる。

「この封筒に書いてあるお前の名とボスの名。そして便箋の字。筆跡が違っんじゃないかねえのか？」

「え？」

コナンが両手に封筒と便箋をそれぞれ掲げて見せた。

哀も封筒の字と中の便箋の字を見比べる。

確かに封筒の字は歪んでいてのに対して便箋の文字は立派な筆跡である。

「多分、封筒のほうはボスの筆跡だ。右上がり気味な文字が、昔書いたあの作文の文字と共通している。体が弱いから歪んだ字になったんだろうな」

作文とは、昔厚司が老女に送ったものことだ。

今は哀の机の引き出しに仕舞ってあるが。

「で、一方の便箋。筆跡が全然違う。書き順もあってるようだし、しっかりとした書き方だ。おそらく、ちゃんとした教養を幼い頃から受けた誰かが書いたものだってことがわかる」

「あら、筆跡鑑定までできるの？」

感心したように聞いてくる。

「これくらいなら、少し齧った程度でわかるさ。……問題はその書いた人物だ。封筒から便箋だけ引き抜いて違う内容を書いた紙を誰かが入れたかもしれない」

しかし一体誰が。

そこが気になるところである。
ボスがこの手紙をつづったことを知っている人間ではないとできない。

気になることと言えば、もうひとつある。

スピリタスだ。

ベルモットはわかるが、このスピリタスとはいったいどんな人物なのか。

コードネームだけでは男か女かわからない。

ボスにとって重要な人物であったことだけは手紙からも見受けられるが、

その名は初耳だった。

ベルモットの哀しみとスピリタスの絶望。

自分の妻や娘の死さえも犠牲にした男が後悔するほど、この二人は狂ってしまったらしい。

脳裏にあの妖艶かつ華麗な、あの女優の姿がよぎった。

秘密に固執するベルモットも狂っているというのか。

彼にはあまり実感が湧かなかった。

コナンが高速で頭を回転させていると、哀はまだ手紙の筆跡について戸惑っていた様であった。

それは当然だろう。

自分に宛てた手紙が偽物かもしれないのだから。

「じゃあ何のために、中身を摩り替えたのかしら」

それに対して一つの可能性をコナンは挙げた。
今のところこれくらいしか思いつかない。

「そりゃあ俺達をはめるためだろう。もしかしたらボスの言いたかったことを誰かが隠そうと……」

「それはちゃうな」

「——っ!？」

自分達しかいないはずの部屋で違う声が否定した。
二人は驚いて声のしたほうを振り返る。

いつのまにこの部屋に入ってきたというのだ。
気配は全くしなかった。

床に落ちたランプしか明かりの無い部屋では、まだ足元しか見えな
い。
こつこつ、とゆっくり足音を響かせてこちらに近づいてくる。

次に見えてきたのは、黒いコートの裾と男が右手に携えた拳銃。弾は入っている。

「その便箋の内容は正真正銘、厚司さんが娘に言いたかったことや。ま、書いたんは俺やけどな」

ドッ
クン

コナンの心臓が急激に高く鼓動した。

見知った声、見知った姿。

なぜ？

どうして？

その拳銃はなんだ？

そんな考えは頭の中にな
い。
思考が完全に停止した。

「Welcome, silver bullet. Welco
me, sherry……」

流暢な英語で名が呼ばれる。

シェリーが灰原なら、シルバートレットはもしかして自分のことなの
か？

そんなことさえ思い浮かぶことはなかった。

数メートルも無い間隔になってやっと「彼」が立ち止まる。

そう、互いの顔が見える距離で。

ストロボのような速さを感じた。

橙色の明かりが彼の顔を灯す。

ドクン

「俺の名前はスピリタス。……この名前では初めましてになるんや
るか？」

「あなたが……お父さんの手紙を書いた……!?」

時が止まったかのように微動だにしないコナンの代わりに哀が問いかけた。

彼女もまだこの展開に頭がついていけなかったが、何も聞かないわけにもいかない。

いや、聞きたいことが多すぎる。

「そうや。あの人体がランダムに調子変わるやろ？ だから名前だけは自分で書かはったけど、内容まで書けるほどではなかったし俺が代筆頼まれたんや」

ちやあんと一言一句間違えず書いたで？

そう言うてにつと笑うと右手に持った拳銃を手のひらの上で弄んだ。普段と変わらぬ笑顔と声。

それがあまりにもこの状況に不似合いだった。

「あなたがスピリタスということは、あなたがあの人の側近だつてことよね？」

「へえ、あんた俺のコードネーム知ってたんか。あまり知られてへんて厚司さん言うてはったのになあ。まあええわ。そうや、俺はあの人の側近やで」

スピリタスという名は以前小耳に挟んだことがある。

年や性別さえ謎だったが、ボスの側近で非常に頭の切れる人物だということとはジンから聞いていた。

しかしこの状況は非常にまずい。

相手は拳銃を持っているし、こちらは完全に丸腰だ。

部屋の外からはまだ銃声が鳴り止まないが、それがFBIなのか組織の人間なのかわからない。

第一、入り口は平次の背中によってふさがれている。

逃げ場の無い事態に哀は隣のコナンに救いを求めるかのように振り向いた。

そして気付いた。

彼の手が握り締められたまま震えていたのを。

先ほどの自分と全く同じ状態だった。

「工藤君……」

「なんで」

しつかりしろと言うように声をかけたが、コナンの耳には届かなかった。

ただ、目の前に立つ男だけが眼中にあった。

「なんでお前がここにいるんだ!!」

悲痛な叫びと共に彼を見上げた。

言いたいことは山ほどあったが、それを上手く言葉に出せないまま勢いで怒鳴ってしまう。

いつそのこと何も考えずわめき散らしたいのかもしれない。

だがそれに対して平次はその叫びの理由がわからない、といった様子だった。

「今言ったやんか。俺は組織の人間で、ボスの側近。FBIらがいきなり来るから迎えてあげたんやないか」

「そうじゃない!!　なんでお前が組織の人間なんだって言ってんだよ!!　いつも俺のサポートしてくれたお前がいきなり組織側とか言われて納得するとも思ってたのか!？」

「ああそっちか」

あくまでもいつもと変わらぬスタイルでほんと手をつく。
やっとコナンが動揺している理由がわかったかのような仕草だ。

「その手紙にも書いたやろ？ 組織にはパトロンがつき始めたってあれには俺の爺ちゃんも入ってんねん。大黒さんは元官房長官。んで爺ちゃんは元内閣総理大臣。それでつながりがあつてなあ」

「それで何でお前が組織に入る必要があるんだ」

「初代と爺ちゃんのつながりがあるなら、当然厚司さんともつながりが出来る。……同盟結んだんや。爺ちゃんと厚司さんは」

「同盟……？」

予想外の事実、今まで組み立ててきた組織に対する考察がばらばらと崩れていくのがわかる。

もはや、この先彼が何を言つかなど全くわからなかった。

「自分の政敵を潰してもらう代わりに、資金を提供するってなあ」

自分は政界を退いたとはいえ、まだまだその存在は大きかったし自分に付き従うグループもある。

そこから政界への影響を強めるために、敵対する政治家を潰すよう

要請したのだという。

組織に集まってきた裏社会の人間を使って潰せばいいと。

日本の裏側の闇を淡々と話す彼は楽しそうな笑みを浮かべて2人を見下ろしている。

その目は暗くてよく見えない。

「以前衆議院選に出馬する予定やった土門さんを狙ったやろ？ あれもあの一族が爺ちゃんの政敵やったからや。あの人に議員になられたらやつかいなことになるしなあ」

「じゃあ昨日の外務大臣の息子の暗殺も……」

「ま、同じ理由やな。ああやって敵を消して、爺ちゃんの政界への圧力が強まれば強まるほど

組織の日本での影響力も増す。んで最近、その同盟の保障とお互いの伝達代わりに俺が組織に派遣されたんや。あんまり黒服に家を出入りされたら敵わんし、ちょお孫に代わりをやってもらおうかって」

確かに、身元の不確かな人間が出入りするのは怪しいだろう。

どこぞのマスコミが飛びつきそうな騒動になりかねない。

その点、孫の平次ならどれだけ祖父に会いに来ても不思議ではない。

それだけの理由で彼は組織に入ったとでもいうのだろうか。

「……お前の父親は知ってるのか？」

先ほどから気になっていたことだ。

あの男なら息子をそんな危険なところへいかせはしないだろうと思うのだが。

「そんなん当然やんか！ 自分の妻の父親が組織と同盟結んでたら、そら本人かて同盟結んでも同然や」

平次はそんな疑問さえあっさり消し去ってしまった。

日本の政界の権力者と警察界のTOP2が組織と手を結んでいる。もうこの国は終わりなのかもしれないと哀は背筋が凍りつくような恐怖を感じた。

「だから、組織が潜伏する建物に警察が見回りに来る時は親父から俺を通して、そのまんま密告したんや。今から警察来るしはよ逃げってなあ」

だから日本警察は組織を見つけることが出来なかったのか。

あれだけ動いておいて全く察知されないはずが無いのだ。

どんどん繋がっていく事実を認識するのがあまりにも痛かった。

「じゃあなんで私達を殺さなかったの？今まででも殺そうと思えばいつでもできたはずよ！」

今まで黙っていた哀がたまらず、平次に矛盾を突く。

彼女だつてこんな真実を信じたくなかつたし、否定できる根拠がほしかった。

何よりこれ以上コナンが傷つくのを見たくない。

「別にお前等を殺そうとは思ってへんかつたわ。ジンはあんたをよほど殺したがってたみたいやけど」

平次は意地悪そうに彼女に視線をちらりと移した。
ジンの彼女に対する執着心を見てきたらしい。
だがすぐにコナンに視線を戻す。

「俺が工藤に会いに来たのは、厚司さんに頼まれたからや。ジンが開発途中のアポトキシンを
使つて工藤を殺したという報告があつたのに、その工藤の死体が発見されんかつたしなあ」

パソコンのデータにはまだ工藤新一の死亡だけが未確認となつていた。

アポトキシンを使用した殺人に厚司は気をかけていたのだ。
そして信用の置ける平次、いやスピリタスを使って調査を始めたという。

「「ここで生きてる可能性もあると思て探しに来たら、案の定工藤がひょっこり現われた。しかもすぐにいなくなりよった」

外交官殺人事件で突然現われた東の高校生探偵。

西の高校生探偵を上回る推理で鮮やかに謎を解いた後、再びいなくなってしまった。

さも不思議そうな様子で平次はそのときの記憶をたどっていく。理由は、わかってるはずなのに。

「その後どうやって工藤の足取りが掴めんかった。それでかすかな可能性を当てにしてシャーロックアンが集まるイベントに参加したらお前が来た。工藤新一やなくて江戸川コナンがな」

ホームズをこよなく敬愛し、事件現場をうろつきまわる小学生がその場に来ていた。

それまでは変な子供としか捉えていなかったのだが、そこで考えが変わったのだ。

「お前が工藤やという可能性を考えた時、あることを思い出したんや」

「あること？」

あの場にいなかった哀には状況が想像しにくかった。

「俺が始めて会った時、持ってきたパイカルのことや。あれ、ホンマは毛利のおっさんや姉ちゃんに見せてなんか反応あるようやったら、工藤を匿ってるかもしれんて思ってた持ってきたんやで。もし工藤が生き延びて組織を探るためにどこかに隠れてるんなら、ボスの名前も知ってるかもしれんし。なら、匿ったかもしれん毛利家の人物もコードネームを知っている可能性があるはずやと」

そんな彼女のために平次はわかりやすく説明する。

こんな状況と内容でなければ、親切と捉えることができただろうに。

「ああ、そういえば厚司さんのコードネーム教えるの忘れてたな。パイカルっていうんや。阿笠博士と発表した論文に載せた薬の成分の一つにその名前があってな」

昨夜平次の正体を見抜いた優作はその論文をアメリカで発見したのである。

そして消息を絶っていた宮野厚司の跡をたどり、組織の2代目であることを知ったのであった。

加えてパイカルがコードネームだということは、その名の酒を初対面で持って来た

平次も怪しいと目をつけたという経緯のようだ。

「で、話を戻そか。そこでそのパイカルをコナンに風邪薬やゆづて飲ませたら、

工藤が出てきた。……アポトキシンを飲んだら体が小さくなって、パイカル飲んだら元に戻るんじゃないかと思いついたんや」

そんなことあるわけがないと最初は信じられなかった。

だが、よくよく考えているうちに一つの可能性に行き当たったのだ。

「理論的には可能なことやったんや。アポトキシンは細胞を死滅させて再び復活させることを目的とした薬やからな」

「!？」

アポトキシンの効果を知らされていなかったコナンは身を乗り出しかけた。

板倉から入手した日記に書いてあった文や哀の口ぶりから、「死者を蘇らせる」ことがこの薬の目的ではないかと思っていたのだが。

そんなコナンの心中を察したのか、平次は呆れたように肩をすくめた。

「お前は、あの薬が死者を蘇らせる薬やとも思ってたんか？一度死んだ人間はもう生き返らへんわ。まあ似たような感じの作用があることは否定できひんけどな」

そつやったよな、と哀に同意を促す。
そして問いを重ねる。

「あんたも当然わかってるんやろ？ 厚司さんが今どんな状態か」

手紙に書いてあった「体がおかしくなっていた」という理由。
その原因を作っている彼女がわからないはずがない。
言われたとおり哀はうなずいた。

「……ええ。ランダムに体の調子が変わるとするのは、細胞が死んだり復活したりしてるってことでしょ？ 健常者があの薬を飲むとどうなるかまだまったくわからないから」

「その通り。アポトキシンの最終目的は病気や事故で障害を持ってしまった人間の細胞を一旦死滅させて、もう一度新しい細胞を生み出すこと。そして健常者として再生させることや」

障害の原因である細胞を消去して全く新しい細胞を体内に生み出す。
それがアポトキシンの最終目的。

それは本当に理想だが、それまでの道のりは長すぎた。

現段階でのアポトキシンを健常者が飲用すると、エレーナのように細胞が死滅したまま

復活せず死亡してしまったり、厚司のように体が異常を来す。

もしくは、コナンや哀のように体が縮んでしまうことも。

今のアポトキシンは健常者にとって劇薬と言っても差支えが無かった。

「最終目的に辿り着くことすら確信できないしね」

「そうやな。でも語るに足りる夢でもあった。それで、あれを飲んだあんたらは細胞が死滅する寸前のところで薬の作用が止まってしまった。ホンマはあれ飲んでも細胞が消えるだけで体は幼児化せん。つまり、あんたらの幼児化は予想外の副作用やったっちゅうわけや」

「若返りが目的でもないわけか」

コナンがようやく口を出す。

「そんなんするより病気を生み出す細胞無くすほうが世のため人のため、やろ？ あの薬は現段階ではまだ細胞をランダムに死滅させたり復活させたりすることしかできん。ジンがお前に飲ませたんは、

細胞を殺して殺害方法をわからんようにするためやったんやで」

ジンに頭を強打させられ倒れた時、死因がわからないまま殺せる薬だと、薄れゆく意識の中で聞いたような気がする。

あの時本当ならば、新一は細胞が死滅して体だけが残った状態で死ぬはずだったのだ。

そして、自殺覚悟で飲んだ志保も。

「細胞を操作する薬で幼児化の副作用があると俺から報告受けた厚司さんは言うてきはったわ。工藤新一を監視しろ、とな」

「……殺さずに副作用の観察を選ぶことにしたのね」

「そういうこっちゃ。殺すならいつでもできるけど、こんな副作用は滅多にないしな」

「私も同じ理由なのかしら？」

「あんたは監視もあるけど、薬の開発をしてもらうという理由もあった。組織に無理やり戻しても作る気起こらんやろうから、好きなところで勝手に研究してもうたほうがええと判断したんや。ジンはもう殺すべきやとあの人に強く進言してたけどな」

杯戸シティホテルでジンに銃撃された哀は思わずぶるりと肩を震わせた。

しかしここでこのまま言われっぱなしなのは気に食わない。

「でも、どうしてあなたが側近になれたのかしら？ この組織は疑わしい者は徹底的に疑う集団よ。いくら同盟を結んだとはいえ、警察関係者であるあなたを身近に置くのは疑問が残るわね。スパイかもしれないのに」

「なんや、そんなにこの組織に俺がいるのを否定したいんか？」

そこまで信用されてたなんて光栄やわあ、と冗談めかして腕を組む。哀は不機嫌そうに眉をしかめた。

「あなたが、というよりあなたの一族が組織側にいることがあまり信じたくないわね。

日本そのものが組織に制圧されかねないし。工藤君はあなたのことを否定したいのしょうけどね」

当のコナンは何を考えているのか、ずっと平次をにらんでいる。

哀が聞くことに何も横から言わないことからすると、同じことを考えているのかもしれない。

「あんたはやっぱりつれないなあ。……側近になれたんはあの人があるベルモットを気に入った理由とおんなじや」

「え？」

「更に言つなら、あんたらがここまで生きてこられた理由とも似てるかもなあ」

「……どういふことよ」

謎かけのような彼の言い方に哀はいぶかしむ。
思わせぶりなセリフだが皆目見当がつかない。
ベルモットが自分の父に気に入られている理由さえ知らないのだ。

一体彼の言葉は何を示すのだろう。

思い当たる節が無く戸惑う彼女に、平次は何も答えぬまま面白そうにくすくすと笑っている。

少しだけその時沈黙ができたが、そんな平次に自分から教える気がないと読み取った哀は横に視線を向けた。
あなたにならわかるのかしら、と。

だがコナンの顔を見て驚く。

いつのまにか汗をびっしょりとかいていた。

恐怖ともいえないし、驚愕というわけでもない表情だ。
ただ、信じられないといった目で平次を見上げている。

この世のものではない何かを、見てしまったかのような。

「さすが工藤やな。わかったか」

そんなコナンを見て平次は満足げに組んでいた手を解いた。
拳銃を持つ右手が再び下に降ろされる。

そしてお互いしか見えていないように彼らは視線を交えさせた。

「工藤君？ どうしたの？」

話についていけない彼女は、引きつった顔の少年を案じるように横

からゆさぶった。

左右に首が動かされるがまま、彼は呟く。

「お前……なんてことを……………」

震える唇で漏れた言葉はかすれていた。

搾り取るような声だった。

喉がひゅっひゅっというってカラカラに渴き始める。

平次の言うことが示す事実はただ一つ。

しかしそんなことがありえるというのか。

今の今まで「ソレ」について話していたというのに。

ごくりと唾を飲み込んだ。

まだ心臓の鼓動が高く鳴り止まない。

まさか、まさか、

「こいつ、アポトキシンを飲んでいやがった……！」

アポトキシンを飲んだ？

この少年が？

あのベルモットが？

コナンがかすれた震える声で告げた言葉は衝撃的だった。

しかし、飲んだとしたなら彼も彼女もいたいどこにその効果が現れているというのだ。

一見思い当たるようなものは見られない。

だがコナンはもう見当がついていたらしく動揺を抑えながら問います。

「お前、まさかその右目……」

「ご名答。やっぱり気づいたか」

——右目ですって？

彼女にはもう何かなんたかわからない。
隣で少年は俯いて気にかかっていたことを告白する。

「もしかしたら、とは前から思っていたさ。お前が怪我するのは決まって右側だったからな」

剣道の試合で突かれた耳の裏側も、シンフォニー号で背後から殴打された時も、大阪の試合会場で起こった殺人事件の時も、

怪我するのは必ず右側だったのだ。

「普段は普通に振舞っているが、ふとした瞬間右が見えていないような素振りがあった。……でも、お前がそのことについて何も言わない以上俺から聞くわけにも行かなかった」

何か言いたくない理由があるのだろうと。
だから無理に聞こうとは思わなかった。

「聞いてたらしかししたら俺が黒やと気づいたかもしれんのに、人が良すぎるわ、工藤は」

変なところで気い使うから自分の首しめるんやで？と子供に注意す

るように腰に手を当ててたしなめる素振りをした。

そしてすっかり忘れていた過去を呼び戻すかのごとく遠い目をする。

「去年の春ごろやったかなあ。ちよつとした爆発事故に巻き込まれて右目の視力が完全に無くなったんや。それを聞いた厚司さんが爺ちゃんを通じて親父にアポトキシンを渡してくれてな」

——どうせ何をやっても視力が戻らないなら、一縷の望みをかけて使ってみたらどうですか？

厚司が平次の祖父に勧めた言葉は悪魔の囁きでもあったのかもしれない。

孫を溺愛していた祖父は、その悪魔の薬を娘婿に渡してしまった。

「お前、あれを飲んでなんともなかったのかよ」

健全者にとっては劇薬でしかないと先ほど言っただけである。

「まあ、話は最後まで聞けや。俺はあれを飲んではおらん。効果を部分的に留めるためにアポトキシンの液体を右目の眼球に注入したんや。」

「……直接患部にアポトキシンを入れたのね。眼球の細胞は死滅状態だからそれ以上悪化することはない。効果があるなら細胞の再生

ただだから使用できたんだわ」

やっと話に追いついてきた哀が開発者としての見解を示した。
確かに、できないことはない。

「そういうこと。結果、視力は完全には戻らんかったけど失明はなんとか免れたわ」

「ベルモットはどうなんだよ」

「それはお前のほうが知ってるんとちゃうか？」

「何？」

予想外の返事に戸惑う。

「去年俺がちょうどその爆発事故に遭った時、お前アメリカ行つて通り魔に会ったやろ？そして、その通り魔は深手を負っていた」

だが次の言葉で一つの線が繋がった。

「——！まさかあの男は……！？」

「そう、あれはベルモットの変装した姿やったっちゅうわけや。あ

の時腹にえらい大きな穴できたらしくてなあ。俺のと同じような要領でアポトキシンを注入したみたいやで」

どうやら臓器をやられていたようだと言え足す。

それを聞きながら哀は組織に居た頃の記憶を引っ張り出した。自分の知らない出来事だったが、その後にあつた「あの事件」には心当たりがある。

「じゃあやつぱりベルモットは、怪我をした後に起こったあの事件で私のことを……」

「あー、あんたはベルモットに憎まれているのを自覚していたな」

「一応は、ね」

ベルモットの冷やかな視線を思い出して冷や汗が出たが、ここは苦笑してやりすごす。

さつきとは反対にコナンは何のことだと言わんばかりの目を彼女に向けていたが。

「話ついでや。工藤にも教えといたるか。クリス・ヴィンヤードは10代のころ母と仲違いして

絶縁状態になったんや。親の七光りでムービースターにはなったけどな。それでも母と会うことは滅多になかった。そしてワルイオトモダチとつるむようになっていた」

それは知っている。
内心でそう答えた。
母親のシャロンから一年前直接聞いているからだ。

「裏社会にも顔を出してたらしくてな。そこにどこから流出したのか、アポトキシンが麻薬と同じ扱いで出回ってきたそうや。そんでそれをアホなことに彼女は飲んでしまった」

「死んだのよね、彼女。私のお母さんと同じように」

言葉を受けるように続けた。

「ああ。それでそんな劇薬を作ってしまったあんたらを憎むようになっただけだな」

ほんとに麻薬なら死因もわかっただろうに。
アポトキシンのせいで彼女の死は原因不明の突然死と判断されてしまった。

「じゃあ去年の葬式で棺の中に入っていたのはシャロンではなくやはりクリスだったんだな」

今のベルモットがシャロンの変装だと考えているコナンには合点がいく。

しかし開発者として疑問が残る彼女は更に問うた。

「ベルモットの副作用は何だったの？ あなたが完全に視力が戻らなかったのなら、彼女も腹部の傷が完治していないのかしら？」

ぱつと見は平次と同じく彼女もどこも悪いところは見つけれない。腹部ならそれもばれないだろうと踏んだのだが。

「そういえばあんたらは知らなかったんやな。あのベルモットの顔がほんとのシャロンの顔やてこと」

「何だと!？」

——あれはシャロンの変装ではなかったのか？

「あの人は副作用で細胞が完全に以前の状態に戻る手前で止まってしまうらしいで。……お前ら二人のように体が縮むなんて滅多にない作用はなかったけどな。まあ、昔のようなべっぴんさんに戻れたんやしその辺はええんとちゃうか？」

その後娘が死んだんは災難やけど。

彼が冗談めかして笑う。
そして話を続けた。

「薬を飲んで命に関わるような副作用が起こらなかった俺らはあの人の目に止まったんや。今の薬の効果を考えたら、ほとんど成功とってよかったしな」

その時、一際大きい銃声がドア越しに聞こえてきた。
構成員とFBIが激しい銃撃戦を繰り広げているのが音でわかる。

その突然の音で一瞬部屋に沈黙が出来た。

そしてその銃声をちらりと後ろを見て確認した平次は、やれやれといった感じにため息を一つつく。
下ろしていた腕をゆっくり水平に挙げた。

「もうそろそろ話は終わりにしたほうが良さそうやな。これ以上ここにいたら外のドンパチに巻き込まれてしまうわ」

ちょうど、コナンを拳銃の照準に捉える形になる。

「ああ、誤解すんなや。俺がこんだけ長いこと話してたんは、別にお前等の命延ばしたとかそんなんとちゃうで。厚司さんが研究所から完全に逃げ出すまで、ここに来る奴等を足止めしておくのが俺の役目やったし」

「……俺達を殺すのか」

「そら、ここまで来てなんもせんわけにはいかんやろう。いくら観察し甲斐のある実験体やゆうても、これ以上野放しにするわけにはいかへん。俺の正体も知ってしまったたしな」

「かちり、と安全装置を外す。」

それに合わせる様にコナンは哀をかばうかのように彼女の前に身を出した。

そうしている間も視線は平次のほうを向いたままである。
そらした瞬間、何をさせるかわからないからだ。

コナンも同じく時計型の麻醉銃に手をかける。

「やめとけ。それ打つ前に俺のほうが早いわ。——覚悟、決めろや」

彼が本気だと悟った哀は焦ったように目の前に出たコナンの肩を掴んだ。

自分の前から退けというように。

命乞いなどほしない。

ただここでコナンを死なすわけには行かないと思った。

彼女の無言の思いを背中で受け止めながらもその場から動かず彼はぎり、と齒軋りをする。

キック力増幅シューズを使う隙も無ければ、麻酔銃も間に合わない。何よりこの男の前で小細工が通用するはずが無いのだ。

——このまま俺達は本当に服部に殺されるのか？

何も打開策の無いまま突きつけられた銃口をにらみ続けた。
いや、それしかできなかったのだ。

「ホントにお前には感謝してんねんで？ お前の周りには組織の敵がわんさか寄ってきよったし、それを親切にお前は俺に教えてくれ

た。おかげで組織は対策を早急に打つことができたわ」

一体何に対する嘲りだったのか。

それだけでもお前の存在は十分役に立ったと苦笑した。

それに対して観念したかのように、コナンはさっきからずっと思っていたことを口にしようとした。

聞きたいような、聞きたくないような、そんな疑問だ。

でも殺されるなら、せめてこれだけは聞いておきたい。

「……今までのお前は、ずっと偽りだったのか？」

子供の姿の自分に向かって大人の彼がまるで子供のようににはしゃいで寄って来た。

そして江戸川コナンに「工藤」と何度も連呼した。

それだけで救われてきたのだ、自分は。

見失いそうになる本当の自分を平次のおかげでなんとか維持してき

たのだ。

推理に上も下も無いといえば、あっさり自分の考えを見直し
推理で追い詰めて殺してはいけないといえば、命がけで犯人の自殺
を食い止めた。

そんな彼を本気で組織の人間だと信じられるだろうか？

これまでの彼の行動が罪人のする行為だと思えるだろうか？

どれだけ証拠を述べられても、感情が追いつかなかった。

探偵失格といわれようがそれだけではできなかった。

どうしても信じる事が出来ない少年はやりきれない思いで彼を見
上げた。

否定してくれというように。

だが当の彼は、今までの陽気な笑顔から一転して無表情になり、冷
やかな目で二人を見下ろす。
そして告げた。

「偽りも何も、俺はお前に何も言ったことがない」

銃口がコナンの心臓に向けられる。

「今まで俺は構成員やないとか、組織のこと知らんとか、そういうことは言ったことがない。
お前に嘘はなんもついておらん」

ぐらつくような衝撃。

今までの中で最も心に突き刺さる言葉だった。

コナンは何も言い返せない。

彼の言うことは本当だったからだ。
今から思えば白々しいセリフはあったが、嘘らしい嘘は何もついていないのだ。

初めて気付いた事実には戸惑う彼を見たからなのか、
ここへきて初めて平次が眉をしかめた。

何かを苛立っているような目だ。

照準を定めた銃を握る手に力がこもる。

そして吐き捨てるように、こう言った。

「お前が俺に何も聞かへんかったんやろ……！」

その瞬間、けたたましい音と共に扉がぶち開けられた。
驚く三人を他よそに、散弾銃で鍵が粉々に散って煙が部屋を覆う。

「な、何なの？」

チリが舞い降り、無理やり空けられた出口から男の姿が見えてくる。

「その子達から離れろ！！」

赤井秀一。もう一人のシルバードレットだ。

かすり傷だらけの顔と所々破れた服。
血をぬぐった手で銃を平次に向けた。

「赤井さん！」

思わぬ出現にコナンが眩く。

修羅場をくぐり抜けてやって来た彼は殺気立てたままの姿で

平次を面と向かい合う。

平次も向かい合った彼に不適な笑みを返した。

18 (後書き)

コミックス23、31、35巻参照

散弾銃の被弾で皮膚を切った平次の右手から血が一滴床に滴り落ちた。

しかし銃を構えるその手がゆらくことはない。

「思ってたよりも遅かったな、赤井秀一さん？」

「赤井さん……なんでここが」

余裕の表情で言い放つ彼とは反対に、コナンは突然現われた味方に気を緩めることなく問いかける。

入り口の赤井と壁側のコナンたちがちょうど平次を挟む形になっていた。

赤井はコナン達に銃口を向けたままの平次へショットガンを突きつける。

「気付いてはいないだろうが、その子には盗聴器がしかけてある」

「え？」

視線が向けられた哀は驚いて自分の体に手を当てた。

そして小さく、あ、と声を上げた。

服のポケットを探るといつのまにか小さな機体が入っていたのだ。

「もしかしてジョディさんが……」

「そういうことだ。お前の様子がおかしいと感じたアイツがこっそり入れたんだ」

彼女の車内で少しだけ会話した時だ。

後部座席に座った自分に運転席の彼女が一度だけ振り返ったの思ひ出す。

「あまり思いつめないでね」と優しく微笑み、自分の肩をぽんと叩いたのを。

あの時ジョディは哀の服に盗聴器を入れたのだ。

何かを思いつめた顔をした少女を心配して仕込ませたのである。

「そして受信機を俺に渡した。自分よりも俺が持っていたほうがためになるとか言ってたな」

——あの子はおなたが守ったほうがいいでしょ？

訳知り顔で彼女は赤井に突撃の際受信機を手渡した。
囹役の自分が持っていても何も出来ないとも言って。

「なるほど。やっぱりあの先生は勘がええな。前会った時も俺のこ
と気付いとったみたいやし」

「ご託はいいから早くその銃を下ろせ。俺はその少年と違って容赦
はしない」

盗聴器で三人の会話を一部始終聞いていた彼は全てを知っている。
鬼気迫る目つきで目の前の青年を捉える。

「ハハハ、いつも冷静なあんたがえらい熱血やんか。明美さんとい
いシェリーといい、どうも宮野姉妹は銀の弾丸に惹かれる傾向があ
るみたいやな」

意味深なその言葉に赤井のライフルを握る手が強まった。
平次の言葉にコナンと哀は理解が追いついていない。

「ここへ来れたってことは廊下で待ち構えていたジンを殺ったって
ことか？」

「……奴は仲間任せだ。ここで戦うことが俺達の目的ではないか
らな」

実際ジンと相対した彼はしばらく激しい銃撃戦を繰り広げたが、
仲間からの「Entrust our here! Go ear

ly!」（ここは任せて早く行け!）という言葉に了承して一足先に抜けてきたのだった。

「やっぱりそうか。あの男がそう易々とくたばるわけがないもんなあ。で、お前は俺をどうするんや?」

「抵抗するなら撃つ。その負傷した右手で渡り合えらと思わんぼうが身のためだ」

「へえ……」

取り付く島の無い言い方につまらなそうな顔をする。

そして何かを企んでいるような目で彼は一瞬ちらりと辺りを見回した。

視線の先には時計やベッドやパソコン、その他諸々。

——何だ?

コナンはその不自然な行動に疑問を感じる。

だが、気にしている場合ではない。

ずっと血が出続ける右を自分達に、左は赤井のほうを向いているのだ。

少しだけ沈黙があったが、もう一滴、血が甲の上で留まりきらずに

床に落ちるや否や。

突然彼は拳銃の引き金に指をかけた。

コナンに向けた銃口が火を噴くより先に赤井のライフルが音を立てる。

「服部！」

平次が撃たれたと思つたコナンは叫んだ。

ダアンという銃声が部屋に響く。

そしてうめき声が漏れた。

しかしそれは思っていたほうとは違う相手で。
ややぐらりと体をよろつかせる。

「両利きか……っ！」

赤井は防弾ベルト越しにひびのいった肋骨を抑えた。

「そついつこつちゃ。ご愁傷さん」

平次がニカッと白い歯を見せる。

右手は散弾銃でよりいつそう深く血がほとばしっていたが
形勢は劣勢ではない。

彼の左手には折りたたみ式の銃剣。

コートの中に忍ばせておいたそれを、右手に注意をそらした瞬間取り出して発砲したらしい。

——一秒あるかないかの早業でやってのけたというのか？

一瞬の撃ち合いにコナンと哀は何も言えなかった。

「俺にはやっぱり剣やる？ でも遠近どっちもできんと不便やし、
両方いけるこれは結構意気に入ってんねん。殺傷能力も高いしな」

そう言って子供二人に背中を見せて赤井に面と向き合った彼は
ガチャリと両方の銃の引き金に指を置いた。
それと同時に赤井も散弾銃を彼に再び向ける。

二人の視線がぶつかり合う。

互いに何かを了承したかのようにぴたりと銃同士が水平に構えられ

る。

「――行くで」

数秒の間部屋の壁という壁に穴が空きまくる銃声が木霊した。

その頃研究所の正面入り口から爆音と共に潜入したCグループは、地下へと続く階段で迎撃してきた数人の構成員と激しく銃声を鳴らし合った。

ジョディ達は敵の弾がいくつも側をかするのを気にすることなく、トカレフを撃ち続ける。

「キャハハハ！ いいねえ、この感覚！！ アタイは好きだよ！！」

不気味な笑い声と共に、相対したキャンティも狙撃銃で応戦した。数だけで言うのならFBIのほうが圧倒的に勝っているが幸か不幸か、偶然襲撃時に研究所に居合わせた彼女やコルンのせいでそれは相殺されている。

むしろ時間がたつにつれ形勢が逆転されそうな勢いだ。隣に居た仲間が無言でどさりと倒れた。

彼女自身も左腕を負傷しており、痛みが全身を襲っている。顔をしかめながら空になったトカレフを投げ捨てた。

——But”B” which Shu belongs was
able to go underground.

He should do something if we
hold out here……!

（でもシュウのいるBは地下に行けたわ。ここでふんばれば彼がなんとかしてくれるはず……!）

彼に望みをかけて、彼女は新たな銃の引き金を思いつきり引いた。

地上で繰り広げられる激戦と劣らない数多の銃声が弾切れと共に終わりを告げる。

辺りの調度品は銃撃戦のせいで原形を留めていなかった。

コナンと哀は飛び交う銃弾の下を掻い潜って赤井のそばまで来ていた。

一方撃ち合った二人は息を切らすことは無いが、赤井は腹部を押さえ、平次は右肩をかばっている。

互いに被弾したのだ。

コナンは自分を殺そうとしていた平次のほうを苦しそうに見つめる。死角の右目はやはりここでも障害になっただけ。

「まだ薬莢を持っているようだな」

「そらあんたもやる。別に弾なんかなくてもこれであんたを斬るにとくらいできるけどな」

「その貫通した右肩でか？」

「人のこと言えんくせに」

がちやり、と銃身を刀のように構え刃の部分を相手に向ける。
いつもの剣道のスタイルだ。

「どこまでも戦うのか。なるほど、やはりお前はスピリタスという名がふさわしいようだ」

赤井はどこか哀れみを持った目で右腕が血まみれの青年を見る。
そして懷に手を入れた。

応戦する銃を出すのか？とそこにいる三人は同じことを予想する。

だが、取り出したのは一つの卵形のボトル。

「まさか……っ！」

彼の意図をいち早く察知した平次が制止するように彼に向かって刃を突こうとしたが、赤井のボトルのボタンを押すほうが早かった。

辺りが真っ白になるかのようなまばゆい光が部屋中に照らします。

閃光弾の光が成りを潜めるころには、赤井とコナンと哀の姿はなくなっていた。

「そういえば、戦うのが目的やないって言うってたな……」

自分以外誰も居ない廃墟と化した部屋で平次はポリポリと頬を掻いた。

しまった、というような仕草だ。

つい熱くなりすぎて、彼が逃走という手段を選ぶとは思いつかなかったのだ。

追いかける気は無いのか、ため息を一つついた。

そして赤井とやり合う前も辺りを見回す振りをして確かめた時計を再び見る。

銃撃戦で台の上にあった時計は床に落ち、針がとまっていた。

仕方なく自分のポケットから携帯を取り出す。

19時20分。

「まだそんだけしか経ってへんのかいな……」

脱力したかのように壁に背中をもたれかけ、そのままずると床に腰を降ろした。

右肩の血が壁に跡をつける。

しかし銃剣だけは手離さない。

携帯を右手でズボンのポケットに突っこんだ。
ストラップ代わりにつけていた幼馴染からのお守りが入りきらずに
ぶらりと垂れた。

厚司はもうこの周辺からは脱出しているだろう。

今日は体調が悪いほうだったのでその辺が気がかりだったが、
ベルモットと一緒にいるから最悪の事態は免れると信じている。

ぼうつとしながら、時計ではなく今度は本当に辺りを見回した。
弾丸で穴を空けたベッドの羽毛から出た白い羽が床に散らばっている。

何気なくその一枚を血まみれの右手で取った。

純白が紅色に染まる。

左手には銃を、右手には鮮血の羽を。

「……まあ、ええか」

その羽から白を完全に無くすように強く握り締めた。

三人は必死に地下を走っていた。

閃光弾を使うや否や、赤井は二人の首根っこを掴んで部屋を脱出したのである。

彼も負傷しているため、今はコナンも哀も自力で走っているのだが。

どこからか銃声が聞こえてくるが、こちらの廊下にはだれもいない。ボスの部屋にいたときは外でFBIと構成員がやりあっていた。

しかし脱出する際は廊下まで光った閃光弾のおかげで全員の動きが止まった。

その隙に構成員達の間を通り抜けて逃げたのだ。

「なあ、服部をあのまま放っておいていいのかよ!」

息継ぎをしながらコナンが前を走る赤井に問いかける。

「俺達の目的は戦うことじゃないと言っただろう。資料の奪取は仲間に任せて、お前達を外に出さなくてはならないしな」

暗にここへ哀と来たことを批難しているようだ。

まあ、こちらが悪かったのは重々承知しているが。

哀はポケットに父からの手紙を入れて落とさないよう気をつけながら走っていた。

自分の感覚がにぶったせいなのか、以前感じたような組織の匂いは今は無い。

しかしなぜこの男から組織特有の空気を感じたのだろうかと疑問に思う。

反対に、平次からは鈍る前から匂いを感じ取れなかったのかも謎だ。

そんな彼女の考えを知らない赤井は更に言葉を続けた。

「それにあの少年は人を殺したことがあるようだ」

「——！？ふざけたこと言ってんじゃないねえ！！」

思いもよらない発言にコナンは怒鳴りつける。
あの平次が人を殺したことがあるとはどうしても思えないし、思い
たくない。

「普通、一般人が銃を撃つときは躊躇うものだ。人を殺すという恐
怖が己を襲う。だがあの少年は一切迷いが無かった。俺もそうだが、
引き金を引く行為に恐れが無い証拠だ」

「そんなのあんたの想像だろ！」

「じゃあお前は人を殺すかもしれない引き金を躊躇せず引くことが
出来るか？」

「！」

思わず言葉が詰まる。

誰かを守るために銃を撃つことに躊躇いは無いが、殺すとなれば話
は別だ。

守るためであれ殺人は絶対にできない。

しかし先ほどの平次はどうだっただろう？

後ろを見ないがコナンの様子を背中で感じ取った彼はそのまま言っ
た。

「だから閃光弾で隙をついて逃走した。本当はあの部屋のパソコンのデータが欲しかったが
殺しの経験のある少年を前にして、相打ちを覚悟しないかぎりそれ
はできないと判断したのさ」

あの年で人を殺すというのは一体どういう経緯なんだと赤井は不可解さを感じた。

世界最強の酒・スピリタスの名を貰い受けひたすら戦い続けた少年
自分の後ろで走る少年のことも考えると、それは少し哀れに思えた。

「赤井さん！ 前！！」

その時哀が叫んだ。
はっとして現実に戻ると、遠くから構成員がやってくるのが見えた。
一旦立ち止まって後ろを振り返ると横に別の廊下がある。

「お前等はあの廊下から行け！！」

「赤井さんは！？」

「俺はあいつらを引き止めておく！ お前等を組織の奴等に見せる
わけには行かない」

「わかった！」

うなずいてコナンは哀の手を掴んで来た道を逆走し始めた。

曲がり角から左の廊下に入ると、幸い誰もいなかった。

頭に叩き込んでおいたこの地下の見取りを思い出す。

そして、この廊下がその見取りに含まれていなかったことに気付いた。

「このままどこへ行くの!？」

彼女もそれを気付いたようで、引つ張られながら慌てて言う。

「知るか！ でも組織に俺達の顔を見られるわけにはいかねーだろ
！」

とにかく誰もいない場所まで行かないと、と空き部屋を走りながら
探す。

前方を見ると扉を一つ見つけた。

——誰もいないか確かめてあそこに入るか

そう決めて、その扉の前で急ブレーキをかける。

二人とも息は上がっていた。

「ここに入るの？」

「確認してからな」

開けるのに一瞬躊躇ったが、ここで立ち止まるわけには行かない。いつ構成員が来るかわからないのだ。

覚悟を決めてゆっくりとドアノブをまわす。部屋の中は蛍光灯が一つあるが、電源が入っていないようで薄暗い。人が立っているようには見えなかった。

「誰もいないのか……？」

ほっとしながら二人で恐る恐る中に入る。暗くてよくわからなかったが、何やら薬品の匂いが鼻をついた。ふと見上げると薬品の入った棚がいくつか置いてある。

どうやらここは医療室らしい。

「っ！？」

哀が何気なくそばにあったカーテンを引いて、危うく悲鳴を上げかけた。

人が寝ていたのだ。

「大丈夫、意識はないようだ」

焦ってコナンが確認すると、ベッドに眠る男は酸素マスクをつけて眠っていた。

側の機器には電源が入っているらしい。

機器の緑色の光がうつすらと男の顔を映し出している。

「こいつは……！」

コナンはこの男の顔に見覚えがあった。

昨日の国会議員襲撃事件で逃走した構成員の一人だ。

それも、赤井が発砲し腹部を撃たれた相手である。

この男に発砲した弾に発信機がついてあったからFBIは組織のアジトがわかったのだ。

昨日の撃たれ方からすると、目の前の男は重症だろう。

しかしいつ目が覚めるともわからない人間のいる部屋に留まるのは危険だ。

「他を当たってみよう」

「そうね」

ここは諦めて再びドアノブに手をかけようとした瞬間、外で何かが大きく崩れる音がする。
床が縦方向に数回揺れた。

「何だ!？」

急いで扉を開けると、進もうとしてた道に大きな瓦礫の壁ができていた。

完全に廊下をふさいでいる。

彼の背後から彼女も覗き込んでその様子を見た。

「どうして……」

「多分、上で爆発がもう一回あったんだ。ジョディ先生達が仲間が地下にいるのに、また爆弾を仕掛けることはないだろうから、組織の奴等がやったんだろっな」

前方をふさいだ瓦礫の山を目にしてそのまま立ちすくんだが、後方からいつ敵がやってくるかわからない。

逆走なんてもつてのほかだ。

赤井と戦っている構成員がいる。

仕方なく二人は負傷した構成員が眠る医療室に潜むことになった。

20（後書き）

余談ですが、銃剣とはこういうものです。←

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%8A%83%E5%89%A3>

平次にぴったりだと思ってこれにしました。

二人は暗闇の医療室で、隅の壁側に腰を降ろしていた。男が眠っているベッドから一番遠くの壁際だ。

遠くのほうで鳴っていた銃声は今では聞こえない。

弾切れしたのか、それともどちらかが死んだのか。

前者であってほしいとコナンは思った。

今までの経緯からか、コナンと哀は無言でじっと座っている。互いの腕が触れるか否かのぎりぎりの距離を保ちながら。

「……何かなんだかもわからないわね」

彼女は天井を見上げて呟く。

そして横目でずっと黙っているコナンを見る。

もしかしたら、彼が壊れるかもしれないと案じていたのだ。

自分自身だって父親がボスだということで大きな衝撃を受けた。だが、それは前々から感じていたことでもある。

驚きよりも自分の予想が当たったという悲しみのほうが強かった。

しかし彼はそうはいかないだろう。
今までずっと相棒だと思っていた少年がいきなり構成員だと告げた
のだから。

何の前触れも無く突然に。
更には自分達を殺そうとしてきた。

そのショックは計り知れないだろう。

「……なあ」

「何かしら？」

視界のまっすぐ前方にある時計を眺めながらコナンが声をかけた。

「あいつは本当に人を殺したことあると思うか？」

「さあ……でも、あの赤井って人が不確かなことを言うとも思えないけど」

構成員なら、暗殺の一つや二つやっつけていてもおかしくない。
実際自分も生体実験を行っていたのだ。

殺人に等しいことをやってしまった自覚はある。

だからこそ、コナンに初めて会った時に起こった事件で何のためらいもなく銃を発砲したのだが。

それをここで言うつもりは無かったが、平次が殺人を犯した可能性は十分あると彼女は思っていた。

「俺、あいつに聞いたことあるんだよ。人殺しちまった事あるかって」

財閥の一家で起こった殺人事件。

その悲しき惨劇を引き起こした犯人が自殺するつもりだと知ったとき、

彼に何気なく聞いたみた。

——お前さー……、人……殺しちまった事あるか？

——あん？

「そういえばあいつ、あの時答えなかったんだよねー……」

自分は彼の答えを期待して聞いたわけではなかったので、特別気にすることは無かった。

だが今考えると、あの後自分が「推理で人を追い詰めてみすみす自殺させちまう探偵は殺人者と変わらない」と言ったのに対して、彼は「耳が痛うてかなわんわ」と答えていた。

もしかしたらあれば、既に彼は殺人を犯してしまったという返事だったのではないだろうか。

「でもそれだけで彼が殺人をしたかどうかは言い切れないわ」

哀は内心とは違う言葉をかけた。

傷ついた彼をフォローして、いつもとは逆の立場だなと感じる。だがいつも元氣付けてくれてるからこそ、今度は自分が彼を支えなければと強く思う。

そんな彼女の思いには気付いていないのか、彼は言葉をゆっくりと紡ぎ出した。

「……あいつはさ、俺にとって蘭と同じだったんだよ」

「え？」

「ずっと一緒にいた蘭と同じように、あいつも今までずっと一緒にいたように感じていたんだ」

ハハ、と自嘲気味に彼は笑った。

「でも実際はあいつと出会ってまだ一年も経ってないんだぜ？一年も満たないのに、俺はあいつのことを全部知った気でいたんだ」

思い上がりにも程がある。

自分の身勝手さに怒りを超えて情けなさを彼は感じた。

「よくよく考えたら、俺あいつのこと何も知らねーんだよ。片目を失明した爆発事故が一年前。その一年前すら俺は今まで一回も聞いたことが無かった」

哀は何も言わない。

彼は自身に語りかけるかのような様子だ。

ここで自分が口を挟むのは彼の心を更に乱れさせると思った。

「あいつの過去でちゃんと聞いたことがあるのは中三の冬の殺人事件だけだったな。それも、俺からではなくあいつから教えてくれたもんだっだし」

時計から視線を外し、暗闇で先の見えない床を見る。

「もしかしたら、あいつと会ったび俺があいつを苦しめていたのか
もしれねえ」

——お前が俺に何も聞かへんかったんやろ……！

あの言葉が蘇った。

あれを言った時の彼は苛立っていたように見えた。

そして同時に苦しんでいるようにも見えた。

あれは自分の期待が見せる幻だったのだろうか？

「もしも、って言葉はあまり使いたくないけどさ、……それでも思わずにはいらなかった」

お前は何者なんだ？

こんなことになる前に、
もしも、
そう彼に聞けば何かが変わったの
だろうか？

21（後書き）

コミックス16、50巻参照。

明後日もしかしたら更新できないかもしれません。
申し訳ないです。

一人で話し続けるコナンはどうやら自棄にはなっていないようだ、哀は安堵した。

心の整理をつかせるために自分の心の内を話しているのだと気付いたのだ。

だんだん彼の目に力が戻ってきているのを感じる。

それは恐らく、彼が黒であり続けた原因の一端が自分にあるのなら自分がどうにかすればいいのだという、活路を見つけ始めたからかもしれない。

——余計な慰めは必要無さそうね

彼女はそのまま彼が前を向いてくれたらと願う。

一方コナンは暗闇の中でひたすらこれからのことを考えていた。

客観的に今の状況を見たら、非があるのは平次のように見える。

しかしコナンにはどうしても彼が悪いようには思えなかった。

「何も聞かなかったから」と言われてからずっとだ。

さきほど述べられた、「祖父の政略と父親の同盟」を聞いてもそれが本当だとは今も信じ切れていない。

大きなことかもしれないけれど、平次が黒になる理由にしては、それはとてもちっぽけなことに見えた。

たったそれだけのためにあいつは悪に手を染めたというのか。

コナンが知る限り、彼がそんな男には見えない。

祖父の権力争いやそれに連なる父親と繋がって、一緒になって罪人となるとは思えない。

しかしそれはあくまで「コナンが知る限りの平次」である。
自分が知らない部分が彼にはたくさんあることを先ほどの対峙で知った。

『もしも』

そんな言葉を使っただけでも意味は無い。

過去のことを悔いても何かが変わるわけではない。

だから、

「俺、あいつともっと話がしてえな」

今まで何も聞かなかったのなら、

「あいつに許してもらおうとは思わない」

これで全てが終わるとは思わないから、

「ただもつとあいつのことを俺は知らなくちゃならないんだ」

彼が自分の元から去るのを阻止するためには、自分自身でどうにかしないといけない。

だから彼のことをもつとたくさん知る必要があると思った。

黒に染まった、また別の何か理由があるような気がしてならない。

——あいつはもう一度俺にチャンスをくれるかな

チャンスがもらえないなら、自分で作るまでだけど。

地響きやら銃声やらが立て続けに鳴る廊下で黒服の男が数人足早に歩いている。

男達の手には拳銃。

黒色でわかりにくいが、服には返り血がたくさんついていた。

「兄貴、早くここを出ねえと俺たちまで瓦礫に挟まれちまいますよ」

焦った顔でウォッカが前を歩く金髪の男に聞く。
FBIにやられるという考えはあまりなかった。

あちら側の人数を上回る戦闘力が自分達にはあったからだ。

事実、現在こちら側が劣勢だという情報は入ってきていない。

むしろ優勢と言ってもいい。

しかしその優勢を保つために、お構い無しに爆弾を使っていることだけが気がかりであった。

地下の自分達にいつ天井が落下してくるかわかったもんじゃない。

資料を奪取されることだけはなんとしても阻止したいので爆弾使用は仕方がないのだが。

そんな中、ウォッカに聞かれた男は後ろを振り向かず言い放つ。

「フン、その時はそれまでだと諦めるんだな」

ジンはさほど危機感が無いように返事をした。

「しかし医療室に行く前にその向こうでやりあっている赤井を仕留めたほうがいいんじゃないんすかねえ？ さっきの報告だとあいつは肋骨をやられているようですぜ」

十分ほど前、ジンやウォッカは正面突破を試みたグループとは違う方向から潜入してきた赤井達に迎撃した。
彼と対峙するのはもう何回目だろうか。

しかし彼は共にいた仲間任せ、違う方向へと去ってしまっていた。方向を考えると、向かった先は恐らくボスの部屋。

「スピリタスにやられたんだろうよ。アイツはあの方の部屋で足止めをする役目を命じられたはずだ。だが、今赤井秀一が向こうで違う人間と戦っているならアイツは既に殺されちゃったのかもな」

「そ、そんな……」

スピリタスの戦闘能力が非常に高いのはジンも知っている。

しかし赤井も相当なものだ。

互いに本気を出せば相打ちが妥当な線だと踏んできた。

ちなみに、赤井が去った後のFBIのグループは仕留めてある。

「まあそんなことは俺には関係無え。負傷した赤井にも興味は無い。……俺が用があるのはここだけだ」

そう言つてとある部屋の前で立ち止まった。背後でウォツカ達も足を止める。

医療室だ。

この部屋の横には大きな瓦礫の山ができていた。

地上からの爆破に巻き込まれる可能性を承知していたが、どうしても気になることがジンにはあった。

自分のプライドに関わる問題なのだ。

後ろに控える構成員達には何も知らされていない。

ただ組織の大幹部であるジンを一人で行かせるわけにもいかず、ウオツカが部下を集めてついでにきたのである。

「俺の予想が当たればいいがな」

勘はいいほうだと自負している。

不敵な笑みと共にジンはドアのノブに手をかけた。

ジンがドアを開けるとそこには暗闇の世界が広がっていた。心電図の電子音だけがその部屋に響いている。

彼は一帯を一瞥すると向かって右側に視線を移した。

比較的広い医療室の一角にある、カーテンで仕切られたスペースに足を進める。

そしてそのカーテンを何のためらいもなく引いた。

開けられた中に居たのはベッドで眠っている重傷の構成員。

酸素マスクをつけて苦しそうに寝ている。

「兄貴、一体この男に何の用が？」

「アレを出せ」

「はっ」

ウォッカの質問は無視して、側の部下に言うておいた「例の物」を出すよう命じた。

部下が急いで懷から出したのは金属探知機。

恭しくジンに渡すと、彼は眠っている男の上に掲げる。

迷うことなくそれを男の負傷した腹部に当てた。

するとピピッという電子音が発せられる。

腹部に何かがあるらしい。

「でも兄貴、これは中に残ったままの弾丸じゃないんすかねえ？」

報告で聞いたところでは、この男は赤井に撃たれて弾を摘出することなくここへ運ばれてきたとされている。

この探知機の反応はそれではないかと予測するのは不思議ではない。ウォツカは目の前の男の行動が全く読めず戸惑った。

しかしジンは探知機の反応を暫く眺めた後、探知機は部下に押し付け徐に銃を取り出した。
左手に持った銃を男の顔に向ける。

「あ、兄貴!？」

突然銃声が数発鳴り響いた。

一瞬人のうめき声が聞こえたが、それはすぐに消え去った。

「な、何で……」

ウォツカはいきなりの暴拳にうつたえを隠せない。
後ろに居る部下達も冷や汗を流しながら発砲したジンを見た。

だが当の本人は顔についた返り血をふき取ることなく、その銃をポケットに仕舞う。

そして顔面が跡形も無く潰れた男を冷ややかな目で見下ろしながら告げた。

「こいつが元凶だったってわけだ」

「げ、元凶！？」

「この襲撃の案内をこのゴミがやらかしたってことだ」

未だ彼の言うことが掴みきれないでいる部下達に見せつけるように、彼は探知機の反応があった腹部に手を伸ばす。

なんとも言えない残酷な音が断末魔となった。

「ひ……っ」

この場所では異質を放つ一際甲高いかすれ声が部屋に小さく響いた。哀の悲鳴だ。

ベッドの反対側にあるデスクの下にコナンと隠れていたら、突然目の前に人間の一部が飛んできたのだ。

慌ててコナンが彼女の口を塞いだが、もう遅い。

彼女の恐怖はジン達にも聞こえてしまっている。

「だ、誰だ!？」

「……ほう、こんなところに残党が居たか」

ジンの位置からはデスクの側面しか見えない。だがそこに誰かが潜んでいることは一目瞭然だ。

彼が顎でデスクを示すと、そこに向かってウオッ力達が一斉に銃を構えた。

——どうする!？

コナンは哀の口を片手で塞いだまま、一気に絶体絶命となったこの

状況の打開策を高速で考えた。

逃げるにしろ立ち向かうにしろ、ここを這い出なければ何も出来ない。

しかし出た瞬間撃ち殺されるのは確実である。

「ゴミに取り付けた発信機でも辿って来たのか？ FBIはもうすぐ全滅できるが、これのおかげで研究所はもう使えねえ」

抑揚の無い言い方だが、ジンの目には確かに怒りの色が混じっていた。

男の腹部から無理やり引き出した、発信機付きの弾丸を床に落として踏みにじる。

彼はFBIに襲撃された時には既に、一人だけ負傷した構成員に疑惑の目を向けていたようだ。

自分の裏をかいいて発信機を弾丸に埋め込んだ赤井に何とも言えぬ憤怒の感情が湧き上がる。

「そこから出て来い。聞きたいことがある。さもなくばそのまま机越しに蜂の巣にしてやる」

哀はガタガタ震えたままだ。

恐怖の対象である男にもうすぐ殺されると感じて錯乱状態になっていた。

コナンも非常に焦ったが、ここで出ないままだとすぐに殺されることはわかってる。
出たとしても恐らくFBIの内部情報を聞きだした後に殺すつもりだということも。

——なんとかしてこいつだけでも逃がさねえと……！

傍らで震える少女に目をやり、自分を咄にして彼女を外に出すしかない結論を出す。

「どうやら出る気はないようだ。——やれ」

ウォツカ達が引き金に指を入れる。

その音にコナンが覚悟を決めて姿を現そうとしたその時だった。

ものすごい爆音と共に彼の目前で側の壁が吹き飛ばされたのは。

デスクのおかげでコナンと哀にはその壁の破片は飛んでこなかったが、ジンたちにはその数多の瓦礫が襲ってきた。爆破の衝撃で白い砂埃が辺りを纏う。

「な、何だっ!？」

ウォッカ達が体勢をなんとか持ちこたえさせて前を見るとそこには武装した集団があった。

「SATや!! おとなしくせえ!!！」

日本警察の紋章をつけた武装集団が黒服の男達に銃を向ける。

——と、遠山刑事部長!？

目の前に立つ見知った顔を見てコナンは驚く。
そう、その武装集団の先頭にいたのは大阪府警に居るはずの遠山刑事部長だった。

「国際犯罪組織”パンドラ”！お前等を銃刀法違反もとい——」

壁側からだとか丸見えなコナンと哀に一瞬だけ視線を向けた後高らかに言い放った。

「工藤新一、宮野明美両名の殺害容疑で逮捕する——！」

23 (後書き)

SAT…警視庁特殊急襲部隊

扉から入って左側の壁際にはS A Tが、右側には”パンドラ”の構成員が互いに銃を持って対峙していた。

遠山の「工藤新一・宮野明美殺害」という言葉にジンが反応する。

「工藤新一と宮野明美、だと？」

「ああそうや。今まで犯罪の証拠は全部潰してきたと思って油断してたような。だがこの二人だけに關してはちゃんと証人がおつてなあ」

まさか。

コナンは彼の言葉を疑った。
自分がジンに殴打された時、周りに誰もいなかったはずだ。
宮野明美が殺されたときも。

二つの事件を知っているのはコナンである自分だけ。

——俺だけ？

コナンははっとする。
もしかして彼の言う証人とは「江戸川コナン」なのか！？

「フン……ならこのFBIの襲撃に合わせたのはやはりあの男のせいか」

「その辺に関して教えたる義理はないわ。さあ、銃を捨てておとなしくしろ。ほかの構成員も別の部隊が確保してる。この状態で勝てるはお前も思わへんやろ」

遠山の言うとおり、構成員に押されていたFBIの面々は加勢に来たSATのおかげで助かっていた。

このタイミングといい人数といい、ここからパンドラが劣勢を覆せるとは考えられない。

だがジンにはどうしても譲れない動機があった。

「死んでも薬と”ブレイン”のデータだけは渡せられねえな」

彼の目での合図とともに部下が銃を構える。

彼らに怪我や死という恐怖は無いのだ。

「悪いがこちらでも死んでもそのデータを奪わんとあかんしな」

遠山の言葉を皮切りに迷わずSAT部隊も構え再び銃撃戦となる。

棚に並んであった薬品が耳につく音共に割れ砕けていった。
コナンと哀はその破片に当たらぬようデスクの下で身を屈めるようにしている。

FBIとは違いしっかりと武装で突入してきたSATはさすがに構成員達に引けは取らない。
むしろ優勢だ。

ボスの部屋の時よりも凄惨たる光景に変わりつつある医療室を目で追いながら、ジンはある考えを胸に弾丸の雨を掻い潜るように入り口に向かった。

「！」

だが出ようとした彼の前に赤井が立ちふさがる。
向こうでの戦いは切り抜けたらしい。

赤井は中にいる日本警察の腕章のついたSATに驚いたが、すぐにジんに視線を戻す。

反射的に至近距離の彼に銃を突きつけた。

「観念しろ！」

前にはFBI、後ろにはSAT。

逃げ場が無い状況にも関わらず黒服の男は歯を見せてにやりとした。

「――奪われるくらいなら壊したほうがましか」

彼が笑った瞬間だった。

懷に忍ばせた「あるもの」に手をかけると同時に、今までの中でも大きい振動があたりに響いた。

それとともに天井がばらばらと落下してくる。
完全に崩落する衝撃だ。

「な、何が壊れたの!？」

足元を襲った地響きに正気を取り戻した哀が思わず叫ぶ。

コナンと赤井にはそれぞれその衝撃に最も望ましくない考えが思い浮かんだ。

――まさか柱を爆破したのか!？

爆弾一つで崩壊するなら柱を壊すしかない。

足が浮くほどの振動が床に響き渡る。

「くっ!」

赤井は負傷した体を地響きで思わず地につけそうになってなんとか持ちこたえさせたが、再び前を向く頃にはジンの姿はなかった。彼が舌打ちをして部屋の中を見ると構成員達がまだ発砲を続けている。

ウォツカはさっきの爆発とともにジンと同じくどこかへ消えてしまっていた。

「お前らもあきらめて降参せえ！ このまま死ぬ気か！」

崩れる部屋の中でかまわずSATに襲い掛かる構成員たちに遠山が叫ぶ。

そして足元の子供達に目を遣り、次に部屋の扉際に立っている赤井に顔を向けた。

「赤井秀一！ この子らを外まで頼んでええか！！？」

「あ、ああ！」

赤井を目に留めた彼はデスクの中に展開し続けるしかなかったコナンと哀を託すよう頼む。

なぜ名前を知っているのかはこの期に及んで気にはしない。

彼は迷わず了承した。

そのうなずきに満足した遠山はコナンと哀にできるだけ優しい声を

かける。

「さ、ここは任せてはよあの男と行き！ 外に出たら警察が待機し
とるしな」

弾丸が頭上を飛び交うのを気にせずコナンが遠山を見上げた。

「なあ、誰がSATを呼んだんだ！？ それに殺害容疑って……」

「それはここを出たらいくらでも話したる。——赤井さん、頼みます！」

コナンの必死の質問を早々に切った彼の促しに赤井は脱出するべく
二人を抱え込んで、すばやく廊下へ出た。
そしてそのまま走ろうとするがそれは断られる。

「赤井さん、両腕撃たれて肋骨折れてんだろ？ 抱えられるより自
分で走ったほうが安全だと思うぜ！」

「このままだと腕から落とされかねないしね」

「……なら今度こそ寄り道せずについてこい」

再び三人はコンクリートの落下を頭上にしながら出口に向かうこと

になった。

もう地下の崩壊は目前であった。

コナン達が去った医療室では、遠山達が構成員をやむなく仕留めていた。

自分達の目的の一つは倒すことではなく、”アポトキシン”と”ブレイン”のデータの押収。

しかし、それもジンの最後の抵抗により達成されない可能性が出てきている。

ではもう一つの目的のほうはどうなのか。

遠山は激戦の最中その目的を非常に気にしていたが、イヤホンに別行動の隊員からそれに関した報告が入る。

「隊長！平次君が部屋にいません！！」

「外には出てへんのか！？」

予定外の事態に思わず声が裏返りそうになった。

「そのような連絡は来ておりません！ 恐らくまだ地下にはいるかと……！」

連絡を受けた時あれほどその場から動くなと言ったはずなのに。このままでは地下の崩壊に巻き込まれてしまうではないか。

「とりあえず3班は何としても平次君を探し出せ！ あの子はこの国に必要な子や……！」

「はっ！」

命令を出して引き続き構成員との銃撃戦に戻る。

しかし彼の思考はここではなく少年に向かっていた。

これまで異見を唱えなかった彼が、この場に来て初めて自分達の指示とは違う行動を取ったのだ。

しかもこのような緊急事態に。

「まさかあの子……」

遠山の頭に何かとてつもなく嫌な予感がよぎった。

頭上から塊のコンクリートが降るのを何とか寸でで避けながら、コナン達は走り続ける。

先頭に行く赤井は走るたびに痛みが襲う肋骨の骨折に若干顔を歪めていた。

そんな彼に後ろの二人は小さな足を最大限に使って食らいつく。

「大丈夫か、赤井さん」

「俺のことより自分のことを気にしろ！　一瞬でも気を抜けば瓦礫の下敷きになるぞ」

三人が頭上に神経を集中させて十字路を右に曲がった時、背後から声が飛び込んできた。

「いたぞ！　撃ち殺せ！！」

残党の構成員が彼らを見つけ後方から迫ってきたのだ。

「しつこいやつらだ……！！　気にせず走れ！！」

いちいち相手をしていれば、こちらが地下の崩落に巻き込まれてしまう。

少しくらい撃たれるの承知で出口へ向かったほうが安全なのは確かだ。

赤井の呼びかけに応じて、立ち止まりかけたコナンと哀もそのままの全速力で走り続けた。

一方追いかける構成員数名は、発見した時点の距離が割かし離れていたことと、瓦礫の落下を避けながらの追跡のため中々近づくことが出来ない。

そんな状況で追跡者の一人が仲間に命令する。

「残党を見つけたとジン様に連絡しろ！」

「了解！」

背後でそのようなやりとりがされてるとは気がつかず三人はひたすら走った。

立ち止まったが最後、命は無い。

落下する天井の破片であちこちにかすり傷をつけながらコナンは考える。

SATの突入、工藤新一・宮野明美の殺害容疑、パンドラという組織の名称、ジンの言った”ブレイン”、宮野姉妹と銀の弾丸――

これまでの経緯で自分の知らない事実がいくつも出てきた。ここを出れば遠山は話してくれるようだが、平次のことも教えてく

れるのだろうか。

SATがここに襲撃するには誰かからの連絡があったとは思えない。

部隊の隊長が遠山だったことからすると推測できる人物は一人だけ。

——とにかくあいつに確かめねえとな……！

「もうすぐ階段だ！急げ！！」

地上への希望を叫んだ赤井の言葉に、コナンの思考はそこでストップした。

その一瞬だけ、気が緩んだのがいけなかった。

「！？」

今まで避けてきたコンクリートの塊がついに彼の目の前に落ちてきたのだ。

「くそっ！」

「工藤君！！」

油断したコナンはそれを避けて走ることができず、止まってしまふ。哀が叫んだがそれも間に合わず、そのままどんどんコナンと二人の間に瓦礫が降ってくる。

天井の板が全て落ちた時点でその落下は収まったが、瓦礫の山はコナンのいる地下の廊下と赤井達が足を踏み入れた階段の狭間で高く積まれた。

砂埃が辺りを覆う。

「階段寸前か……おい！　そこからよじ登れるか!？」

可能性は薄いと思いつつ赤井は数段階段を登ったところから見下ろして、かろうじて見えるコナンに向かって叫ぶ。
早くしないと追っ手が来てしまふ。

危機的状況でコナンは目の前に出来た壁を見上げて眉をしかめた。だがここで「登れない」と言えば、赤井はともかく哀は立ち止まったままで彼を待たせよう。

「すぐは無理だが何とかする！　あんたは早く灰原を連れて脱出してくれ!!」

「何言ってるのよ工藤君!!　後ろには追っ手が来ているのよ!？　登っているうちに背中から撃たれるわよ!!!!」

彼の提示した行動は自殺行為に等しい。

悲鳴にも近い叫び声を哀が出す。

最も望ましくない結果がその後控えているからだ。

「そんなところにいたらお前も死んじゃうだろう！ それに俺は……」

そんな彼女に向かって、彼は心にも無い「大丈夫」を言おうとしたその時だった。

いきなり自分の首根っこが強い力でつかまれる。後ろを振り返る余裕が無いほど首が一瞬つまる。だがすぐに体が宙を舞い、視界が180度回転した。

「うおわっ！？」

いきなり上方に投げ飛ばされたコナンは赤井によって受け止められた。

「何ぼさつとしとんねん！！ はよ行けや！！！」

声の先には、なんと平次がいた。

コナンがたった今までいた廊下から彼らを見上げ叫ぶ。
右肩の傷は止血がしてあるが、滲み出る赤が痛々しい。

「服部！？」

話したいと願っていた相手が目の前に現われて彼は驚愕する。
しかも殺そうとした自分を今助けたのだ。

赤井も突然の彼の矛盾した行動に戸惑いを隠せない。

「お前、一体どういふつもりで……」

一向に進まない彼らに苛立って彼は更に叫ぶ。

「はよ行け言うてんねん！！ そいつは絶対死なせたらあかん！！」

何が何でも死なせたらあかんのや!!」

その言葉は先ほどの対峙からは信じられないものだったが、嘘のようには到底思えなかった。

「お前もこっちに来い！ お前ならすぐに登れるだろ!!」

赤井も彼の本当の心を確信して呼びかける。

——この少年は決して悪ではない

なぜならコナンの生を望んでいるから。

だが平次はその正義への誘いに応じることは無く、

「もうすぐジンがここへ来る！ その二人をあの男に見せるわけにはいかへんやろ！」

「なら俺も応戦する！」

「あんたの望みは恋人の敵討ちか！？　それで恋人の妹が死んでもええんか！？」

自分が応戦するならコナンも去りはしないだろう。
それに連なるようにして哀も逃げないのは明白だ。
そんな彼の指摘に、赤井は反論できず詰まってしまった。

「俺が今から戻って足止めするし、あんたは二人の存在を組織にばれんよう連れていけ！！」

「なっ！」

その言葉にコナンの血の気がさつと一気に引く。

いつ崩壊すると知れぬ地下でジンと対峙する、それはつまり……

「ふざけんじゃねえぞ服部！！　お前このまま死ぬ気かよ！？」

平次はコナンの問いかけに答えることなく踵を返して来た道に戻ろうとした。

コナンの叫びは絶叫に近い形で続いていく。

「言うだけ言って逃げるのかよ！！ 俺はまだ全然言い足りてねーんだ！！」

彼の後を追って戻らぬよう体を赤井の腕で捕まえられながらもがきまくる。

「何も聞いてないから、これからもつとお前と話がしたかったんだ！！ 俺を殺そうとしたり生かそうとしたりするお前をもつと知りたかったんだ！！」

悲痛な願いが届いたのだろうか。

何も聞いていない、という言葉に去ろうとした平次の体がぴたりと止まった。

それを見て三人は一瞬ほっとしたが、すぐにそれは消し去られることになる。

彼はこちらを振り向いた。

とてもとても穏やかな顔で。

しかしその顔は、何を言ってもそちらへは行かない、とても告げるかのようにも見えて。

「……お前は姉ちゃんが待つとるやろ。生きて元の体に戻って会いにいったれや。それと……」

——堪忍、な

その言葉にコナンの頭が沸騰したかのように熱くなった。
重傷を負いながら彼を捕まえ続ける赤井のことなど気にせず、手足を思い切りばたつかせる。

「離せ！ 俺はあいつのところに行かなくちゃならねえんだ！！」

「あいつの思いを無駄にするな！」

既に彼の覚悟を汲み取った赤井はコナンを宥めかす。

そんな彼らを見届けて平次は再び背中を見せると、そのまま走り去ってしまった。

もう、彼は振り向かない。

どんな声も届かないことに目頭が熱くなるのを彼は感じる。

普段は言うはずの無い、自分の本心が自然と口に出た。

「……俺は……っ俺はなあ！！！！」

蘭とお前が待つてなかったら元に戻る意味無えんだよ！！！！」

初めて言った思いと共に、新一の目から涙が零れ落ちた。

コナンを抱えたまま赤井は階段を登りきり一階へと足を踏み入れた。

その途端灼熱の業火が三人を襲ってきたので、慌てて横へそれる。辺りには火の海が広がっていたのだ。

恐らく銃撃戦で、どこかにあったオイルに弾が当たったのだろう。

「離せつつつてんだろ!!」

そんなことはお構い無しにコナンは、なんとかして腕の拘束から逃れようと未だに手足をばたつかせていた。

コナンが動くたびに肋骨に痛みが走り、赤井は顔をしかめる。

「もうやめなさい工藤君！　ここから出るのが先決よ！」

哀は赤井を気遣ってコナンを諫めた。

彼の気持ちは痛いほどわかっていたが、ここで粘られても仕方が無い。

赤井も彼の悲しみが伝わってきたからこそ暴れられても文句を言わないのだろう。

「出るにしても、ここをくぐり抜けられない限りは無理だな……」

コナンを除く二人が、目前に踊る業火を目の当たりにして思わず怯む。

しかし止まっている間にも火は徐々に彼らを追い詰めていく。

——絶対に死なせたらあかん

先ほどの少年の言葉が蘇った。

何としても彼らを生かせることが少年へのせめてもの恩返しだ。

「少しの間、我慢しろ」

その言葉と共に哀は再び赤井に抱えられ、ジャケットにコナンとく
るまれる。

そして一度息を吐いてから赤井は火の海の中に飛び込んだ。

哀は我慢しろと言われた手前抵抗しない。

だがくるまれているとはいえ、灼熱の空気が体中に染み込むのさえ
気付かずコナンは叫び続けた。

「ちくしょお！！　ちくしょお——！！！！」

一階の炎が地下へも進入し始めた頃、廊下で二人の男が膝を地面に打ち付けて倒れこんでいた。

赤井達を追跡していた構成員達だ。
死んではいないが気を失っている。
銃剣の取っ手部分で急所を突いたのだ。

「全く、世話のかかるやつだな」

肩を抑えながら、平次はその二人を落下の収まったスペースへと引

きずつていき投げ込んだ。

これで放置しておいても死なないだろう。辺りを見回すと今のところは誰も居ない。

気が緩んだ拍子に肩に痛みが走る。

耐えかねて蹲り掛けたがそれは突然襲ってきた熱風によって阻まれた。

「上で火事が起こったんか……！」

熱さに体中が悲鳴をあげる。

急いで火のない方向へと足を向けた。

しかし、不意に後ろから強い力でコートの襟を引っ張られた。

強引に地面へと引きずり倒される。

無理やり回った視界に映ったものは、この業火にも劣らないほどの黒き熱。

「好き放題やったものだな、スピリタス……！」

「ぐっ……」

馬乗りになる形でジンが平次の首を締め付けた。

油断していたせいで思うように抵抗が出来ない。

ジンもFBIやSATと戦いながらこの建物にあるパソコンをすべ

て壊していたので、体の怪我は酷い箇所が多かった。

しかし、この体勢ではどちらが有利かは明白。

苦しさで顔をゆがめる平次の首を、血だらけの両手で絞めていく。

「お前が本心から組織に忠誠を誓ってねえのはわかっていたさ……！だが、それ以上にお前の一族を利用することのほうが利益があったから今まで放置してきたが――」

苛立っている様子で歯をぎり、とかみ締めた。

「このタイミングでSATを呼んで利益の全てを食らうとは思わなかったぜ」

更に締める両手に力を入れたが、平次も必死に彼の腕をはがそうともがく。

「別に食らおうとは思ってへん……！ お前等がブレインを開発しようとしたからやる……っ！」

「ハっ！ 俺らがしなくてもそのうちこの国もやっていたさ」

嘲るかのように黒の男は冷たく笑う。

呼吸困難になりながらも平次はそんな彼をにらみつけた。

「そんなことっ……あらへん！」

「この期に及んで綺麗ごとは無しにしようじゃねえか。お前だって罪にならないなら、したかったはずだぜ。あの探偵を蘇らせようとなあ！！」

平次の目が見開く。

ジンは弾切れの銃は使わず右手で彼を押さえつけながら左手でナイフを取り出した。

「お前の首を持っていけばボスもブレイン使用を認めるだろうよ！」

銀色に光る刃が平次を襲うとした背後から炎の熱風が再び訪れる。全身が熱く焼かれそうになり彼の頭はスパークした。

そして同時にフラッシュバックが襲う。

あの絶望の記憶が蘇る。

かつて味わったことの無い充実感と暖かい気分。

いつものように事務所に行くにあの人が倒れていた。

学生かばんを床に落として走り寄る。

頭を撃ち抜かれ完全に事切れていた。

叫びながら彼の体を揺さぶったが反応は無い。

とめどなく涙があふれ彼の名前を呼び続けた。

その瞬間、背後から爆発の灼熱が自分達を襲った。

そう、今と同じ紅蓮の炎が。

「……っああああああああああ……っ……」

肉を切る鈍い音が崩壊と共に掻き消えた。

「全く、一体何がどうなっているの!？」

キャンティに殺されそうになった時、突然S A Tが突入してきて彼女達を攻撃してきた。

ジョディはS A Tに助けられる形でそのまま外を目指したが、そこには到着したばかりの警察が周りを取り囲んでいたのだ。

慌しく武装した警察が動き回り消火活動をするべく、消防を呼んでいる。

辺りを見回すと上司のジェイムズが日本の警察と何やら話しているのが見えたので、重傷を負った体を引きずりながら彼のほうへ近づいていた。

「ジェイムズ! これはどういうことなの!？」

声をかけられ彼は傷だらけの彼女を目にしてその肩を抱いた。

「無事だったか……! さっき本部から連絡があつてとりあえず日本警察と連携を組むよう指示が出されたよ」

「本部って……日本はF B Iと連絡を取ったというの?」

「その辺に関しては後で詳しく話そう。とにかく君は応急処置をし

てもらいなさい。向こうに救護班が控えている」

指を指された方向には救急車が何台も止まっており、隊員が負傷したFBIやSATを手当てしていた。

彼女はうなずくと、肩を貸そうとする彼を手で制して一人歩いている。

何がなんだかよくわからないが日本が組織壊滅に乗り出したことはわかった。

どうして自分達の突入が彼らに知れたのか、どうして今まで組織に何の手立てもしなかったのかなど色々不可解なところは多い。

しかしこの警察の行動がFBIにとって有益なことだけは確信できる。

この事態を整理しながらゆっくり向かっていると、まだ警察のいない建物の裏側で、どこから入ってきたのか、車が一台止まるのが見えた。

車からは少女と男が急いで出てくる。

「あれは……Mr・阿笠と……遠山さん!？」

文化祭で一度だけ見た少女の姿に驚いた。

博士と和葉が研究所に着くとそこは炎に包まれ建物が崩壊していた。
夜の暗闇に朱色の火が辺りを大きく照らし出す。

踊り狂う炎に二人は愕然として建物を見上げた。

「嘘やろ……？」

「こ、これは……」

——宮野はもう逃げたのか？

博士はもう数十年会っていない親友を案じ冷や汗を流す。

「あの子を救い出してやってくれ」と頼まれたが、自分を助けてくれとは書いていなかった。

まさか今いるFBIや警察に捕まったのかとも考える。

しかし慌しさこそあれ、ボスと捕まえたのであればもっと様々な部隊

が来ているはずだ。

それが無いということは、彼はもう逃げたのかもしれない。

ではコナンや哀、そして頼まれた「あの子」はどうなのか。

博士の横で和葉は予想外の出来事に呆然と炎を見つめていたが、そこに這う這うの体で建物から脱出した構成員がやってきた。

息を切らしながら思わず地面に両手をつけた男に彼女は急いで向かい、必死に問いかける。

「なあ！ 平次はどこに行ったんや!？」

「は？」

反応の薄い返事に居てもたってもいられず、男の胸ぐらをぐいと掴みあげた。

「スピリタスのことや!!! 今どこにおるんや!!!」

いきなりのすごい剣幕に押されながら男は搾り出すように答える。

「ス、スピリタス様ならボスの部屋にいたという情報しか……」

その下っ端の答えに彼女はつかんでいた手をゆっくりと離れた。

男はそのまま尻をついてしまう。

和葉はすばやく辺りを見回したが、探し相手は見つからない。もう出ているならば絶対見つけられるはずだ。

しかしその彼の存在すら感じ取れない。

「――っ」

「か、和葉君！？」

最悪の展開に迷うことなく裏口を入ろうとしたが、突然後ろからその腕をつかまれた。掴んだのは博士ではなく。

「何しようとしているの！？やめなさい！！」

ジヨディは崩壊する炎の建物へ飛び込もうとした彼女に怒鳴りつける。

しかし和葉は大人しくしない。

「離して！ はよ行かんと死んでしまっ！」

「この建物に入るほうが死ぬわよ!!」

「そんな関係ない!　お願いやから離して!!」

「遠山さん!!」

負傷した腕ではしっかりと掴むことはできず、思い切り振り払われた。

そして和葉が叫んだ。

「私は遠山ちゃん!!　私は……私は大黒和葉や!!」

そのまま彼女は動きが止まった二人を残し、崩れ落ちる壁と火に怯

むことなく飛び込んでいった。

側で大きな瓦礫が降ってこようと足をも止めることは無い。
背後で裏口ががらと崩れ去る。

逃げ道など今の彼女には重要ではなかった。

ただ、ただ、彼のことだけを考えて。

あなたを一人にはさせない……！

27（後書き）

「あのお方」…大黒連太郎
「あの方」…宮野厚司

かろうじてまだ平らなコンクリートが残っている廊下に、点々と紅い華が咲いていく。

その華もすぐに上から降ってくる瓦礫で形を失っていった。廊下に落ちる華は細く、しかし途切れることは無く続いている。

華を落とす主は壁に手をつきながらずるずると歩いていた。

包帯を巻いた右肩の傷も赤色が滲み出ていたが、床に滴り落ちる血はそこからではない。

首の右側のからほとばしる切り傷からである。

頸動脈寸前までぱっくりと裂けた首は命をどんどん蝕んでいく。首から下はもう血みどろだった。

平次は霞む意識を何とか持ちこたえさせて、ある場所を目指していた。

パイカル、もとい宮野厚司が今まで居た部屋だ。

瓦礫に当たらずここまで来たのは奇跡に近い。

目指す場所はどこでも良かった。

ただ、どうせならあそこが良いと思った。

寝たきりかと思えばたまに静かに動き回る厚司の側で、それを見守るベルモットと自分。

互いに互いの考えていることはわかっていたのに、それを指摘することは結局一度も無く。

奇妙な関係だったなとしみじみと感じた。

「……着いた」

赤井によってぶち開けられた入り口が厚司の部屋を丸出しにしている。

歯を食いしばって体を動かし中に入ると、銃撃によって穴だらけになった壁にもたれかかりそのまま腰を降ろした。

ちょうど、赤井達が逃げた後やっていた仕草と同じになる。

一息つくとズボンから携帯を探った。

しかし、あるはずのところにそれは無くなっていて。

——どこかで落としたのか？

携帯自体はどうでも良かったが、あのお守りを失くした事に少なからずショックを受ける。

お守りが無い今、彼は何も持っていなかった。
銃剣はジンとやり合った時に捨て置いてある。

最後の最後に銃剣という名にふさわしい使い方をして。

「あれは裁判やと正当防衛になるのかな……」

死ぬことに何故か恐怖は無かったが、あの男だけには殺されたくないと思ったのだ。

苦笑しながら崩れ落ちる天井を見上げた。
その途端首に激痛が走りうめき声が出る。
流れ続ける血が彼の体力をどんどん奪った。
じっとしてその痛みが去るのを待つ。

その時ある声が思い起こされた。

——蘭とお前が待つてなかったら元に戻る意味無えんだよ！！！！

先ほど聞いた新一の叫びである。

若干涙声だったのは自分の気のせいなのか。
気のせいであって欲しいと願った。

しかし、まさか自分が彼の幼馴染と同格に思われていたとは。

「……あいつには悪いことしたなあ……」

ひどく彼を傷つけた。

嘘は確かに言っていないが、真実を教えようとしていなかった。

でも、こうするしかなかった。

彼の気持ちに背いてでもやりたいことがあった。

しかし、それも今日で終わり。

——向こうであの人と会えるだろうか？

脳裏に一年前死んだ探偵の姿がよぎる。
そして自分の考えを否定した。

「……やっぱり会えんわ。俺は地獄行きやろっし」

目を開けることすら億劫になって、ゆっくりと視界を暗闇に変える。
そして足を伸ばして手をだらりと床に落とした。
真っ暗になった世界に、崩れ行く建物の終末の音と迫り来る炎の熱を感じる。

そのままぶつりと、彼の意識は途切れた。

意識が失われる最後、まぶたの裏に見たのは着物を着た彼女。
思いを馳せ続けた十年前の初恋の少女ではない。

その少女と全く同じ着物で、満開の桜の下鞠をつく
十七歳の和葉の姿だった。

まーるたけえーびすにおしおいけー

よーめさんろっかく、たにじきー……

話は十六年ほど遡る。

研究者同士の若夫婦が実験中の事故で死んだ。

残されたのは高齢の祖父、大黒連太郎と一歳になったばかりの娘。

祖父は考えた。

自分も年で、長くは生きられない。

そうなればこの子は最近不穏な動きを見せ始めた組織の中で一人ぼっちになってしまふ、と。

孫娘の将来を案じた彼は政治家時代の同志、池波に相談を持ちかけた。

池波は組織に資金を提供しているので、内部事情はよく知っている。彼の相談に池波はこう提案した。

——物心つく前に、その子を養子に出してはどうか？

組織とは全く無関係の人物に子供を託し、普通の人間としての人生を歩んでもらったら息子夫婦も浮かばれるのではと彼は言った。

この提案に祖父は賛成した。

息子が残した娘だけでも幸せになってもらいたい。

自分はどこを目指しているのかわからなくなったこの組織に一生居続けることになるだろうから。

そして祖父の提案と共に娘は池波の義理の息子の親友で、子供の居なかった夫婦に預けられることになった。

この夫婦の姓を、遠山という。

夫のほうは同志の息子同様刑事である。

キャリア組ということもあって、将来高官になるのは間違いないだろう。

組織とは全く正反対の集団に属する彼に預けることで、娘を組織から完全に離そうと考えたのだ。

娘を貰い受けた夫婦はとても人間的に出来た人物だった。

この夫婦になら娘を託せると安心した祖父は、そのわずか一年後この世を去ることになる。

一方、数奇な運命でワケありの赤子を育てることになった夫婦は、養子縁組を仲介した池波の娘とその夫、つまり池波静華と服部平蔵の近所に引越してきた。

彼とは昔からの馴染みだったので、この子の成長を一緒に見守って

もらおうと考えたのである。

遠山夫妻が引つ越してきた四月の桜咲く頃その養女は初めて服部夫妻と対面した。

服部夫妻にもその時一歳になる息子があり、ちょうど良いとばかりに幼い二人を引き合わせた。

——ほら平次、この女の子がお父さんの親友の娘さんで、和葉ちゃんっていうんよ

——……かー、じゅ、は？

——ほーう、これはまた頭の成長の早い坊やなあ。さあ、和葉。今名前呼んでもうた子が平次君っていうんやで

——へー……じ？

——なんや、お前んとこの子ももう話せそうやないか

——はは、そうやな。お、そういえば二人の名前の頭文字くっつけたら”平和”になるやんか！

——あら、これはまためでたいことやねえ

——ホンマやな。これは奇遇やわ

互いの両親が自分達の名前で喜んでいることが娘にはなんとなくわかった。

まだ思考というものはつきりとしていない年頃だったが、それでも親が喜んでいるということは感じ取れる。

目の前にいる男の子と、自分の名前。

自然とその名前が好きになっていった。

そして当然の如く、名前の持ち主である男の子のことも。

あれから十六年。

彼女は母親が死んだ時に、養女だったことを知らされた。

最初は衝撃しかなかったが、その後本当の親が薬の開発中に死んだことを知って、将来その薬を完成させたいと思うようになっていった。

養子として出した祖父は彼女が組織に関わらないことを望んでいたのに、結局はA P T Xの完成という夢を持つことによってそれは脆く崩れ去ってしまってしまった。

両親の死も、養女に出されたことも、彼と出会ったことも、全ては組織に通じる運命だったのか？

偶然で済ませるにはあまりにも数奇すぎた。

だがそんなことは今更である。

彼女はすべての運命を受け入れ必死に走っていた。

彼に会うために。

生まれて初めて会った同い年の子で、初めて友達になった子。

そして、初めて好きになった人。

複雑な事情が物心つく前に一応片付いていた自分に対して、
彼は成長するにつれどこかがどんどん狂っていった。

とどめだったのが一年前のあの事件。

「関西探偵連続殺人事件」

猟奇殺人だったあの事件は彼が何とか持ちこたえてきた心のどこかに、引き金を引いてしまった。

彼を支えられなかった自分が悔しい。腹立たしい。

あの時彼の心を守ってあげられてたら、こんなことにはならなかったのかもしれない。

だからこそ今、彼に会いに行くのだ。

この漆黒の宝箱へ飛び込んで。

会って何をするつもりなのか自分でもわからない。

ただ彼を一人にはさせたくないと思った。

今までずっと彼は一人ぼっちだったような気がする。

両親や自分が常に側にいても心は孤独だったのではないか。

彼の側にいたい。

彼を一人にしたくない。

既に所々が火傷を負っていたが気にすることは無かった。

地下へと降りた瞬間階段は完全に崩れ去ってしまっている。

進む道はあるが戻る道はもう無いのだ。

廊下に咲いた紅い華を頼りに走った。

そして彼女は大好きな人の大好きな名前を、心の中で呼び続けた。

——へいじ、へいじ、へいじ……！

彼女の声は彼に届いただろうか？

目を開けても何も見えなかった。
全てが黒色。

閉じてても開けても闇しか映らないことに戸惑いを覚える。

呆然と立ちすくんでいると、今度は向こうで何かがあるのを感じた。

光では無かったが、何かが見える。

走っていくとそこは焼け焦げた小さな事務所。
爆発の衝撃で中の物は全て消滅してしまっていた。

唯一あつたのは赤。

部屋全体に広がる焦げ跡とは別に、血の色をした人の一部が所々に
飛び散っていた。

その事務所の扉付近には男が数人と少女が一人集まっていた。
皆が一樣に腰をかがめ、ある一点を見つめながら叫んでいた。

男は顔なじみの刑事達だ。
顔を真っ青にして「しっかりせえ」と怒鳴っている。

よく見てみると、その集団の真ん中にひざをついて一番大きく叫んでいるのが父親だった。

珍しく、いや、今まで見たことの無いほど焦った表情で腕に抱く少年を揺さぶっている。

少女は少年を見て叫ぶことも近寄ることもせず震えていた。

爆発で塵ごと吹き飛ばされ、血だらけになった少年の右目には窓ガラスの大きな破片が刺さっていたからだ。

体が散り散りに飛んだ男はもう人の形を失っていたが、この少年は何とか爆風だけで済んだようだった。

それでも瀕死には間違いなかったのだが。

少年は目を覚まさない。

呼んでも呼んでも覚まさない。

まるで今の自分のように。

目を覚まさない少年に見る気をなくしたので、踵を返して来た道を戻ろうとした。

道という道はなかったけれど。

真っ暗な世界の中を一人で歩こうとした。

どこへ行くのかはわからない。

ただ、一人で永遠に闇を歩き続けるのではないかと思った。

――？

だがその時、自分の背中を引っ張る手があった。

無理やりではないけれど、しっかりと掴んで離そうとしない手が。

誰だと思い振り返ると、先ほど震えていた少女がいつの間にかこっちに来てて。

「今まで覚めなかったんなら、これから覚めたらええやんか！」

もう震えてはいない。

しっかりと二本の足で立ち、力強い光を目に堪えて自分に向かって
笑いかけた。

その笑顔に今まで感じたことの無かった「未来」を髣髴とさせる。

——これからでも、ええんか？

目の前の黒が突然消え去った。

「平次！！ 平次！！！！」

「……か、ず……は？」

うつすらと少年は目を開け、必死に自分の肩を揺さぶり続ける彼女を見た。

目を覚ます瞬間、意識が途切れる前かすかによぎった唄が今度は全て聞こえてきたような気がした。
そう、自分呼んでくれた彼女の声で。

まーるたけえーびすにおしおいけ

よーめさんろっかくたこにしき

しあーやぶったかまつまんごーじょう

ろくじょうさんてつとーおりすぎ

しちじゅうえねはちくじゅう

じゅうじゅうひゃくじゅうめい……

「平次！！ 平次！！！」

「かずは……！？」

奈落の底から引つ張り上げられるように意識を取り戻した平次は、必死で自分の名を呼ぶ和葉を見て驚く。

朦朧とする意識の中、今の状況に理解が出来ない。

こんなところに彼女がいるはずがないと。

「……よかった、また会えて」

涙を浮かべて安堵の表情を見せる彼女を呆然と見つめる。

一瞬ここがどこなのか忘れてしまいそうになるくらい驚いたのだ。

そしてだんだんクリアになる頭を回転し始めると、彼女の至る所に火傷や擦り傷があるのに気付いて思わず叫んだ。

「アホか！！ なんで来たんや！！！」

声を上げた瞬間首の深い傷が痛みを走らせたが、そんなことは関係ない。

一方、壁にもたれて座っている自分の側で膝をつき彼女は怯むことなく言い返す。

「平次がこんなところにいるからやる！！ お守りまで落としてるし……私がこれ見つけなかったら平次見つけられなかったんやで！？」

そう言つて彼の黒い携帯、もといそれについたお守りを目の前で見せ付けた。

これを厚司の部屋に通じる廊下で発見したから彼女は来れたのだ。しかしそれで彼が納得するはずも無く。

「それでお前も死んだら元も子も無いやろ！！ はよ逃げろや！！」

周りは既に火の海だ。

しかも部屋自体も既に半壊の域に来ている。

状況を把握してきた彼は焦つて怒鳴りつけた。

このままでは彼女も自分と一緒に死んでしまつてはいないか。

「平次と一緒にやなかったら嫌や！ あんた連れて上まで行く！」

「我俥言つな！ 俺血出過ぎてもう足に感覚無いんやで！？ 行けるはずないわ！」

頭に血が上つて傷の痛みは半ば麻痺していたが、大出血による体の限界はすぐそこまで来ていた。

いくら介助してもらっても、二人でこの崩壊する建物から脱出できるとは到底思えない。

いつもならこんな状況でも諦めない彼がもう生きる意志が無いことに彼女は驚き、意識を確かに持つよう発破をかける。

「あかんて決め付けるなんて平次らしくないで！ ほら、肩貸すしはよ立ちーな！」

あくまでも彼と一緒にではないとここを出るつもりは無いようだ。血だらけの肩に腕を回し立ち上がらせようとする。

今まで父親や自分が「しないほしい」と言ったことには必ず頷いてきた彼女が、ここにきて始めて無理やり医意思を貫こうとしてきた。

そんな思わぬ行動に彼は戸惑いを覚える。

そして次に、なぜかだんだん苛立ち始めた。

もうここで全てが終わっていいと思ったのに。

さっき聞こえたあのわらべ唄だけでもう十分だと思ったのに。

なんであの唄を歌った彼女がここで一緒に、自分と業火に包まれなければならぬのか。

彼女はここにいるべき女性ではない。

彼女はもっと光のある場所にいるべきだ。

自分を闇から引き上げてくれたように、ずっとあの場所にいてほしかったのに。

どうして。
どうして。

どれだけ引つ張っても中々立ち上がろうとせず俯いたままの平次に、和葉は叱咤するように呼びかけようとした。
しかしそれは彼の震えるような声で制止される。

「なんで……なんでお前は……っ」

「え？」

そしてがばつと顔を上げて彼女に向かって怒鳴りつけた。

「お前は俺と一緒に過去にいたべき奴やないやろ！？ お前は親の夢を継いで未来に生きなあかん奴やろ！！」

今まで聞いたことの無いような悲痛な声で彼は叫ぶ。
涙は無いが、泣いているような声だった。

恐らく、これが彼の本心。

過去に執着する自分と、親の研究していた薬を完成させたいと願った彼女では
望むものがあまりにも反対すぎると思ったのだ。

しかし、そんな彼の本当の思いに彼女は詰まることは無かった。

紅い業火が二人を追いつめていく。

「……そら私は本当のお母さんとお父さんの夢を叶えたいよ。でも、でもな、」

——そんなことよりも……

その代わり彼女も自分の本当の心の内を彼にぶつけた。

「私はずっと平次とこれからを生きたいの……!!」

その後、和葉と平次は階段付近で歩いているところを遠山に発見された。

彼は「ここで平次君を死なせたら平蔵に合わせる顔が無い」と言つて、命がけで探していたようだが、見つけた時自分の娘も一緒にいて非常に驚いたようだった。

当然のことではあるのだが。

そして事態が事態だったので聞きたいことは後回しにして、他のSATのメンバーと急いで二人を担ぎ外に出ることになったか成功した。

出た途端建物が全壊したのを見て、そこにいた全員が「誰かがこの子達を生かしたんだ」と思ったらしい。

一方二人はそのまま弱めの一酸化炭素中毒と平次は怪我も伴つて、気を失い救急車で運ばれていった。

もちろんコナンも平次に付きっ切りで。

コナンは中から担ぎ出された彼を見て腰が抜けそうになるほど安心したそうだ。

博士も親友の頼みを間接的にはあるが、どうにか叶えられて安堵の表情を浮かべていた。

コナンと共に脱出した哀の方かというと、赤井の側にいたらしい。子供二人を抱えて火の海を渡った赤井も外に出てすぐ崩れるように倒れたのだ。

その後すぐに立ち上がったが、一酸化炭素の摂取と肋骨の骨折がかなりきついで、近くの木の下で座っている。

救急隊員が彼に応急処置をしようとしたのだが、「後でいい」という彼の拒否でそれは行われていない。

全てを見届けてから自分のことをしたいらしい。

そんな赤井の側で哀はなぜか心配そうに見つめていた。

平次がコナンを放り投げた際言い放った「あんたの望みは恋人の敵討ちか、それで恋人の妹が死んでもいいのか」という言葉に思い当たる節があつたのだろう。

しかし赤井と哀は何も話そうとはしなかった。

ただ黙って二人で木の下にいるだけ。

それだけで二人は十分だったのかもしれない。

研究所があつた場所は既にその原形を留めていなかった。

建物に先ほどまでいた人間達は、その地へ戻ってくることはもう無いだろう。

救急車のサイレンが辺りに響き渡っていた。

闇夜に浮かぶひとつの大きな火の終焉とは少し離れた小高い丘から眺める人物が数人。

静けさが辺りを覆っている。

業火の狂宴と同じ世界だとは思えないほどに。

黒服で夜の空気に完全に溶け込みそうだ。

双眼鏡を顔からおろして男が後ろにいる長身の金髪に向かって言っ

た。

「……兄貴、どうやら建物は今全壊したようですね。あれでデータは奪取できなかったでしょう」

男は何も答えず朱色の風景を見つめている。
暗くてその表情はうかがうことは出来ない。

そんな彼の態度に背後にコルンと共にいたキャンティが、やれやれといった感じでため息をついた。
そして。

「……言っとくけど、”ソレ”はSATで足止め食らったアタイ達のせいじゃなくて、しぶとく地下に居続けたあんたのせいだからね」

その言葉にジンは見下ろしていた視線を元に戻し鼻で笑った。

「フン、別に一本や二本どうってことないさ。利き腕でも無えしな。これはスピリタスへの借りにしておいたらいい話だ」

何がおかしいのか、彼はそのまま笑い続けた。
右から血をほとばしり続けながら。

彼の右腕は肘から下がばっさり切り落とされていたからだ。

平次の首を掻き切ろうとした時、彼が側に落としていた銃剣を握ってナイフを持ったジンの右腕を切断したのである。

流石にうめき声を上げ左手で右を押さえた瞬間、平次は走って逃げてしまっている。

ジンはその後來たウォッカに切られた右腕を拾ってもらい、隠し通路から脱出した。

彼の今の笑いはそんな自分の油断に対する滑稽さからだったのか、それともまた別の何かがあったのか。

どうでもいいとばかりにキャンティはウォッカに問いかけた。

「で、これからどこに行ったらいいわけ？　ボスのところかい？」

こうなった以上もう日本には居られないだろう。

「ああ。 たった今ボスはチャーター機を乗り継いで海外へ脱出した
そうだ。 まとめて同じところに行くのはまずいから落ち着くまで中
国辺りにでも行った方がいいかもしれねえな。 …… そうですよね？
兄貴」

右腕を大事に布で包んで抱えているウォツカは恐る恐る彼に聞いた。
すると今度はちゃんと答えが返ってくる。

「とりあえずはそこでいいだろう。 …… ブレインの開発を遅らせた
SATやFBIは絶対に許さねえ。 中国から後方指示を出し日本で
の後始末が終わり次第、 イギリスに行つて体勢を整えることにする
さ」

「へえーイギリスねえ。 ボスの妻の故郷じゃないか」

面白そうに彼女が言った。

自分達のボス、 宮野厚司が愛したエレナの生まれ故郷だ。

「じゃあボスはもうそっちに向かったってことかい？」

「そういうことだ。 ロンドンには我々パンドラの支部もある。 医療
施設も整えてあるから身を隠すには好都合だ。 それに……」

彼が一旦言葉を切る。

「それに、何ですかい？」

「いや、なんでもねえ」

——まだあの方に死んでもらうわけにはいかないからな

声には出さず、心の中でそう呟くとジンははるか彼方の異国の地を眺めるかのように紅蓮の炎を今ひとたび見た。

今まで自分が死ぬ思いで築き上げてきた何かがそこで、全て崩れ去ってしまったような感覚だった。

彼の見つめる朱色は夜明けへの知らせだったのかもしれない。

後編 / 完

32（後書き）

キリがいいので一旦切ります。次からはエピソードが数話入るので、まだ終わりません。平次の過去話もそこです。最終回までもうちよつとです。

終結：1

静かな空気に真っ白い壁。

音といえば彼が腕につけている液が滴る点滴ぐらいだろうか。

杯戸中央病院の最上階にある病室に彼と少女はいた。

赤井秀一と灰原哀。

パンドラの本部が崩壊し一夜が過ぎた明け方、赤井は搬送されたここで半ば強制的にベッドに寝かせられていた。

骨折した肋骨はコルセットを巻くしかないので、特にそれ以外治療することは無いと言いたかったのだが、それはジョディによって拒否されている。

彼女も大怪我をしていたので隣の病室にいるそうだ。

ちなみに彼女は赤井が逃げないよう少女に見張りを頼んでいた。

「あなた以上の適役はいないわ」といたずらっぽく微笑んで。

彼女の意図がなんとなくわかった哀は素直に承諾し、今に至っている。

二人はあまりしゃべらなかった。

元々お互いしゃべるほうではないが、この空間で一言も発しないのは少し不自然だ。

哀は彼のベッド脇に椅子を持って行きそこに座り、向こうの窓の外を見ている。

明け方が近いということもあつて白い光が部屋に差し込んできた。

眺めている彼女の表情は、素直な顔とでもいうのだろうか。今までのような何かを背負った苦しく悲しい目ではない。

澄んだような色をしていたのだ。

クールさを装うわけでもなく、顔つきは自然なものだった。

一方赤井は天井を見つめたまま微動だにしていない。

哀に視線を合わせようとはしなかった。

すっきりした感じの彼女に比べ、彼はどこか迷っているような目である。

躊躇っているともしえるかもしれない。

何かを話そうにも、言うべきことはただ一つなわけで。そのことに迷っているのだ。

やがて鳥のさえずりが部屋の中にまで聞こえてきた。

それが合図になったかのように哀は窓に向けていた視線を近場に戻す。

やはり自分から聞くべきだろう。そう思ったのかもしれない。

「……あなた、組織にいたことあるんでしょう?」

彼女は昨夜からずっと考えてたことをついに聞いた。
彼は上を向いたままだ。

「以前見かけたとき、構成員から感じ取れる匂いみたいなものをあなたからも察知したわ。もし構成員だったとしても、今のあなたはFBI。恐らく潜入捜査だったんでしょね」

返事はなかったが否定はされなかった。
構わず彼女は話を続ける。

「身元を隠し組織に潜入して構成員となったあなたは私の姉に近づいた。ボスの娘から何らかの情報を得ようとしたのかしら」

「……最初はそうだったが、それはすぐにやめたさ」

ここでやっと赤井は口を開く。

彼女の姉を利用しようとしたのではない、ということはどうしても否定したかったらしい。

「宮野厚司に二代目の疑惑が持ち上がった時、一番その証拠として

上がっていたのがお前の姉の存在だった」

それでも彼は彼女のほうを見ない。

「はつきり言つて明美はお前ほど何かに秀でた人物ではなかった。にも関わらず薬を開発していた親が死亡し、それでもなお普通に学校に行くことが出来た上、あの事件まで組織の仕事に関わられることはなかった。監視つきとはいえあまりにも待遇が良すぎる。…ここから自然とある考えが思い浮かんだ」

「父親が実は生きていて、ボスとなっていたからお姉ちゃんは普通の人間として生きてこれたってこと？」

「そういうことだ」

FBIの上からの指令で組織に潜入した彼はまず明美の監視役になった。

そこから話しいでのように聞き込みをしたのだ。

「父親は本当に死んだのか？」と。

すると明美は少しだけ間を置いてからゆっくりと首を縦に振った。寂しそうな顔だった。

「もしかしたら明美は薄々気付いていたのかもしれないな。ボスの正体を。己の待遇を考えたら当然のことだったかもしれないが」

彼はいつのまにか「明美」と呼び捨てで口に出している。
自分でも知らず知らず言葉にしているみたいだ。

「で、さっきの言葉からすると聞き込みをやめたってことよね？」

「ああ。父親の死因を人づてに聞いただけだった彼女は組織の真実を知らなかった。しかし俺の監視役としての彼女との関係は続いた」

そこで彼は一旦言葉を切った。

次に言うことをどれにしようか考えているようである。

そんな姿に哀は一番聞きたかったことを先に言ってみることにした。

「……あなたはお姉ちゃんときあっていたの？ 同じ最上階で寝ている服部君が昨夜あなたに言ったじゃない。恋人の妹を死なせる気かって」

平次がジンと戦おうとした彼に向かって言い放った言葉は、哀にとっても衝撃的だった。

姉からは何も聞いていなかったし、彼は組織と敵対するFBIのメンバーだ。

一体どこで、いつ、どうやって、姉と親しくなったというのか。

その数々の疑問に対して彼女は一晚中考えていた。

こういうことならお手の物かもしれないコナンは、緊急で治療室に運ばれた平次をずっと案じながら外で待っていたため話す機会は無

かった。

なので一人で推理を試みたのだ。

以前構成員から発せられる匂いを感じたということは、彼が少なからず組織と関わりがあったということ。

そしてFBIの彼が姉と繋がりと持ったのはボスの娘だったからではないか。

矛盾が生じないように彼女なりに考えてから今こうして彼と話しているのだった。

明美との仲を問うそんな妹に赤井ははっきりと答える。

「話しているうちに、親しくなった。組織には知られないようにな。俺がまさか敵方の女に共感を覚えるとは夢にも思わなかったが、あいつにはどこか不思議な雰囲気があった。少しお前とも似た雰囲気だ」

「え？」

母親似の自分と父親似の姉はあまり似ていると言われたことがなかったため、彼の言葉は意外だった。

「だが、やがて俺は内通していたFBIから戻ってくるよう指令を受けた。深入りはせずボスの正体を探ることが目的だったため、そ

れを達成した以上あそこにいる必要はなかった。……だがここで心残りだったのが彼女だった」

いつ父親が心変わりして、次女とは違い秀でた能力の無かった長女を殺すとはわからない。

ならいつそのこと一緒に組織抜け出そうと赤井は彼女に言ったのだ。自分の身元を彼女に明かした上で。

「お姉ちゃんはどうして行かなかったの？」

「……………妹を残して行けない、と言って断った」

今までで一番長いためを置いてから呟く。

躊躇いがちに告げられた言葉は哀をはつとさせる。

彼女が彼女自身を責めると予想していた彼はすぐに話を続けた。

「だから俺はいつか妹と共に助け出すと約束をして組織を抜け出した。抜け出す間に正体がばれてジン達と銃撃戦を一度繰り広げたがな。……俺は本気だった。いつか本当に明美を迎えにいかうと思っていた」

身元を明かしても、敵対心は持たずむしろよりいっそう信頼してく

れた明美をなんとかしてでも救いたかった。

しかしその決意は残酷な未来の前にあっけなく崩れ去ってしまうもので。

そう、その残酷な未来とは――

「その後十億円強奪事件を起こして殺されたのね、お姉ちゃんは」

妹を組織から抜け出してやると言われ彼女は強奪事件を引き起こした。

その契約は嘘のものだとは知らず、奪った後にジンによって殺されている。

今思えば、抜け出して赤井のところにも駆け込むつもりだったのかもしれない。

赤井は悔しそうに点滴のために毛布から出した右手をぎゅっと握りこんだ。

「俺のせいだったんだ。スパイだった俺と内通していると疑われたあいつは、利用されるだけ利用されて殺されてしまったんだ」

自分に対する怒りだけがその後残った。

自分と関わったがために彼女は殺されてしまった。

「その後すぐに妹のお前も組織を抜け出したと聞いて、探し出そうと決意した。明美を守れなかった分せめて明美が守りたかった妹だ

けでも守ろうと」

幽霊船事件の時、ジヨディに扮したベルモットの撤収号令を聞かず周辺を見回っていたのは、あの女がシェリーを狙っていると知ったためだ。

侵入したベルモット、もとい新出医院の一室にあったダーツに張られた写真。

あれで明美の妹が狙われていると知った彼はなんとしても守らなければと思ったのだ。

「じゃあ、それでいて私に直接会わなかったのは守れなかった姉に対する後ろめたさから、とかかしら」

自分のせいで死んでしまったと考えているなら、その妹とも顔をあわせづらいだろう。

「それもあつたが、かと言ってずっと会わないわけにも行かない。あいつを殺したジンを倒してからお前のところに謝罪しに行こうと思っていた」

せめて恋人の仇を取ってから、その首を片手に謝るつもりでいたらしい。

だがそれは少し早まったようだ。

彼はゆっくり上体を起こし彼女のほうを向いた。

「お前の姉を守れなくて本当にすまなかった」

肋骨が痛むはずなのに彼は頭を垂れてはつきりと言った。

滅多に無い彼の姿に彼女はどう思ったのだろうか。

少しだけ沈黙が訪れたが、彼女は責めることも悲しむこともせずこ
う返事をした。

「……終わったことだもの。過去を悔やんでも仕方ないわ。時を遡
ろうとすればするほど人は闇にはまっていく。以前の私もそうだった

た」

驚いたように彼が顔を上げる。

「でも父の手紙を読んでどこか吹っ切れたわ。父がああ言うのなら私も自分が正しいと思うことをするだけだってね。……だから姉や私のためにジンを討とうとするのなら、もっと私と話してくれないかしら」

今度は戸惑ったような目をした。
彼女の意図がわからないようだ。

そんな彼に恋人の妹はふっと笑う。

「仇討ちなんかより、私の知らない姉のことを教えて欲しいわ。お姉ちゃんが私の幸せを願ったように、私もお姉ちゃんの幸せだった時間を知りたいの」

お互いを全然知らないけれど、

お互いが同じ人を大切に思っていたことは事実だから、

きっと私達はわかりあえるはず

それは姉も望んだことだろうから

将来「兄」と「妹」になるはずだった二人の関係はここから始まる

のである。

平次や和葉達が病院に運ばれてから数時間後。

平次が緊急手術を受けている間に優作がやってきた。

コナンは父親の突然の訪れに驚いたが、今まで何をしていたかを聞いて更に驚く。

まさか大阪に行って平次の父親に会っていたとは。

しかも自分よりも早く彼が組織の人間だと気づいた上で。

父親たちが何を話し合ったのかはわからなかったが、平蔵や静華ももうすぐ来るということだけは教えられた。

一緒に東京までヘリで来て、優作は直行で病院へ。

服部夫妻は一旦警察に寄ってからここに来るらしい。

すぐにでも息子に会いたかっただろうに。

しかしそれは立場上できないことだった。

「ところで平次君の容態は？」

「まだわからねえ。輸血の最中だっというのは聞いたけど、一酸化炭素も結構吸い込んでた

らしい。助かるかどうかわからないほど重体だっただけは確かだよ」

コナンは苦しそうに俯く。

崩壊する研究所の外で皆に体を抑えられながら彼を叫び続けてたら、遠山達が彼と和葉を担いで出てきたのを思い出す。

二人とも意識はもう無くぐったりしていて、急いで病院に運ばれた。

「和葉君もかい？」

「ああ。でも彼女は少し一酸化炭素を吸っただけだから、すぐに意識を取り戻すだろうって医者は言ってたよ。今は病室で寝ている」

「そうか……。で、お前はどんなんだ？」

「俺？」

予期せぬ質問に何のことかと問い返す。

そんな息子に優作は厳しい顔つきを変えぬまま再び問い直した。

「平次君がよしんば回復したとして、話す機会が来たらお前はちゃんと接することができるか？」

平次が怪しいと気付いた時、真っ先に思い浮かんだのは息子だった。あまり人と親しくならない息子が珍しく心を許した人物。

会ったことはなかったが、幽霊船事件で一足早く対面した妻、有希子は彼のことを「とても友達思いで良い子」と評していた。

そんな彼が本当に息子を裏切っていたとしたら。

今まで人と関わりを持つことを無意識なのか意図的なのか、とにかく避けてきたからこそ、そんな事態になれば息子は酷く傷つくだろうと父は心配したのである。

一昨日の議員暗殺事件で息子と呼ばうと決めた時、もっとあの子には強くなってもらわないと、と願った裏にはそういう思いがあったわけだ。

「お前も混乱しているかもしれないが、恐らく平次君も心が不安定なはずだ。お前が彼が黒だと知ったときのような悲しみが彼にも以前あった。組織の本部が崩壊した今、彼がまた同じような感情を呼び起こさないとは限らない」

「……！ 父さん、あいつの過去を知っているのか！？」

彼のことをよく知っているような口ぶりにコナンは驚く。

「少しだけ平蔵氏に教えてもらっただけだよ。だから、お前も取り乱していたら彼も立ち直れないだろう？ お前がしっかりと心を強くし、接することが出来たらあの子も安心すると私は思うよ」

そこで優作は初めて笑みを見せた。

息子にもっとリラックスしてもらおうとも言っように。

父親の笑顔はコナンを励ましたが、当の本人は自分以上に平次のことを知っていた目の前の男に少しだけショックを受けた。

平次に初めて会った父親がすぐに正体を見破り、彼の本質を問うたのに対して、自分は長い付き合いの中で一度も彼を本当の意味で見

ようとはしなかったのだ。

銃を突きつけられて吐き捨てるように言われた言葉が再び蘇る。

「お前が何も聞かなかったからだ」と。

あの言葉にはもしかしたら、「初見の父親がわかってなんでいつも会ってる息子のお前がわからへんのや」という平次のやるせなさみたいなものがあつたかもしれない。

彼の今までの幾多の好意に甘えて自分からは何もしようとしなかったことに、情けなさや怒りを覚える。

しかしそれに対しては研究所で隠れた際哀にも聞かせたある決意で、償おうと思っていた。

そのある決意とは、

——平次のことをもつと知る。

本当の彼を知って、出来る限り彼を理解したかった。

それが何も知ろうとしなかった自分に出来る唯一の償い。

そこまで考えてからコナンはいつものような強い光を目に宿し父親を見上げた。

「俺はいつでもあいつを受け入れるつもりだぜ。俺はあいつを憎んでなんかいない。あいつが何を言っても絶対に逃げたりしない」

彼の決意は優作にどう映ったのであろうか。

ただ、優作はそんな強い意志に少しだけ目を開いた後目元を緩めた。

——思っていたよりも新一は強くなっていたようだ

自分が心配するほどヤワではないらしい。

そう思いふつと笑ったとき、視線が何となく右を捉えあることに気付いた。

「ならいい。あとは本人に聞いてみても大丈夫だろう。……手術は

終わったみたいだからね」

優作の視線の先をコナンも思わず見る。

「手術中」と書かれたランプがいつのまにか消えていた。

彼がそれに気付いたと同時にドアが開かれ、マスクを取り外す医師が中から汗だくで出てくる。

「先生！ 服部はどうだったんだ！？」

慌ててコナンは駆け寄る。

子供の必死の質問に医師は少し驚いた様子だったが、次に腰を屈め視線を同じにするとにつこりと笑いかけた。

「もう大丈夫だよ。首の怪我也幸い頸動脈まではぎりぎり達していなかったから、命は取り留めた。輸血をしたから後は病室で休ませて回復するのを待つといい」

「……そうですか……」

明らかにほっとした表情を見せる子供の頭をぽんぽんと叩いて、医師はその場を去っていった。

暫くして平次も運ばれながら出てきてそのまま和葉と同じ病室に入ることになる。

これは遠山たつての希望であつた。

色々な報告や事後処理でバタバタしていた彼だったが、娘達を研究所で発見してそれぞれを担ぎ出そうとした時、彼女が意識が霞む中言つたのを思い出したのだ。

——平次を一人にさせんといて

どうやっても彼から離れようとしなない娘を遠山は「大丈夫やから。安心せえ」と優しく説得し、なんとか二人を引き剥がして運び出したのである。

だからせめて眠る部屋だけでも一緒に、というのが父親としてできるせめてものことだつた。

二人が眠る部屋になんとなく入ることを遠慮したコナンは外ですつと平次が目を覚ますのを待った。

そして約一時間後。

看護師から彼が意識を戻したとの報告が入ってきた。

麻酔を打っていたにも関わらず、この目覚めの早さ。

ずっと前、初めて平次がコナンに「お前工藤やろ」と聞いたのも、
そういえば麻酔が切れたのが原因だった。

もしかしたら彼はアポトキシンの副作用か何かで麻酔に耐性がある
のかもしれない。

一方優作のほうを向いて平次の意識回復を教えてくださいました看護師は、
そのまま小さな少年のほうに視線を変えてこう伝えた。

「彼がボウヤを呼んでるみたいよ。まだ意識を取り戻したばかりだ
から、少ししか話す時間は作れないけど、会う？」

コナンの心臓が思わず心拍を早くさせる。

裏切りと助けという矛盾した行動を取った彼と初めて会ったのだ。

コナンは神妙な面持ちで頷くと、看護師は「隣で寝ている女の子は
まだ寝ているから静かに入ってね」と言い少年を病室のドアに促し
た。

椅子から立ち上がった目で目の前の扉を見上げる。

ごくりと唾を飲み込むと、側から優作に肩を叩かれた。

はっとして見上げた先で優作は「がんばってこい」と激励する。

その言葉に頷くと、コナンはゆっくりとドアノブを回して消毒液の匂いが充満した部屋へと入っていった。

気分は何となく、RPGでラスボスに会うような感じだった。

扉を開けた先に見えたのは二台の真っ白なベッド。
窓のある奥のほうに和葉が、そして手前に平次が寝ている。

彼は目を開けたまま仰向けでぼんやりとしていた。

手首には点滴。

首には大きなギプスががっちり固定された状態で巻かれていた。

その白さがあまりにも痛々しくて思わずこっちが眉を顰めてしまう。

金具の擦れる音と共にドアが自然に閉まり、コナンが意を決して歩み寄っていくと彼は視線だけをこちらに向けた。
ギプスのせいで首が動かないのだ。

「……よお」

「……ああ」

第一声は気の抜けた掛け声のみ。

互いにどう言ったらいいのかわからず、変に間延びした挨拶しか出ない。

最後の別れ方があんなものだったので、いざ改まって会ってみるとどう対応していいのか迷う。

つい前まではこうやって面と向かって話すことが普通だったのに、今ではそれが「異常」な状況となっているのだ。

銃を突きつけた相手と病室で話し合うという状況に。

なんとなくつつ立ったままのコナンに「まあ座れや」と彼は促した。素直に従いベッド脇にあった椅子に座ると平次を見下ろす形になる。短い子供の足がぶらんと宙に浮く。

「どうなんだ？ 怪我の具合は」

とりあえず無難に様子を聞いてみた。

「見ての通りや。ぎりぎり致命傷にはならなかったけど痛いことは痛い」

彼も普通に返してくる。

「そうか。……その首、落下してきた何かに当たってできたものなのか？」

「いや、これはお前らと別れた後ジンとやりおった時に切られたもんや」

コナンがはつとした。

そういえばあの時平次はジンを足止めすると言っていた。
首の大怪我からして、かなり激しくやり合ったようだ。

自分達を助けるために彼は崩壊寸前の建物の中でジンと戦ったのである。

「あいつと戦ってよく生きられたな」

「そら俺かて必死やったからなあ。目の前が真っ赤になったと思ったらあいつの右腕はっさり切り落としてたわ」

「！右腕を切断したのか」

まさに死闘だ。

互いに右腕と首を負傷したということは、ジンが平次の首を絞めていたのかもしれない。

そして切られそうになったから逆にその腕を平次が切断したと考え

るのが妥当だろう。

必死とはいえ、彼がそういう行動に出たことが意外なように思えた。

「そうせんと俺の首が飛んでたやろな。……でもあの男も生き延びたやろ。俺以上にしぶといで、あいつは」

それこそ首が飛んでも頭だけで生きそうな人間やで、と彼は面白そうに口元を右上に上げた。

そんな愉快さを感じる彼を理解できなかった。

一つの区切りがついた今でも彼のことがわからない。かえって、更にわからなくなっているかもしれない。

「……なあ、聞いてもいいか？」

コナンがポツリと言った。

目的語は無かったが彼には伝わっただろう。

今まで笑っていた顔が急に真顔に戻る。

「裏切ったと思ったらSATを呼ぶし、俺が追い詰められた時は死ぬ気で助けた。ボスの部屋でお前が言った組織に加担する理由からはあまりにも外れた行動だ」

彼は何も言わない。

ただコナンのほうに目だけ向けている。

コナンは一旦一呼吸置いた。

「本当のお前は何なんだ？」

——君は、何者なんだい？

コナンの顔が一瞬父の優作と被る。

数日前優作に問いかけられた台詞が今の少年とだぶった。
これが既視感というものか。

平次は何かほっとしたものを感じた。

——ああ、やっと聞かれた

何よりも待ち望んでいた言葉が。

「……そやなあ。それ言うために起きてすぐお前を呼んだんやもんな」

ちらりと隣で眠る和葉を見た。

穏やかに目を閉じている彼女の横顔を確認した彼は次に白い天井を見上げる。

「どこから話すのがええやろ。やっぱ最初から言うのが一番ええかな」

コナンに聞くというより自分自身に問うているような言い方だったので、口は挟まなかった。

「ここに至るまでの原因は一つだけやない。色んなことが重なり合

った結果が今やから……全ての始まりはそれこそ俺が生まれたときからかもしれん」

上を見つめたまま彼はポツリポツリと語り始める。

「中学生に上がるまでのちっさい頃、俺はまだそんな時は毎日がめっちゃ楽しかった。親父は仕事であまり会うことはなかったけれど、休日の日は剣道の相手してくれた。オカンも忙しくて、学校から帰ってお手伝いさんしかおらんかったも夕飯の仕度は全部オカンが事前にしてあった。だから俺オカン以外の手料理なんて全然食べんまま育ったわ」

なんやかんやいいつつ大事にしてもうたわ、と彼は言う。

「少しくらい寂しかつても和葉がいたし平気やった。二人で夜遅うなるまで近所を探検して回ったりな」

彼女の父親は平蔵ほどではないとはいえ多忙な身。

和葉が父の帰宅まで平次の家で遊んでいたのはほぼ毎日のことだったのだ。

厳しくも優しい父と母。

そして物心ついた頃からずっと一緒にいる幼馴染。

彼の環境は主観的にも客観的にも恵まれていた。

「でも、中学に上がった辺りから何か違和感を覚え始めた」

引き金はいつ引かれたのか。

「あの頃から本格的に親父やオカンと一緒に仕事関係のパーティーとか行ったりしてな。子供の頃もよう行っとったけど、ほとんどそれはお遊びみたいなもんやったわ。でも中学生にもなるとふざけた気持ちで他の出席者と関わったりはできひん。親の側で結構真面目に挨拶とかしてたんやで？」

おかしそくに彼はコナンを見た。

コナンは苦笑でそれを返す。

自分も優作の出版記念パーティーなどで同じような体験があったからだ。

「それで、挨拶している時にその違和感があってん」

しかしここからが工藤新一と服部平次の違う点。

——おや？ そちらのお子様はご子息ですか？

——ええそうですね。平次、挨拶しなさい

——服部平次です。はじめまして

——これはこれはどうも。……そう言えば聞いたことがありますなあ。

服部さんのところのご子息はとても優秀でいらつしやると。

流石は服部家と池波家の血を引く御子なだけはある

「その時はまだ違和感にさえ自覚が無かった。ただ、心のどこかで引つかかるもんがあつた」

変だと思いながら見ず知らずの人たちに頭を下げていった。

下げるたびに不思議さを感じながら。

もしかしたら気付きたくなかったのかもしれない。

その違和感に知らない振りをしてやり過ごそうとしていたと言えない事は無い。

しかし、それは無視できないほど大きくなっていく。

「自分でもようわからんまま中学生生活を送っていつて。高校に近づき始めたあたりからだんだん違和感の正体に気付くようになっていったわ」

いつもは皆と居るけど、一人になった瞬間ふと自分を襲う感情があった。

恐ろしくもあり、悲しくもあり、そして痛みもある感情が自分に突きつけられるのだ。

「皆が思てる自分と、自分が思てる自分は同じなんやろかって」

え、とコナンが思わず漏らす。

「成長するにつれだんだんどこかが自分の中でずれてきたんや」

それは気付いたら最後、どうしようもなく己に纏わりつく蔦のようなもので。

「皆は俺をどんな目で見てるんやろ？ やっぱり本部長の息子として見られてんのやろか？ でも本部長の息子も俺自身や。間違うてない。じゃあ何が違うんや？ 俺は自分を自分として見てもらいと思ってるし、でも皆も間違った解釈で俺を見てるわけやない。でも、俺が築きあげてきた人との関係は本当に俺自身が作ってきたものなんやろつか？ 俺が服部家と池波家の子供と違って、今みたいな人間関係が作れたんやろか？ いつも親切にしてくれる刑事かて俺が本部長の息子やなかったら、ただのガキとしてまともに取り合ってくれなかったんとかやうやろか？」

彼は一氣にまくし立てる。

「でも」という言葉を連発し、内容も少し散乱としている。彼にしては珍しいことだ。

しかし、そこまでらしくないことをさせた原因がそこにはあるのだ。らしくない言葉は更に混迷を極める。

「そもそもそんなこと考えてる俺は何なんや？ 本当の自分を見て欲しいと思いながら、自分でも本当の自分がどういうもんなんかわからへん」

アイデンティティの消滅。
それが彼の違和感の正体。

「親父は俺を贔屓にしたことないし、それに関しては納得してる。立場上俺に変な馴れ合いはできひん代わりに、事件現場に俺が勝手に行くことを目をつぶって見逃してきてくれた。オカンも親父の分まで俺を可愛がってくれた。……やから親父はオカンは何も悪くないねん。なんも悪ないねん」

最後の言葉は余計に力が入っているように見えた。
余程親に感謝しているのだろう。
だからこそその違和感に余計戸惑ってしまったのだ。

「なら誰のせいなんやろう。なんで俺はこんなに今の状況に不自然さを感じてるんやろう?」

スパイラルに陥った自己同一性はついにある考えに行き着かせる。

「俺が悪いんや。皆に大事に思われてるのに幸せになれへん俺が悪いんや」

コナンは何も言えなかった。

あまりにも自分の感情を超えた混沌だったからだ。

彼がその辺にいる同年代と同じ子供ならばそこまで考えることはなかっただろう。

しかし彼は幸か不幸か普通でなかった。

あまりにも優秀で、物事を見過ぎていた。

周りをそれまであまり見なかった新一と比べたらその差は歴然だ。

だからこそ彼は混沌へと誘われた。

黙るしかないコナンをフォローするように平次は再び目を遣る。

「そんな堂々巡りなことを高一までずっと考えとったわ。出口の無い闇みたいなものの中で
ずつと足掻とった。親も和葉も気づいていたかもしれん。……でも気づいたところでどうにもならんことやったんや。大人になったて自立したら解決することやと諦めてずつとその闇の中にいようと思
った」

親や自分がどうにかできる問題ではなかった。
彼のアイデンティティは自分と他人を区別するだけで確立できる容易なものではない。

つまり、これは仕方が無いこと。

諦めるしかない。

「……でも、」

先の見えない迷宮を語る彼はそれでもコナンに優しい表情を見せた。

「そんなとき会ったのが片品さんやった。長野の探偵事務所を出て大阪にやってきたあの人に再会したのが俺の中の全ての始まりやった」

そしてそれは全ての終わりでもあったわけだけど。

「片品って……まさかあの長野雪女事件で容疑者の中にいた探偵の？」

片品、という名前にコナンは自分の中の記憶装置を呼び起こす。中三の学校のスキー合宿で起こった殺人事件の時に会った探偵である。

確か親友が殺された事件を追って刑事を辞め探偵になったと聞いたことがあるような。

しかし、まさかその後再会していたとは。

「そうや。今まで追いつけてきたその事件が解決したさかい大阪に出てきたらしいわ。長野では集団の事務所にしたけど、独立して自分の事務所持ちたくなって大阪に来たんやと」

確かに個人で経営するなら都会に出てきたほうが仕事はあるだろう。

「雪女事件の一カ月後やったかな。ある殺人事件の現場で片品さんと鉢合わせしたんや」

——あれ、あんた確か長野の探偵の……片品さんやったっけ？

——そういうお前はあの時の探偵ボウズじゃねえか。この辺の子だったのか

「どうやらその殺人事件の被害者が片品さんに依頼が来た人探しの相手やってなあ。警察に色々聞こうとして怪しまれてたんや。大阪弁でもないし地方の人間が何でこんなところで首つつこんでるんやー、みたいな感じでな」

——なんや、それやったら俺が仲介したるわ。おーい、大滝はーん！

——お、おいおい。警察の知り合いかお前？

親しい刑事に掛け合って事情を説明すると、急に現場の警察たちは片品に対して持っていた不信感を取り払ったのである。片品が平次の素性を知ったのはその時だった。

「まあその事件自体は簡単なトリックやったしすぐ解決したわ。でも、俺はそれ以降も片品さんの事務所に出入りするようになってな」

妙に気が合うことに気付いた平次はそのまま片品に懐いてしまった。親でも兄弟でもない年齢差、叔父と甥っ子に近い間柄は逆に何でも

話しやすくて心地よかった。

「そういえば、お前んところの探偵事務所と建物の感じが似てたなあ」

彼は遠い目をして思い出すように言った。

「勝手に助手なつたとか言つてあの人の依頼の手伝いをちょこちよこしてたわ。学校終わつて部活も終えてからやないとオカンがうるさいし、ちゃんとこなした後でな。でもそれさえしとけば親はなんも文句言わんかった」

帰りが遅くなると伝えておけば、門限も決められなかった。それまでの親と比べるとだいぶ寛容である。

「多分、俺の顔が最近不安定やつた頃より明るくなつてたからとちやうかな」

ある日事務所に出向くと彼のデスクの上に某老舗の和菓子が置いてあった。

それに添えられてた手紙をなんとなく見てみると差出人は「服部静華」。

その名を目にして手紙は見なかったことにした。

親はこの探偵のおかげで息子が心の安定を取り戻しかけていることに気付いていたのだろう。

つまり、それは前々から平次のことを心配していたというわけで。

自分達のせいで心のずれを生じてしまった息子を明るくしてくれた片品のことは事務所の場所から素性まで調べたに違いない。

「片品さんは俺を俺として見てくれるような気がしたわ。最初に会った時俺が警察関係者やとは知らなかったのもあるやるな。でも大阪来て俺の素性知った後も一人の人間として扱ってくれた」

その事務所に行くとき自分という人間が本当に生きていることが実感できた。

それがやたらと嬉しかったのだ。

当時の思い出を懐かしむように彼は目を細める。

「電話番したり書類の整理してあげたり。あの人ずぼらやったから片付けとかは俺や和葉が手分けしてやってたわ」

—— なんか和葉、なんでお前がここに来るねん

—— ええやん！ 片品さんも男ばかりやとむさくるしいし、私が来ると華やかになって

いいって言うてくれたもん

——そんな世間を渡る上でのお世辞に過ぎんわ。はよ自分の顔に自覚持てや

——なんやてー！？

——こらこら、人の事務所で痴話げんかするなよ

——そういう片品さんも彼女でもはよ見つけたらどうや？
ええ人紹介したるで？

——ははは、こりゃー参ったな……

「三人で聞き込みとかもしたなあ。知識だけではわからなかった探偵という職業がどんなもんかあれでようわかったわ。今俺が探偵できてるのはあの人に教えてもらったからやねん」

刑事とはまた違った職業。

いくらでも知識として知ることにはできたけど、実際片品の側でその仕事を観察しているとやはり本物は違うと実感したものだ。

父親が探偵まがいなことをしていた新一とは違い、周りが警察だらけだった平次にとってそれは貴重な体験だったのである。

平次の環境を知ってか知らずか、片品は嫌がる素振り一つ見せず彼が「助手」としてついてくるのを許していた。

「俺の持つてる違和感もあの人には正直に話した。自分からちゃん

と教えたんはあの人が最初やったかな。もうどうすることもできひんことを話すとな、あの人言ったんや」

再会した二週間後くらいに事務所で自分の本心を話してみた。きっかけは覚えていない。

ただこの人になら言えると思って自分の思いを晒した。

すると片品は笑ってこう言ったのだ。

——お前は優しいな

「誰も責めたないから自分を責めてるんやって……」

彼の顔が一瞬哀しそうに歪んだ。

——お前は誰かに救って欲しいとは思ってないんだろ？自分でどうにかしたいと

思っている。じゃあ言いたいことぐらいは言ってもいいんじゃないのか？

闇で足掻くにしても、誰かにそのことを知ってもらえたほうが気が楽だろう

片品は少年に向かって叔父のような距離で優しく言った。

助けを求めているのではないのなら、せめてその苦しみぐらいは溜め込まず吐き出してしまえ。

片品の考えは彼のそれまでの価値観を大きく揺さぶる言葉だった。

502

「あの言葉が俺の中にあつた重たいものを取り払ったんや。なんや急に肩が軽くなった感じがしたんや」

それで救われたような気がしたのだ。
自分は。

今の状況がどんなに困難でもそれを知っていてくれる人がいるなら乗り越えられるような気がした。

「……でも、」

急に彼の目に苦渋の色が混じる。

「あの人と再会してから三週間くらいたった時にあの事件が起こった」

そんな自分に今まで以上の困難が待ち構えているとは夢にも思わなかった。

「関西探偵連続殺人事件。一般人1人と関西の探偵五人が一週間で立て続けに殺された猟奇的殺人事件や」

「一週間に六人……！？でもマスコミで見たことは……」

奇異な事件名にコナンが思わず口を挟む。

六人も殺されたのなら国を揺るがす凶悪事件ではないか。

しかしコナンは1年前にそんな事件を聞いたことすらない。

「そらそうや。警察が緘口令敷いたしな。警察でも地元やった関西の警察と警視庁の上の人間しか知らん。多分お前が懇意にしている目暮っちゅう警部も知らんやろ」

「なんでそんな極秘にしたんだ？」

何か知られて困ることでもあったのか。

見当がつかないコナンは聞くことしかできない。

平次は少しだけ黙ったが、覚悟を決めたように再び口を開いた。

「パンドラが関わっていたことを世間に知らせるには早かったからや」

パンドラ、すなわち黒の組織。

コナンがその名に驚愕で目を見開く。

組織が1年前平次に関係する事件を起こしたのか。

「緘口令を敷いたのにはもう一つ理由がある。最後に殺された探偵と同じく、死にかけた人間の情報がマスコミに晒されるんやないかと爺ちゃんが案じたからや」

まさか。

「もしかしてそれが……」

ここまで言われればその被害者は安易に予想がつく。しかしそれを言葉に出すにはあまりにも残酷すぎた。

「そう、その連続殺人で最後に殺されたのが片品さんや。そして一緒に殺されかけたのが……」

この俺や。

コナンはあまりの驚きと衝撃で言葉が出せない。
ずつと苦しんできて、やっと理解してくれる人が現われたと思っ
たらすぐに殺されて。

しかも自分も瀕死に陥って。

彼がどんな気持ちで今までを生きてきたのか想像がつかなかった。

多くの真実が明らかになり戸惑うコナンを他所に、平次はどこかが
麻痺したように淡々と過去を述べていく。

「関西の探偵が次々と殺されたのは、最初の被害者の一般人に全て
関係しているからや。その一般人は次に殺された探偵の依頼者で、
突然消えた息子の足取りを探してくれるよう頼んでたらしいわ。元
々親子仲はあんまりよう無かったから、家出の可能性もあるし警察
に言う前に探偵のところにきたそうや」

父子家庭だった依頼者は、毎日喧嘩していたとはいえ急に姿を消し
た息子を心配しある探偵に助けを求めた。
警察に言えば学校等にも悪影響が出る。

内密にことを運ぶために探偵を選んだのが、結局は親子を最悪の結
末へと導いてしまうのだが。

「依頼された探偵は全く見つかる気配の無い依頼者の息子を不審に
思い、知り合いの探偵達に

聞いて回ったんや。素人が完全に足取りを消して故意的に去ることなんか出来ひんしな。もしかしてバックに大きな集団が関わってるんとかやうかとその探偵は予想し、思い当たる節は無いかと探偵達に聞いた」

幸か不幸か、その探偵は勘が良い方であった。

「大きな集団」という考えに行き着いてしまったのが運の尽き。そして聞かれたほかの探偵たちの運もその時尽きていたと考えていい。

「つまり大きな集団とはパンドラのこと、その聞いて回った探偵の中には片品さんもいたってわけか」

その探偵以上に勘の良いコナンは話を先回りして発言する。

「そうや。後で聞いたところによると、依頼者の息子は運悪く組織の裏取引現場を見て殺害されてしまったらしいわ。……お前とよう似た境遇に陥ったんやな。で、その息子の父親が探偵を雇って組織を探りかけていると気付いた奴らが口封じにかかった」

疑わしきものは全て消去する。

それが組織のやり方である。

まず殺害された息子の父親が真っ先に殺される。次には依頼を受けた探偵が。

そして更に……

「二番目の被害者である探偵が殺される寸前まで拷問を受けていてな、他にこのことを知っている人間はいるかと聞いたらしいわ」

言えば命ぐらいは助けてやるとでも言われたのだろうか。

瀕死の探偵は聞いて回った仲間の探偵四人の名を口走ってしまった。その中には片品陸人の名前も入っていたのだ。そこから連続殺人の幕は上がった。

「片品さんも危ないことやとは感じていたんやろな。俺に組織を探っていることを一回も言わへんかった。でも、俺は五人目が殺された朝に親父から言われたわ」

——マスコミにはまだ未発表やし誰にも言っなや。……実は関西で探偵が次々に

殺されている。被害者の共通点はわかってへんが、一応お前が懇意にしている

その探偵にも気をつけるよう言っておけ

平蔵はやけに神妙な顔つきで学校へ行こうとする息子に忠告したのだ。

「その時初めて親父が俺に片品さんのことを話題にしたんやけど、そんなことは後回しや。学校終わった後すぐに事務所に行った」

父の素振りからして事態はかなり深刻だということを悟った彼は、何か嫌な予感がして急いで事務所に行った。

辺りはもう暗くなっていて、事務所の窓から明かりが漏れている。明かりの存在を確認して安堵した後、階段を上がり扉を開けた。

すると開けた先には確かに片品がいた。

そう、片品という人間「だった」遺体が。

その凄惨な光景を思い出したのか、平次は点滴をつけていない左手を嘆くように自分の目に当てた。

「俺が行くともう全部手遅れやったんや。頭撃ちぬかれて死んだ片

品さんが床に倒れてた。慌てて側に駆け寄ってな、頭真っ白になってあの人の名前を何度も呼んだんや」

——片品さん！！！ 片品さん！？？？ なあ、嘘やろ！？
なんで倒れてんねん！！ なあ！！？ 片品さん！！！！？？

涙が溢れてきたことさえ気付かずずっと呼び続けた。
やっと会えた理解者だったのに。
どうして。

誰が。
何のために。

そして更に悲劇の連鎖が彼を襲う。

「片品さんの遺体と居れたんも少しだけやった。……叫び続ける俺のいる事務所を、あの人を殺した組織の暗殺者が証拠隠滅のために爆破しよった」

「な……っ！？」

背後から灼熱の熱風が来たと思ったら、いきなり吹き飛ばされそのまま意識を失ってしまった。
意識が途切れる瞬間、右目にかつて味わったことの無いような痛みを感じながら。

「去年の春に爆発事故で右目を失明したっていうのは……」

ボスの部屋でアポトキシンを飲んだと告白した彼が原因としてあげた言葉である。
あの時は普通にただの事故だと思っていたが、まさか組織の犯罪に巻き込まれていたとは。

「偶然、帰宅途中やった親父が片品探偵事務所爆発が起こったと車の無線で聞いて、現場に駆けつけたときにはもう俺は扉ごと吹き飛ばされて壁際に倒れてたそうや。同じように駆けつけていた大滝はんらと一緒に、珍しく血相を変えて俺を何度も呼んでたらしいわ。そら、血だらけで右目の眼球には窓ガラスの破片が突き刺さってたしなあ」

急いで救急車で病院に運ばれ、なんとか命は助かったが目だけは回復しなかったという。
彼は一ヶ月ほど意識が戻らなかったそうだ。

「片品さんはどうなったんだ？」

「爆発で体がバラバラになってしまった。申し訳なさと哀れさと、俺を救ってくれた感謝の意を込めて、なんとか出来る限り体の一部を回収し親父はあの人の長野の故郷に墓を立てた」

平次が病院で眠っている間に全てが片付いていた。

焼け焦げた事務所は一掃され、片品の遺体はあまり意味は無かったが一応火葬を行った後故郷に戻された。

身寄りの者は誰も居なかったらしく、無縁仏になる前に平次の両親が引受人になったようだ。

結局、平次が片品の「助手」でいたのは一ヶ月だけだった。

あまりにも短い出会いを失ってしまったショックのせいか、彼はアポトキシンを投与された後までずっとこん睡状態が続いていたという。

「俺の爺ちゃんが黒連太郎と知り合いやったことは事実でな。二代目の厚司さんとも繋がりはあるとあったんや。だから下っ端のせいで大事な初代ボスの知り合いの孫を瀕死に陥らせてしまったと知った厚司さんは、謝罪の意味も込めてアポトキシンを渡してきた」

——どうせ何をやっても視力が戻らないなら、一縷の望みをかけて

使ってみたらどうですか？

「その薬を爺ちゃんから渡された親父は、それを組織のものやと知っていたながら俺に使たんや。組織と繋がることより俺の目を優先させてしまったんや」

鬼の平蔵も人の子。

犯罪組織が開発したとはいえ、それが息子の目を蘇らせるのならと悪魔の薬に手を伸ばしてしまった。

母の静華も了承していた。

犯罪よりも息子のほうが大事だったのだ。

その選択を一体誰が責められるというのだろうか？

5（後書き）

私事ですが、実は今日が誕生日です。

まさかこの日まで続くとは思いませんでした。（笑）

終結という名の続・後編みたいな形になってきました…

次話は非常にややこしいです。どうかついてきてもらえたら嬉しいです。

「……ちよつと待て、まさかお前の親父さんはパンドラの存在を知っていたのか？」

しかし、そのような選択よりもコナンはそこにいたるまでの経緯の中のある事実に気付く。

静華の父、池波氏が組織と本当に繋がっていたということは平蔵もパンドラを知っていたことになる。

それにも関わらず今まで警察が動いた様子が無いところからすると、組織の犯罪を完全に黙認状態ではなかったのか。

「親父も知ってたし、俺も知っていたんや」

「!!」

警察官僚が黙認していたという事実が理解できないコナンに、彼は更に追い討ちをかけるように信じられない言葉を発する。

「お前、和葉の素性は聞いたか？」

「あ、ああ……ここに来る途中遠山刑事部長から聞かされたけど」

「なら和葉が初代の孫やということは知ってるわけやな。俺らが十歳の時和葉のオカン、まあ実際には育ての母親っていうのかな。そ

のおばちゃんが病気で亡くなったんや。その時和葉の出生について俺らにも話された。すると当然和葉の本当の両親が所属していた組織のことも言わなあかんやろ？」

なんと十歳の頃から平次と和葉はパンドラという犯罪組織を認識していたのだ。

とは言っても「とても大きな、警察でも適わんかもしれんほど危険な組織」としか教えられなかったが。

和葉の両親と平次の両親は子供が組織を知ろうとすることを禁止させる代わりに、最低限のことを教えたのだ。

この聡明な子供達はいつか組織の存在を知るかもしれない。

ならば、そうなる前に許容範囲で組織のことを知らせ警告させといったほうが安全だろうと。

そうして自分達の出る幕は無いと教えられてきた平次達は、そのまま何事も無く成長していったのである。

「親父らがパンドラを黙認状態にせなあかんかったのは、変に組織を突いて刺激せんように

するためや。構成員を数人捕まえたところで組織にはほとんど痛手はないし、かと言ってボスを捕まえたら内部に居る反ボス派の集団が暴走しかねん」

「組織は内部で分れていたのか？」

「ああ。ボスに従うグループと、ボスの考えに不満を持つグループに分れておったんや。ちなみにボス派は純粹にアポトキシンの開発を願う集団。そしてもう一方が”ブレイン”を開発しようとしてい

た集団や」

「ブレイン？」

——死んでも薬と”ブレイン”のデータだけは渡せられねえな

SATが突入してきた際ジンが呟いた言葉が蘇る。

確かにジンはアポトキシンとブレインという名のデータを死守しようとしていた。

アポトキシンはわかるがブレインの名は初耳だ。

前者と同じくらい重要だということは判断できるが。

「お前知ってるやろ？ 組織がコンピュータープログラマーを集めてたんを。あれはアポトキシンのためではなくブレインの開発をするためやったんや」

「……俺はアポトキシンとプログラマーを何らかの形で合わせて組織が何かを仕出かそうとしていると思っただけ、違ってたようだな」

コナンは想定外の事実のために息をつくしかない。

以前読んだプログラマー、板倉の日記には「我々は神であり悪魔でもある。なぜなら時の流れに逆らって死者を蘇らそうとしているのだから」と書いてあった。

この日記によって人間の体の時間軸を操作するアポトキシンがシステムソフトと関係があると踏んだのだ。

しかし薬とシステムソフトがどうやって繋がるのかと疑問に思わなかったことは無い。

今まで薬とプログラマーは同じ目的のために使われてきたのだと思いい込んでいたが、平次の言葉を聞く限り別々の用で利用されたようだ。

これで二つのデータの関連性についての疑問も解決できる。

「反ボス派はアポトキシンの作用で起こる細胞破壊を脳内でのみ発生させ、人間をある意味植物人間にすることが目的やった。そしてその植物人間にブレインと呼ばれるチップを埋め込み好きなようにコントロールさせようとしたんや」

「そんなことが……!？」

「出来るしやろうとしているんや、ジン達は。あいつは周囲に表向き忠誠を誓っているように見えさせてるが、ホンマは反ボス派の中心人物や。アポトキシンを人間の最善化のためではなく利用させるために使おうと思とる」

哀に宛てた手紙を読む限り、厚司が進めていたアポトキシンの開発は犯罪ではない。

ではなぜ警察やFBIはパンドラを犯罪組織と見なしているのか。

それはジン達が計画しているアポトキシンを利用したブレインの開発こそが犯罪だったからだ。

「厚司さんは人間を操るブレインというチップの開発を当然良しとはしなかった。でも、数年前あの人が薬の副作用で一時危篤状態になった隙に、反対勢力がチップを使う上で必要となるアポトキシンの現段階での効果を試すため裏社会に流出させたんや」

「本物のクリスが死んだのはそのせいか」

「事實はそうやな。つまり、ボスが居なくなれば開発途中の危険な薬が世界にばら撒かれてしまう可能性があるうちゅうわけや」

「だから警察は下っ端を捕まえることも、正体を知っているボスを逮捕することも

できないということか……」

反対勢力を潰さない限りパンドラは捕まえないのだ。

しかしその反ボス派こそがジンを始め、危険人物が大勢居るわけであり。

下手にそちらを捕まえることも出来なかった。

「親父らは仕方がなかったんや。せめて組織の動きだけは把握しておこうと、爺ちゃんに頼んでパトロンを続けてもらってな、情報だけはかるうじて流れてきてたわ。……でもそれだけではあの人の殺害は止められなかった」

そうやって手を拱こまねいている内に片品は殺されてしまったのだ。

「もし片品さんが俺に組織のことを言うてたら助かったかもしれん。俺があの人にそれ以上関わったらあかんて警告できたんや。言ってくれなかったとしても、組織の情報をもっと持っていたら事件を未然に防げたかもしれんのや」

全ては何も知らなかった自分達のせい。

コナンは彼が少し自分を責めすぎだとは思ってたが、それを否定することはできなかった。

平次が側にいた時点で片品の殺害を防ぐ可能性は確かにあったのだ。例えそれが彼のせいではなかったとしても。

「病院で目が覚めて、そのことを知った俺は発狂したわ。あの人が死んだのは俺や警察の責任もあると思ったら、居ても立ってもおれんようになった。抑えるオカンを無視して部屋の物全部投げ壊して暴れまくった。泣いて泣いて親父らを罵倒しまくった」

——平次、もう止めて！　これ以上暴れたらあんたの体が……！

——うるさいわ！！ 片品さんを殺したんは俺や！！知っていたのに止められなかった

俺らのせいや！！

——平次、少し落ち着けや！ 彼の死はお前のせいやない！！

——黙れ！！ 俺のために薬をもらえるぐらい組織と繋がりがあったのに何も出来なかった

あんたに言われたないわ！！

あそこまで親に対して感情を露にしたのは初めてだった。
皮肉にも、片品が死んだおかげで彼は親に自分の思いをぶちまけることになったのだ。

息子の叫びに何も反論できない平蔵と静華は、ただ黙って彼を抑えることしか選択の余地は無かった。
仕方が無いこととはいえ、組織を黙認してきた自分達のせいで片品は死んだのだから。

「だから俺はもつと組織の動きを把握するため爺ちゃんに頼んだんや。俺を爺ちゃんとボスの連絡を取り持つ仲介役に推薦してくれってなあ」

これ以上片品のような未然に防げる事件を見つけ出すため、平次は組織の構成員という道を選んだ。

非常に危険な選択とはいえ、生きる目的をそこに見出した彼を止めれば再び狂ってしまうと予想した親はそれを止めることができなかった。

もちろん和葉も。

こんな悲しみを誰ももう味わいたくなかったから。

だからこそ平次は黒の中へと進んでいった。

6 (後書き)

コミックス37巻参照

「ホンマの目的は情報収集やったけど、組織側に伝えた表向きの理由は昨夜言った通りや。」

爺ちゃんの政敵を潰してもらう代わりに親父から警察の組織捜査に関する情報を横流しすることが、俺ら一族と組織の同盟の契約になった。その連絡役として俺を推薦してもらうんや」

今まで平次の祖父と厚司の間に立つ仲介役は組織の人間がやっていった。

祖父側から仲介人を出すことは向こうから警戒心を引き出すことになりかねないので、それまで出来なかったのだが、孫を推薦すれば話は変わってくる。

警察の人間でもなく、ましてや孫である未成年の平次を出すことは相手への信頼感を示すことになる。

江戸時代以前にあった人質と同じような効果があるといってい

予想通り、「今度は組織側からではなく私の孫を連絡役として使ってもらいたい」という祖父の申し出は怪しまれることなくすんなりと受け入れられたのだった。

こちら側から仲介人を出すことによって今までよりも組織の情報は得やすくなった。

「厚司さんに初めて会った時、ホンマびっくりしたわ。青白い死にかけの顔をしながら生きてるんやもん。あの時はランダムな体調の内、比較的良好なほうやったしパソコン使わず自分でこつちと話したけどな」

――君が池波殿のお孫さんかい？

――……そうです。これからよろしゅう頼みます

――どうして君が仲介人になったのかな？君は私達の不手際のせいで悲惨な目に遭っただろうに。私が憎くないのかね？

――……あんたのせいでえらい目に遭ったけど、右目が治ったんもあんたのおかげや。

やから、あんたが作る組織がどんなもんか興味が出てきたんです。

――なるほど。そうだ、君にも何か別の名前を考えないといけないね。

希望はあるかい？

――別に俺はただの仲介人なんやさかい、いらんのとちやいますか？
コードネーム貰うほど偉くもないと思うんやけど

コードネームは組織の中でも上層部員にしか付けられていないと祖父から聞いていた。

祖父や父は、息子を組織にそこまで深入りさせるつもりは全く無かったし、ボスも未成年とはいえ警察官僚を父に持つ彼を完全に信頼するとは思っていなかった。

ただの連絡係だからこそ両親は平次の介入を許したのだ。

しかしそれは厚司の予想外の言葉によって大きく覆されてしまう。

——私は君を結構気に入ったのだがね。大黒殿のお孫さんにもラムという名が

付いてるんだよ。それにアポトキシンを飲んで右目を復活させた人間という

のは非常に妙味深い。……ただの連絡役にするには惜しい素材だ

——え？

——スピリタス。それが君のここでの名前だ。仲介役してもらうが、

ついでに私の話し相手もしてくれないかい？

厚司が平次に世界最強の酒を名づけ、「お気に入り」とした時点で予定は狂ってしまった。

ここから彼はどんな組織の中枢に埋め込まれていくのである。より情報を得るため、抵抗もせずむしろ自分から進んで深みへとはまっていった感もあるが。

平次は厚司に会って、彼が本当の意味での悪の根源ではないと気付

いた。

薬の開発だけを願っていたのに、ブレインという恐ろしい計画のせいで組織は犯罪に手を染めていったということは、祖父から前もって聞いている。

しかしそれを止められない厚司も大概悪いのだと思っていた。

それが会ってみて、彼に対する印象ががらりと変わった。

どんな状況に追い込まれていても、人間を救うアポトキシン開発という夢を追い続ける厚司を見て共感してしまったのだ。

組織を潰しても、彼の夢だけは何とか実現させたいと願うようにすら。

そんなことを考えているうちにいつの間にか側近にまで行き着いていた。

「こういうのを、情に絆されてしまったっていうんかなあ」

探偵失格やなと平次は苦笑する。

「実は、俺が側近やということは親は知らんねん。かなり中枢に入ってもうたことは知ってるけど、俺が厚司さんの考えに同調したのには気付いてへんやろな。面白い素材として捉えられてるとしか知らんのとちやうやるか？」

「じゃあ俺を探しに東京に出てきたのはどう説明したんだ？ ただの連絡係がボスの指示で工藤新一を探しに行くなんてごまかしきかないだろ？」

「親には、組織に殺されたかもしれん探偵を探しに行く伝えてといたわ。もし生き延びていたら後々大事な証拠になるかもしれんってなあ」

「証拠？」

「和葉の親父さんが言ってたやろ？」 工藤新一・宮野明美殺害容疑で逮捕する”って」

SATが突入して遠山がジンに対して言い放った時、一瞬視線がこちらに向いたことを思い出した。

あれはどう見てもコナンが工藤新一だと知っている顔だった。

つまりジンが工藤に薬を飲ませたという事実をこの少年が証明できるということを意味していた。

「警察は反ボス派のジンをいつでも捕まえられるために、犯罪の証拠が欲しかったっていうことが」

「まあそのためにお前さんは適任やったんやな。親父さんには工藤を殺害されたことにしてもらうよう俺が頼んでおいたんや。裏切った厚司さんの娘が工藤の死亡記録を改ざんしたとやつらが気付いたら、お前がまだ生きてるかもしれんと思われし。でもあそこで殺害と言ったらジンも工藤がホンマに死んでいて、他に生き証人がいると思ひ込むやろ？」

なるほどとコナンは頷く。

「江戸川コナン」はジンによって工藤新一が殺されかけ、宮野明美が殺されたことを証明することが出来る唯一の人間でなのだ。いつでも準備が整い次第、警察が組織を潰そうとするのには証拠を前もって掴んでおく必要がある。

そのためにFBIは強行突破で組織のブレイン等の資料の奪取を狙ったのだが、警察はすでに江戸川コナンという証人をキープしていたということだ。

——そいつは絶対死なせたらあかん！！ 何が何でも死なせたらあかんのか！！！！

コナンを助けた平次が叫んだ台詞はこういうことだったのだ。

この少年は組織を潰すのに必要不可欠な証人であると。

だから遠山も敢えて「殺害」という言葉を使い、ジンに工藤「コナンの方程式を思いつかせないようにした。」

「俺は江戸川コナンという証人を発見し、親父に伝えた。これで後は頃合を見計らって反ボス派を外側からじわじわと追い詰めることが出来たら潰すことができる」と

そしてその時が来るまで彼はコナンを守り、組織に敵対する集団の監視を

続けようとしていたのである。

中途半端に組織を攻撃しては薬の流出が危ぶまれるし、かといって

野放しにしておけば暗殺などで多数の犠牲者が出てしまう。

どっちに転んでも危険な事態を防ぐためにギリギリのラインで平次は役目を務めてきたのだ。

難題をやつてのけた彼の功績は計り知れない。

「……いつも苦しい立場で辛かっただろ」

「そんなん考えたこと無いわ。俺は自分の目的のためにやつたんやから」

でもコナンはそんな平次の努力に全く気付かなかったわけで、すまなさや情けなさで自分が恥かしくなる。

自分だけが窮地に立たされていると思い、彼がどんな心境なのかを知らうともしなかった。

いつも彼は太陽みたいに笑っているからついその笑顔に甘えてきてしまったのだ。

それこそが罪。

「お前がそんなにがんばってきたなんて知らなかった。……気付くことができなくて本当に悪かった」

そう言つて頭を下げた。

首が動かないので、視線だけを頭を下げたままのコナンに向けて、平次は困つたような顔を見せる。

「謝るのはこっちのほうやろ。組織を捕まえるためとはいえずつとお前をだましてきた。お前が必死になつてジン達を追っているのを知っていながら何の情報も言つてやれんかった」

そして苦しそうな表情で、

「お前に許してもらおうなんて甘い考えは持つてへん。組織の情報はいくらかでも流す。やけど、今までのような関係は無理して作つてもらわんでもええで」

はつとしてコナンが顔を上げた。

これまでのような関係には戻れない。

平次の台詞はそう言っているように聞こえた。

「……それ本気で言ってるのか？」

「当たり前や。俺が工藤を嫌う理由は無いけどお前はようけあるやろう。俺なんかに気遣わんと思う存分組織を追いかけえな」

自分では自覚無いかもしれないが、突き放すように言う平次の顔は言葉とは裏腹にとても悲しそうだった。

そんな彼をコナンは少し怒ったような声で言い返す。

「それでお前はどうすんだよ。警察に任せてもう何もしない気かよ」

「それはない」

だが彼はきっぱりとそこだけは答えた。

「未解決になったままの片品さんの最後の事件がパンドラの調査やつた。組織を見張ると同時に俺はそれを引き継いで、構成員となり探ろつと決めたんや」

パンドラの解明は片品が志半ばで終わってしまった事件でもあり、平次の探偵としての最初の事件でもあるのだ。

「今でも俺の最初の事件は終わってへんのや」

最初の事件とするにはあまりにも大きすぎる「謎」ではあったが、それがあったからこそ平次は今まで自責の念で潰れることなく生きてこられた。

「俺は絶対ブレインの完成を食い止める。そして厚司さんの夢をかなえてやりたい」

組織の壊滅と組織の薬の完成。

一見矛盾したように見えるこの二つを達成しない限り彼の事件は終わらない。

真実を解き明かしたところで、誰も救えないならそれは意味が無い。

真実を知った向こうにある「何か」を解決することが本当の意味での事件終了になるのである。

平次は片品のために、厚司のためにそれをやり遂げようと心に決めていた。

そんなゆるぎない思いを持っているからなのか、彼の目だけは体が重傷にもかかわらず強い光を湛える。

一方のコナンにも同じ光はあり、二人は少しの間視線を合わせ沈黙が流れた。

早朝の小鳥のさえずりが部屋にかすかに漏れる。
眠っている和葉は不意に訪れた静寂にも気付かない。

そして、

「じゃあいいじゃねえか」

「は？」

コナンの一際明るい声が沈黙を破った。
推理する時のような自信に溢れた顔で言葉を紡ぐ。

「同じ目的を持つ同志がバラバラに動くななんて非効率なことするより、タッグを組んだほうがいいに決まってるじゃねえか」

「でもお前、」

「らしくねえぞ服部。そんな顔して縁切ろうとか言われても全然説得力ないぜ」

「……」

やはり悲しそうな顔をしている自覚は無かったらしい。
指摘されて初めて気付いたようにぐっと詰まる。

「それに俺はさ。まだまだ子供だから割り切ることとかできなんだよ。お前が俺に偽ったり黙ってきたりしたから、これを期にけじめをつけようとかそういうきっぱりとしたことなんかできねえ」

少年の体を持った十七歳は自分のことを「子供」と言う。

「俺はお前や蘭のいる世界に戻りたい。お前の意思に関係なく、俺がお前と縁を切るのが嫌なんだ。これは俺の願いだ。いつも俺の願い聞いてやってくれていたんだから、今度も聞いてくれ」

コナンは開き直ったかのごとく澄んだ笑顔を見せる。

工藤、工藤、と呼び慕い親友として接してくれた青年。

先ほどの悲しい顔でそれが偽りではなかったことを示している。
だからこれからもずっと親友でいてほしい。

そして自分は幼馴染と親友の待つ世界を目指してがんばりたい。

「……我侬やなあ、お前」

「そうだな、俺まだ子供だし」

呆れたように、しかし嫌そうではない顔で平次は言った。
優しい目だった。

「ホンマアホやわお前。なんで皆俺の真実を知ってそんなこと言うんや。厚司さんやってそうやった。俺が組織を憎んでるのを知って自分の側に置いていた」

初対面の時で、自分が薬に興味があって仲介人になったとは本気で信じていなかったはずだ。

なのにいきなりコードネームを授け、いつでもボスを殺せるような側近という立場にまで昇格させた。

厚司は確かに平次に対して心を許していたのである。

アポトキシンの実験体だったからとはいえ、これは平次の中で一番の疑問でもあった。

「そのことだけどさ、さつき俺の父さんが言ってたよ。なんでボスがお前にスピリタスなんていう世界最強の名前を付けたか」

「薬の成功例で、気に入ったからとちゃうんか。ベルモットかて、

和葉のラムと合わせたら

アガサっちゅう名前になるんやし」

「それもあるかもしれねえ。でも父さんは別の考えも示したんだ。スピリタスの語源はスピリット。これには精神という意味もあるがもう一つ別の意味もある」

あまり一般的ではないが、確かにこんな意味もある。

「“物事の本質”。つまりそれは……」

「
真実
」

平次の目が驚きで大きく開かれる。

「ボスは周りのせいで真実を持ち続けることが出来なかった。だからお前にだけは持っていてほしかったんじゃないのかって……」

周りの環境の変化で心を失いかけていた平次を見て、厚司は昔の自分の面影を重ねたのかもしれない。

夢を追い求め組織に入った彼は図らずとも犯罪組織のトップとなり、妻を失い、娘を殺せざるを得なかった。

周囲の圧力は自分に真実を持つことを許さなかった。

だから厚司は闇の中であがき続ける平次に、自分の代わりに「真実」を持っていて欲しかったのではあるまいか。

コナンよりも前に彼のコードネームを知った優作はさっきこのような考えを明かしたのである。

「アホやホンマ、あの人も不器用なことしよってからに……」

思いもよらなかった考えに平次は口を震わせる。

そのまま左手で目を押さえただひたすら呟いた。

堪忍、堪忍、と。

それは誰に対する謝罪だったのか。

コナンは彼が流す一筋の水滴に見て見ぬ振りをした。

閑散とした廊下の壁にかけてある時計の針は、午前四時を過ぎた頃である。

院内の廊下でソファに腰をかけている男性が二人いた。

若い方の男が側の自販機で缶コーヒーを二本買い、座ったままの初老の男に一本渡した。

男は礼を言つて受け取るとプルタブに指をかけないまま再び俯く。

そんな博士の様子に優作は苦笑して隣に腰を下ろした。

「昨日からずっと寝てないのでしょう？ それでも飲んで落ち着かせてみてはどうです？」

「……うむ」

味気ない返事にもう一度ため息。

息子は友人の病室に行き、博士の預かっている少女もある男の看病をしているので、残された二人は待つことしか出来なかった。

手持ち無沙汰な優作は自分の持った缶の蓋を開け一口飲んだ。

朝専用と謳っただけあって普通のコーヒーよりも幾分甘い味がする。

「ワシは……」

博士が初めて自分から声を発した。
そして顔を上げて正面の病室のドアを見る。
そのドアの向こうには哀と赤井がいるはずだ。

「ワシは、逃げておったのかのう」

そうポツリと呟いた。

自分自身に問いかけているような呟きである。

「宮野が組織に入った後、ワシは彼と縁を切った。たった一度の過ちを許すことができず今までずっと彼からの連絡を無視してきてしまったんじゃない」

過ちとは、すなわち親友だった宮野が自分の警告に聞く耳を持たず組織に入り、アポトキシンを犯罪に利用されてしまったことだ。

彼は構成員になってからも度々博士に組織に来るよう誘っていた。しかし博士はそれをひたすら見て見ぬ振りをして、ボスになってからは宮野の連絡は来なくなってしまった。

優作は黙ったまま隣の男の独白、いや懺悔を聞く。

「しかし大黒さんの孫じゃったという和葉君の決意を見て思ったよ。ワシは宮野を許せなかったのではなく、彼を止められなかった自分

を認めなくなかったんじゃと」

あの時もつと強く引きとめておけば。

その後悔することを恐れ、彼との接触を絶ったのである。

ちなみに、接触を断ったという後ろめたさゆえにその後博士は彼の娘である哀を匿うことを決意するのだが。

一方で組織の初代ボスが祖父だったという事実を受け止め、更にその運命に立ち向かおうとする和葉の姿はそんな博士にとって衝撃的だった。

こんな儚い少女が重すぎる秘密を背負って生きているのかと。

彼女を見て自分が恥かしくなった。

「彼女は言うておったよ。宮野はずっとワシを待ち望んでいたんじやと。……苦しんでおったんじやろなあ、あいつは」

アポトキシンの副作用に苦しみながら、孤独感を味わい、それでも組織を束ねなくてはならないという重圧は計り知れない。

「ワシが逃げたせいで様々な人に迷惑をかけてしまった」

新一や哀、そして平次にも。

間接的とはいえ自分のせいではないと言い切れないのだ。

そして嘆くように右手を額に当て再び俯いてしまった。

暫く優作はそんな彼を側で眺めていたが、コーヒーを飲みきると向かい側のゴミ箱に投げ入れる。

綺麗な弧を描き、それはすっと入った。

「ではこれから向き合えばいいのではありませんか。どんなことにも手遅れはないと思います。新一も闇に入り込んだ親友を救い上げました。そう、死ぬまで手遅れというものにはならないのではないのでしょうか？」

つまりそれは生きている限り、宮野厚司と自分の運命に立ち向かえということだ。

優しい口調だが、お世辞にも内容は優しいとは言い難いものだった。しかしそれは彼を思ってこそその提言なのだ。

優作の思いは通じたのか、博士は一瞬驚いたような表情をした後その厳しい提言にふっと笑う。

「……そうじゃのう。償いに手遅れはないのう」

コナンと平次のように、
今だからこそ宮野ともう一度話がしたいと
博士は思った。

博士がコナンに思いを馳せた頃、当の本人はある病室から退出した。厚司の思いを知った平次の心の整理がつくのを見計らって一度部屋を出たのだ。

また後で、と声をかけドアを開けて廊下に出ると向こうから二人の男女が

スーツを着た男達に囲まれてこちらに近づいてくるのが見えた。

「服部の父さんと母さん……」

コナンが驚いて向かってくる平蔵と静華を見つめていると平蔵はその姿を見止め、一旦立ち止まりSPに何かしらを告げる。

それに対してSPは頷くと踵を返して反対方向へと去ってしまった。

人払いを命じたのだろう。

そのまま彼らは病室の前までたどり着き、コナンと対面する形になる。

「今回はホンマご迷惑おかけしましたな」

「……いえ、こちらこそ助けてもらいましたし」

平蔵の放つ存在感に気圧される感じで思わず頭を下げる。

自分の父とはまた違う強いオーラがそこにはあった。

先ほどの平次との会話で、目の前の二人が自分の正体を知っていることは判明している。

態度も「工藤新一」として表して問題ない。

「昨日君の父親と話し合ってる時に息子からの緊急連絡が入りましたんや。そこからSATの遠山や色々な機関に通達を出して、もうこんな時間ですわ。君にまで被害を与えてホンマ申し訳なかった」

「そんな……僕は結果として怪我はしませんでしたし、逆にあなたの息子さんに重傷を負わせてしまいました。謝るのはこちらのほうですよ」

恐縮して否定すると、突然傍らに控えていた静華が堪らずコナンに向かつて深々と頭を下げてきた。

「ホンマに、申し訳ありません。全ては私らの責任なんです。あの子は何も悪くありません」

「静、」

いきなりの謝罪に戸惑うコナンを見て平蔵が咎める。
しかし彼女は頭を上げない。

「あの子はあなたのことを騙そうとかはこれっぽちも考えておりませんでした。本当にあなたを親友だと思っていたと思います。だから、こんなことになったのは何もできなかった親の責任なんです……！」

静華はこの一件で息子と新一の仲が壊れるのではと案じているのだ。せつかく出来た親友を、自分達のせいで失うようなことがあってはいけないと思っているに違いない。

これ以上息子に悲しい思いはさせたくないという気持ちに痛いほど伝わってくる。

いつも気丈に振舞っている女性から頭を下げられ一瞬コナンは驚いたが、

「僕達は大丈夫です。たった今和解してきたところですから……それに、彼は自分で決めて自分の責任として組織に入っただけです。あなた方がそこまで気負うことはないと思います。だからお願いですから頭をお上げになってください」

そうしないと僕が息子さんに怒られてしまいます、と苦笑した。それに応じる形で静華がゆっくりと背筋を戻す。

コナンの言葉に少しびっくりしたような顔をしていたが、目が少しだけ潤んでいる。

「……おおきに」

そしてもう一度頭を下げた。

そのまま平蔵もコナンに一礼すると、彼女の肩を支えドアに向き合
わせる。

これから息子と娘同然の少女に面会するのだ。

彼は一度目を閉じ、ゆっくり開けると意を決したようにドアノブに
手をかけた。

「服部本部長」

後ろから呼び止められる。

「もしかして、今回の責任をお取りになるつもりではありませんか
？ ……それこそ、本部長の職を辞するくらいの覚悟が」

はっとして静華が夫を見る。

彼のドアノブを回す手が止まった。

誰にも悟られていないはずの本心を突かれ、少なからず驚くが振り向きはしない。

コナンは言葉を続ける。

「これは僕の想像です。何もおっしゃらなくても結構です。……あなたは今回における、今まで監視してきた組織とFBIの衝突を止められなかった責任を取って辞職しようとお考えになっている。そして公ではありませんが、息子さんを取り巻く悲運を防げなかったことも親の責任として辞職の中には込められている」

平蔵は何も言わない。

当たっているということだろう。

ここで彼を見たとき、その目が辞職の決意を物語っているように少年には見えたのだ。

「もしそうなら、本当に息子さんのことを思うのなら、それだけは止めて頂きたい。彼は自分のせいで父親が辞職したと考えて、また己を責めてしまうでしょう」

そこで言葉は切られた。

先ほどまで平次の本心を聞いてたコナンは、どんなことが彼にとって一番辛いのかを理解していた。

親が辛いと彼も辛い。

母が悲しい顔をしていたら彼も悲しむし、父が心血を注いで務めてきた職を辞すればまた彼は悲しむのだろう。

それをこの二人が気付かないはずは無いと思うのだが。

少しの間沈黙が廊下に流れたが、再びドアノブが回されることでそれは破られた。

「……肝に銘じておきますわ、工藤君」

二人が入ると同時にボタンという乾いた音が廊下に響き渡る。

閉まる扉を見つめて、コナンは人の幸福とは一体何なのだろうとふと思った。

この数日間ホンマ色んなことがありすぎたわ。

こうやって、病院のベッドで寝ているのがなんか変な感じする。

つい数時間前までは畳の上で死ぬこともできひんと思ってたのにな。

俺も悪運が強いほうや。

そんな俺とタメ張るくらい悪運持った工藤のやつが、病室から出て行く時

「俺が今こうして生きているのはお前が組織に入っていたからだ。お前がいなかったら今頃俺はやつらにFBIと共に殺されてた。…」

…本当にありがとう」

とか言いよった。

あつちも照れくさいんか、そのまますぐにドア閉めてしもうたけどな。

あいつに面と向かってお礼言われたことなかったからびっくりしたわ。

でも、俺が今までしてきたことは無駄やなかったんやって思った。

こっちがお礼言いたいくらいやつちゅうに……

その数分後、親父とオカンが入ってきた。

工藤がドア閉めてすぐ廊下から少し声が聞こえてたから何か会話でもしとったんかもな。

何話したんやろ？

入ってきた時にはオカンは目がもう真っ赤でな。

なんかこっちが悪いように思えて、すまんって言おうとしたら先に親父が頭下げてきた。

あの親父がやで？

初めて親父に謝られたわ。

FBIが突入してきたって連絡した時、一步も動くな言わたのに勝手に動いて勝手に怪我したんやから、謝るならこっちのほうやろつ。

やのに、

「お前を追い詰めてしまつてホンマにすまんかった」

つて言うんや。

一瞬何を言われたのかようわからなかった。

追い詰められてるとか、全然そんな自覚なかったんやけど。

……でも、親父やオカンが俺のことを大事にしてくれてると思えば
思うほど苦しいと感じるときあったなあ。

なんでかはわからん。

ただ、思われれば思われるほど、幸せを感じられへん自分が憎ら
しかった。

自分の存在証明が出来なくて、辛くなつて、それでも親に大事にし
てもうて、それでも幸せになれへんくて。

ずっとそんなことの繰り返しやったのかもしれん。

それは片品さんが死んでからもずっとあったものや。

ほっとかれてたらほっとかれてたで、多分悲しいはずやろうにわが
ままやな俺も。

「ワシらはお前の倍は生きてるんや。たまには自分を責める前に親
に当たってみい。いくらでも受け止めたる。あんまり不尽なもんや
と怒るが、自分でどうにも出来なくなった時は頼ればいいんや。頼
ることは悪いこととちゃうぞ」

親父の口調はいつもに比べて優しい感じやった。
思わず素直にうなずいてしもうたわ。

頼ることを悪いことやとは思ったことないけど、ええことやと思
ってへんかったな。

これで全てが解決できるわけとちゃうけど、それでも心になんか暖
かいもんができたような気がしてん。

そのすぐ後やった。

隣で寝ていた和葉が目を覚ましたんは。

開口一番、

「平次は大丈夫なん？」

…… なんか、あそこで死ぬ気やったのが申し訳なくなってくるわ。

オカンが駆け寄って「あのアホは隣で元気にしているで」って言うてた。

アホってなんや、アホって。

まあ死ぬ気でおったんやからアホには違いないか。

俺や和葉の容態を確認してからオカンが「和葉ちゃん、お父さんに目え覚ましたこと伝えてくるな」って言うて部屋を出ようとすると、親父も組織関連の始末でもう行かなんとか言うて二人で仲良く出て行きよった。

…… 変な氣い使いよって、親父もオカンも。

二人が出て行くと、和葉がベッドから降りてこっちに近づいてきた。心配そうに、寝ている俺を見て

「首、大丈夫なん？ やっぱ痛い？」

「痛ないと言えば嘘になるけど命に別状は無いそうや。ちょお貧血氣味やけどな」

そらあんだけ血い流したら足らんようになるわな。
今もまだ少し頭くらくらするし。

でも和葉はその言葉聞いて心の底から安心したような顔を見せる。

「お前こそ大丈夫なんか？」

「うん、アタシは煙を少し吸っただけやし。寝たらもうすっきりしたわ」

笑いかけた和葉の手の甲には小さな火傷があっただけど。
その怪我は俺を助けるためにつけた傷やねんな。

神妙な顔つきで手の甲見つめる視線に気づいた和葉は、それを隠すことなく俺の右手のそばに置く。
俺の右手の甲にも美國島でこいつにつけられた傷がある。
……これも助けようとしてつけられた傷や。

「おそろいやな。これであのときの借り返せたわ」

そう言って満足そうににっこりと笑いよった。

手の甲の傷てまたなんか変なおそろいやな。

でもその言葉ですまなく思ってた俺の心はなんか軽くなった。

俺も和葉に「そやな」って返してふと視線を和葉の背中越しにある窓に向けると、遅咲きの桜の花が舞っていたんや。

東京に来た時も、工藤のオトンに正体聞かれた時もそういえばこの桜はずっと咲いとった。
流石にもう散りかけやけど、日の出の光に反射して薄紅色の花びらが綺麗に舞っておる。

「そつや、和葉」

「何？」

何の他意も無く自然と言葉が口をついた。

「来年もまた、桜見に行こか」

「……うん！」

嬉しそうに涙を浮かべて頷きよった。

言うてから気付いたけど、俺から次の年の花見誘うの初めてやな。
去年も約束してきたのあいつのほうからやったし。

でもお前が言っただからやで。

ずっとこれから俺と生きていきたいって。

俺もそう思っわ、和葉。

お前となら出来そうな気がする。

ずっとこれからって言われた時にわかったんや。

お前が俺の探し求めてきた存在証明やったんやって。

やから片品さんが言ってたように、どんな暗闇でもお前が側にいればいつか抜け出せる。

……ああ、でももしかしたらもうこんな来年の約束とかいらんのかもな。

だってこれからはずっと一緒におるんやろっ？

ロンドンへ向かうチャーター機の中には、腹心の部下数人とパンドラのボスであるパイカル、つまり厚司が乗っていた。

機内は静まり返っていて、機体の音だけが中に響いている。黒服の男が入り口・出口に控え、医療器具が中に整備されているため辺りはお世辞にも穏やかな光景ではなかった。

そんな中ベルモットが手前に置いたパソコンに目を遣り、隣で特別な寝台の上で寝ている男に報告する。

「ボス、スピリタスは無事に向こうのほうで落ち着いたみたいですわ」

「……そうか」

向こう、とはすなわち警察のこと。

あの子をこのまま組織の終焉まで付き添わせるつもりは無かった。

スピリタスと名づけ、真実を持ち続けて欲しいと願っていたのだ。自分とよく似た状況へ追いやってしまった後悔の念も含めて。

厚司は足止めと称して平次を置いていくことによって、彼を警察にそのまま返そうとした。

彼が日本警察と繋がっていることは知っていたし、厚司の夢を実現させたいという気持ちが本物だということもわかっていた。

だから側近として側に置いていたのである。

平次を仲介させて組織の情報を警察に流す。

それのよって組織の暴走が食い止められるならそれでいいと思っていた。

例えば自分が捕まったとしても。

しかしそれはまだ今ではない。

自分に反旗を翻そうと、虎視眈々と狙っているジン達を始末しない限り捕まるわけには行かないのだ。

それはジンのほうも同じことで、厚司がいなくなればアポトキシンの知識を本格的に持つ研究者がもう組織にはいなくなる。

あの薬を完成するまであの男は自分を生かし続けるだろうと考えている。

一方、隣で控えるベルモットは娘を殺した元凶であるアポトキシンを作った自分を少なからず憎んでいるし、薬を一般人に渡るまで流出させたジン達も憎んでいるだろう。

更に薬の研究を引き継いだ自分の娘、志保のことも憎んでいる。

だがベルモットは自分を殺しはしない。

殺せば反ボス派の人間によって薬が再び世界に蔓延する可能性があるのだ。

このまま、また暫く組織は存在し続ける。

その間にも組織のせいで被害に遭う人間は出続けるだろう。

「……ベルモット」

「なんです？ ボス」

「君は私をいつ殺してくれるんだい」

「……そうですね、銀の弾丸が銃に込められた後で考えますわ」

「そうか」

『将来は、おばあさんのように元気な人がたくさん居られるような薬を作りたいです』

はるか昔に書いた作文にはまだ何も知らない自分の夢が込められていた。
まるで宝箱のような、希望や夢がたくさんつまった薬を作りたいかった。

皮肉にも、宝箱という名の組織に入りはしたがその中には夢は無かったのかもしれない。

厚司はゆっくりと目を閉じ、考えた。

夢も真実も、志保や平次に結果として渡すことはできたのだろうか。

それがわかるのは自分が死んだあともかもしれないが、エレーナとともにそれを見守りたいと願った。

11 (後書き)

あと1話です。

最終話

「もう、暫く連絡できないっていうから心配してたのに、次の日の朝にかけてくるなんて拍子ぬけしちゃったわ」

「悪い悪い。案外早く解決してさ」

コナンは平次の病室を出た後、屋上に行き新一の声で蘭に電話をかけていた。

もちろん屋上には彼以外誰もいない。

明け方近くということもあって外は肌寒く感じられる。

小鳥のさえずりが真下に見える庭から聞こえてきた。

向こうに見える道路にも車はまばらにしか走っていない。

一通り事が終わったので一報入れておこうと思ったのだが、まだ午前五時前だったので彼は電話するのも憚られ代わりにメールを送ったのである。

しかし予想に反して着信音はすぐに鳴った。

どうやら両親の仲が良い感じだったらしく、蘭は嬉しくてあまり寝付けなかったらしい。

「そうそう、服部君が事件で怪我したって知ってる？」

「あ、ああ。どこで知ったんだ？」

「博士から昨日の深夜のうちに電話があったのよ。服部君がお祖父

さんに依頼された事件で

犯人に襲われて負傷したとかで、連絡を受けた和葉ちゃんも急いで病院に行ったんだって。それで、せっかく親と食事してる私に言うのは気が引けるから博士に言付けたって言ってたわよ」

上手い具合に言い訳したものである。

博士の咄嗟の機転にコナンは心の中で感謝した。

コナン自身は事務所の留守電に「博士の家にお泊りします」と入れておいたからいいものの、和葉と平次はそうはいかない。

事務所にはいないし連絡は取れないしで、博士の言い訳が無かったら彼女はえらく心配したことだろう。

恐らく博士は病院に彼らが運ばれた時に、このままではそんな事態になると気付きこっそり蘭に電話したのだ。

コナンのほうも昨日は色々なことがありすぎて、連絡することをすっかり失念していた。

流石に今回は自分も頭が疲れてるようだ。

周囲の様々な気遣いのおかげでまだ何も知らない蘭は、二人を純粹に心配している。

「それで今日の九時過ぎ辺りにでも和葉ちゃんに電話しようと思うんだけど、いいと思う？」

「……いや、俺も連絡来たけどアイツも遠山さんも気疲れして熟睡してるらしいから昼過ぎのほうがいいんじゃないか？ ご両親もお

見舞いに來てるみたいだし」

「そっか。なら大丈夫よね」

今はまだ彼らをそつとしておいたほうがいいと判断したコナンは、蘭にさりげなく遠慮させた。

和葉も目を覚ましたというのは聞いていたが、二人とも自分以上に今回の件については心労が大きかったと思う。どちらかというと今回のコナンは部外者だ。

そして平次や和葉が当事者なのだ。

「ねえ、その片付いた事件っていつも言ってるやつかいな事件のこと？」

蘭は電話越しににじみでる期待を含んだ声でやや躊躇いながらも問いかけた。

新一が今まで「しばらく連絡できないかも」と言ったことはない。なのに今回はわざわざ電話を寄越してきた。

いつもとは違う事件なのだということが彼女にもわかっていたのだ。

新一が帰ってこない原因である事件が解決したのではないか。

蘭がそう考えてもおかしくはない。

そしてその考えは当たっているのだが。

「……そうかもしれない。でも、今回の事件はそのやっかいな件の一部であって全体ではないんだ」

ボスの正体がわかったし、組織の目的もわかった。

でもそれで全てが終わったわけではない。

真実を解き明かしただけで、まだ何も解決していないのだ。

「ホントに悪い。だけど解決しないなんてことは絶対無いから」

心の底からすまなさそうに謝る新一の声が明らかに暗かったのか、蘭がくすりと笑う。

「いいのよ、いつものことなんだから。でも、少しは進んだってことよね？」

「え？」

「だって新一がやっかいな事件で進展状況を話したの初めてじゃない。ということば、少しでも解決の糸口があったんじゃないの？ アンタが完璧主義の凝り性なのは知ってるから、気の済むまでにとんやりなさいよ」

参った。

コナンはしてやられたというように人知れず苦笑する。まだ自分の頭の回転が元通りになっていないにしても、まさか彼女に会話から推理されて確信を突かれるとは。

とことんやれという彼女の言葉は、呆れたような、それでいて優しい激励だった。

「何か、探偵も形無しだな」

「そりゃあアンタの幼馴染十七年やっていますから」

そうやって二人は電話を通して静かに笑いあった。まだ全てが解決したわけではないけど、二人の間には確かに光がある。

「そろそろこっちは日の出の時間よ」

「そうか。まだこっちのほうは暗いけどな」

日本にいと知られるのはまずいので当たり障り無く返事をした。
海外にいるなら今は夜だという設定のほうがいい。

しかし実際は蘭と同じ太陽を眺めているコナンは、その光を見てどこか晴れ晴れとした気分になった。

どんなに暗くてもいつかは光が出る。

今の平次と和葉のように。

彼らにもこの光のような未来が待っていて欲しいと願う。

そして、自分達にも。

「……もしかしたら、そう遠くはないかもしれないなあ」

「え、何が？」

彼女と本当の姿で再会するのはそこまで時間はかからないかもしれない。

今回の一件で事件は随分進展した。

あとは組織壊滅に向けて外堀を埋めていくだけ。

いつの間にか力強い味方がたくさんついていたのだ。
解決から遠ざかるはずが無い。

「じきにわかるよ」

「もー、自分だけわかったようなこと言っちゃって……」

あいまいに答えると蘭がぷう、と頬を膨らましたのが雰囲気かわかった。

子供じみた空気に新一は笑い飛ばす。

そんな中、朝の涼しい風が桜を屋上にまで舞い上がらせた。
光に反射して雪のような白色になる。

彼はつられるように天へと昇る白を見上げた。

平次の存在証明、

和葉の決意、

博士の過去への懺悔、

哀の組織との真の決別、

組織の壊滅……

そう、全ては――

「カウントダウンが始まったってことさ」

日の出とともに、彼らの白き未来は照らし出されていく。

カウントダウン・完

最終話（後書き）

長い間本当にありがとうございました。
カウントダウン本編終了です。

この後2話ほど使いまして、後書きを書かせてもらおうと思います。

後書き：1

本当にこのような長編を読んでいただきありがとうございました！
文字通りものすごく長くなったので、わかりづらい点も出てきたと思います。

なのでちょっとこの場を借りて色々説明させていただきます。

まずは、最終的な人物紹介を。前編15・5で書いたものに付け足しをしました。

江戸川コナン：表の主人公。哀とともに組織を追う。自分の身近に構成員がいると

気付いているが、それは警察関係者だと思っている。
(ある意味当たり)

灰原哀：元構成員。「あの方」の正体をうつすらと気付いていた。

父の手紙を読んで組織に立ち向かう決意を新たにした模様。

工藤優作：息子に代り平次の正体を追求。アメリカで博士と厚司の
発表した論文を

発見し、それがアポトキシンと似た薬だったことを知る。
ここから彼は

厚司を調べ始め結果として平次に行き着くことになる。

赤井秀一：FBIの捜査官。射撃の腕前が抜群。明美が殺された原因が赤井自身にも

あつたため妹の志保に哀と顔を合わすのを避けていた。

ジョディ・スターリング：FBIの捜査官。優作から組織関連のことを質問された。

自分と良く似た境遇を持つ哀を気にかけていた様子。

ジェームズ・ブラック：FBIの捜査官。ジョディの上司。コナンから「警察関係者に

組織の人間がいるのでは」と聞かれ否定しなかった。

大阪府警を警戒していたのかもしれない。

服部平次：裏の主人公。組織構成員。コードネームは世界最強の酒である

「スピリタス」。「あの方」のお気に入りで、側近を務める。

表側の任務は小五郎の近辺、FBIの監視。裏側は組織の動きの把握と

警察への密告。ボスの厚司から絶対的な信頼を寄せられていた。

遠山和葉：コードネームは「ラム」。しかし本人は認めていない模様。

死んだ初代ボス・大黒連太郎の孫で、同じく死んでいる

息子夫婦の実子。

つまり「あのお方の血を引く唯一の人間」。

親の研究を引き継ぐため薬学の勉強はかなりしているらしく、

哀に劣らない程薬学の知識に富む。

ジン：組織構成員で幹部。反ボス派の中心人物。平次のことを完全に信用してはいない。

和葉の出生の秘密も知っていた。ブレイン開発に必要なアポトキシンを完成

させるまでボスを殺す気は無いらしい。

ベルモット：組織構成員。いわずと知れた「あの方のお気に入り」。多分こつちが第一号。娘を死なせたアポトキシンの存在を憎む。

よってそれを研究し続けた宮野一家のことも憎悪の対象となっている。

薬を流出させた反ボス派に対しても敵対心があるため結局組織全体を

壊す気でいるのかもしれない。

ボス（あの方）：組織のトップ。コードネームは「パイカル」。本名・宮野厚司。

自分と良く似た境遇を持つ平次やベルモットを寵愛していた。

志保に関しては娘同様きっぱりと決別している模様。いつか死ぬ日を

覚悟して待っている。

こんな感じでしょうか？

次は伏線の回収です。無理やりな伏線もあれば、上手くいったと思うものまで

様々ですね。無理やりなものに関しては目をつぶってもらいたいです。（苦笑）

前編

*序章での会話が平次と優作だとわかった方はすごいです（笑）

平次に関しては「なぜ秘密を纏っている女を賢いと言ったのか」でぴんと来た方もいるかもしれませんが。しかし、これで相手が優作だと気づいた方はほんとにすごい。

・・・どれくらいいらっしやいます？

・序章：前編10話への伏線

・1話：「いつもいつもあと少しと言うところで手がかりが消える」↓身近に構成員が居る

・2話：厚司の作文↓後編16話の手紙の筆跡、終結11話の「夢」の部分

・5話：杯戸中央病院の桜↓前編10話、終結10話、最終話へのつながり

・10話：「君は一体何者なんだい？」↓後編18話「何も聞かへんかった」

（初めて会った父親が気付いて、なんでいつも会っ息子のお前が気付かないんだ

というある意味八つ当たりの悲しさ)

- ・ 11話：「一体どういうつもりでスピリタスと名づけられたのか」
↓ 終結8話：スピリタスの

語源はスピリット、意識すれば真実

- ・ 12話「人は罰を受ける…」 ↓ 親の死んだ原因がAPTXだから
- ・ 14話：ラムと呼ばれる和葉 ↓ 後編10話へ
- ・ 15話「逃走中の構成員が一人撃たれている」 ↓ 後編
- ・ 15話「そろそろ子守りは終わり」

↓ 平次がコナンを殺そうというのではなく、組織の暴走によつてFBIやCIAが動き

自分がコナンの側に居られなくなるかも知れないという予感

- ・ 15話「どんなに信じられなくてもそれが真相」 ↓ 平次が構成員だという驚愕の真実

後編

- ・ 序章：平次の右目の大きな眼帯 ↓ 終結5話：爆発事故による失明とAPTXの投与

- ・ 序章「来年も一緒に来ような」 ↓ 終結10話「来年もまた、桜見に行こか」

- ・ 1話：平次の祖父の存在

- ・ 1話：美國島の名簿 ↓ 元官房長官・大黒連太郎の記帳

- ・ 2話「知らないわ、会った事が無いもの」 ↓ 確かに哀は父に会った事が無い

- ・ 2話：何故か博士が驚いたような顔を見せた ↓ 初代の存在を哀が言ったから

- ・ 2話「毒薬を作ってるつもりはなかった」 ↓ 作っていたのは障害を持った人間を救う薬

・ 3 話「あの薬の研究、消滅させたくないんやろ？」

↓親の意思を継ぎ和葉がA P T Xを完成させたいと願っている

・ 3 話「それが2人で交わす最後の会話になるかもしれないとは知らずに」

↓平次が死ぬかもしれないというミスリード

・ 4 話「ところで遠山刑事部長は今日はいらつしやらないんですか」

↓和葉の養女疑惑を聞きたかったから

・ 4 話「・・・あいつは今別件で出ておりますわ」↓東京に居た

・ 5 話「あの人の人脈を使えば、公安を動かすことも出来ます」

↓S A T突入への伏線

・ 5 話「まだあいつの最初の事件は解決しとらんのですから」↓終結8話へ

・ 7 話「ただ、とても悲しいものが迫ってきているような気がしていた」↓平次死亡フラグ

・ 8 話「ある戸惑い」↓16話へ

・ 9 話「役割が無くても勝手に追いかけてちゃうんだから」「もうアイツを一人にはさせないの」

↓27話「あなたを一人にはさせない」

・ 10 話「16年前・・・」↓哀が生まれて数年後なので厚司の可能性もあるという確信

・ 10 話「・・・でも、あまり思いつめないでね」↓19話へ

・ 11 話「なら、あんまり目立った行動は当分せんほうが身の為やろうな」

↓暗殺を食い止めるための提言

・ 11 話「ちらりと彼に視線を向けた、ボスを除いて」↓ボスは平次の意図を知っていた

・ 19 話「どうも宮野姉妹は銀の弾丸に惹かれる傾向がある」↓赤井と明美の関係

・ 19 話「視線の先には時計やベッドやパソコン、その他諸々」

↓これは時計を見ている。SATを待っているから

・20話「まだsonだけしか経ってへんのかいな・・・」↓SAT
が到着しないことへの焦り

・21話「あいつはさ、俺にとって蘭と同じだったんだよ」

↓25話「蘭とお前が待っていなかったら元に戻る意味が
無い」

・23話「工藤新一、宮野明美両名の殺害容疑で逮捕する」↓終結
7話へ

・24話「そいつは絶対死なせたらあかん!!」↓終結7話へ

・25話「そして同時にフラッシュバックが襲う。あの絶望の記憶
が蘇る」↓終結5話へ

・28話「最後の最後に銃剣という名にふさわしい使い方をして」
↓32話銃剣でジンの右腕を切断

・28話：携帯の紛失↓31話にて和葉が平次を見つけろきっかけ
となる

・28話「私はずっと平次とこれからを生きたいの!!!」↓終結
10話へ

・32話「まだあの方に死んでもらうわけにはいかないからな」↓
終結11話へ

タイトル：カウントダウン↓最終話「カウントダウンが始まったっ
てことさ」

ざっと数えただけで45個ありました：ここまできたらアホです、
ええ。

「カウントダウン」というタイトルの回収が最終話でできたことで
もう思い残すことは

ありません。・・・多分。（これから文法直します；）

あと、自分の他の投稿作品からも色々ネタを引っ張ってききましたが、それについての説明は

割愛します。気づいた方だけニヤリしてもらえれば・・・

さて、次の投稿でやっと本当の意味での後書きを書かせてもらいます。

つまり本当に最後です。完結です。（涙）

今夜以降の投稿となるので、それまでに質問や「ここどついうこと？」みたいな疑問があれば

次の更新でお答えさせていただきます。メッセなら期限無しで申し付けておりますが。

こんなオマケだけで2話も使ってしまったてすみません^^；

後書き：2

はい、というわけで本当にこれで終了です。

なんだか胸にぽっかり穴が空いたような気分ですね。

毎日書き続けて2ヶ月ちょっと。よくまああんだけ書いたなあと思います。（笑）

丁寧に書いたせいで、本当は20話弱で終わるつもりがなぜか60話超まで・・・！

実はこれ某サイト様の「コナンファンに謎の100のお題」にある54題目・カウントダウンから始まったものなんです。

まさか一つのお題でこんな長編になるとは思いませんでした。

他の短編や連載も本をただせばこの100題からイメージしたものです。

色々ネットに出したの中から無難なもの（！？）を選んでこちらに

投稿させてもらっています。

ちなみに一番この話で反応があったのは、

「平次は組織の人間か？」

これはコミックス42巻以降から某掲示板でもじわじわ出てきた疑惑でした。

私自身は34巻の「あんた何者や？」でちょっとばかり疑っててもいいのですが…

24巻で阿笠博士のボス疑惑が出てきたのに対して、平次の構成員

疑惑は42巻が発端です。

幽霊船の計画を組織に知らせることができたのは状況を見る限り博士か平次か園子（爆）なのは間違いないと思います。

でもこれも普通にスルーされそうな気がしなくも無いような。

まあ構成員では無いのに越したことはありません。

しかしここで平次を構成員にするなら親はどうするかという問題が発生します。

あの両親に隠して構成員にはなれないだろうと。勿論和葉にも。

では両親が了承しながら組織に入る状況と云ったらどんな理由を作ればいいのか？という

ところから平次の過去は作りました。

平次に高1の話がまだ無いのも確かですし、右側ばかり怪我するのも事実でしたから

そこに着目してあーだこーだと考えてあんな暗いものになってしまいました；

水無&本堂関連、七つの子は更にややこしいことになるのではっさり割愛です。（謝）

ちなみにこの「カウントダウン」の平次は悪でもなければ黒でもありません。

悪、又は黒の中にただけあつて染まっただけというのが私の見解です。

これは和葉にも言えることです。

彼らは人を不幸にするような行いはいたしておりません。

そして構成に関してですが、この話を作る上でまず年表を作ったりしてました。（笑）

大黒連太郎が組織を作ったところから、今のカウントダウンの10年後までを

年表として書き出し、それを見ながら話を構成。

あの年表無かったら最後らへんはもうややこしすぎて書けませんでしたね；

連載をするにあたって、ポリシーとしたものがあります。それは、

- ・平次を女々しくさせない
- ・和葉をオマケ扱いさせない
- ・どのキャラも可哀想なだけでは終わらせない
- ・オリキャラを出さない（平次の祖父はギリギリ公式）

・・・です。特に平次と和葉に関しては絶対これだけは守ろうと思ったのですが、

どうも最後のほうやっぱり女々しくなっちゃったような気がします。

和葉をオマケにさせないために、「あのお方の血を引く唯一の人間」としたわけです。

最も読者数が多かった回の一つである、平次がものすごく紛らわしい気の失い方（笑）

をする場面に関しては本当に死なそうかとも考えた時期もあります。連載するまでは非常に悩んだところです。

ちなみに平次を死なす場合、あのまま和葉も彼の亡骸を抱えて共に死ぬ予定でした。

しかしどんなキャラも悲劇だけにはしないという前提があったので、

というより死んでも誰も喜ばんだろうと。（そりゃそうだ）
私自身も平和が死んだら嫌ですしね。
なので生かすことになった次第であります。

つまり、最初からこの話は明るい感じで終わる予定だったということとです。

恐らく一番急展開だった前編10話の後書きに、いつもなら書かないBGMをわざわざ書きました。

愛内里菜の「DELIGHT」。同名のアルバムに収録されている曲です。

最初のイントロのほうはなんとなくシリアスでカッコイイ感じなんです、

後からだんだん明るくなっていく。「僕らのDELIGHT」っていうフレーズがこの話全体を

表しているんですね。

前編10話のBGM記載はある意味一番のネタバレだったのかもかもしれません。

「このBGMのように、始めのうちは暗いけれど最後は絶対明るく終わらせます」という

暗黙の合図。ものすごく独りよがりな考えですけどね；

あとついでに執筆中聞いていた音楽は

- ・コブクロ「ALL SINGLE BEST」
- ・ガンダム種運命ベストアルバム（！？）
- ・倉木麻衣ベストアルバム
- ・Def Tech「CATCH THE WAVE」
- ・名探偵コナンベスト1&2
- ・B・zベスト

見事にベストアルバムばかり。後編の建物崩壊辺りはやはり

種運命聞くとノリノリで書けました。（笑）

あともう一つ余談ついでに。

私個人の考えとして、「美に美を重ねても美しくはならない」というものがあります。

主役が苦悩する場面というのは客観的に見てカッコイイ場合もありますが、

それをカッコイイだけにしまつては薄っぺらいと思うんです。

（あくまで私個人の意見ですが）

だから平次も組織構成員として悪役っぽいカッコよさを出す反面、人間らしい悩みも出して、深みを出そうとしました。

でもできたかどうかはわかりません。（汗）

これはコナンも同様です。

彼も完璧超人ではないのですから、ミスもします。

それがこの場合「平次に何も聞かなかった」ことであり、その後自分が周囲を見てるつもりで

見ていなかったというネタに繋がります。

終結での平和の会話は気付かれた方も多いかと思われませんが、

迷宮の十字路の「time after time」花舞う街で」の歌詞からイメージしてます。

あの歌詞、一見すると平次から和葉への思いのように見えるんですがこのカウントダウンだと和葉から平次への思いにも当てはまりますね。

「もしも君に出会えたらもう二度と手は離さない」や「側にいたい今度はずっと」等。

この歌大好きなんで引っ張ってきてしまいました・あと手まり唄も。

話の最後にロンドンを出したことについても少しばかり。

これは我等が作者青山先生が「新蘭のクライマックスはロンドンで」と

どこかで言っていたことから出しました。

ロンドンで新一に戻って蘭と再会するのかなあと。

そして組織の最期もロンドンかしらと。

ボス、ベルモット、ジンの行く末も頭の中にありますが、今はまだ控えさせていただきます。

カウントダウンは自作年表（笑）の中で一番明るい部分かもしれませんが、せん。

過去を辿れば平次の悲劇があるし、未来へ行くと組織の最期があるしで

中々シリアスになっていきます。

今回の話は投稿サイトに載せるということであまりショッキングな描写はしていません。

平次の構成員発覚と死にネタへのミスリード以外は抑えています。

本当はもっと暗くてややこしくてどうしようもない展開もあったんですが

「10代の方たちにこれは見せれないだろう」と思い直し止めました。

大人の方々には少し物足り無かったところもあるかも？

長々と書いてしまいましたが、まだ書きたいことが色々……。ハ

^ ;

ですがここで語るのもどうかと思うのでこの辺で終わらせていただきたいと思います。

また思い出した頃に書くかもしれません。

毎日読んでくださって本当にありがとうございました。

評価も予想以上に頂いて感極まっております。

メッセまで頂いてホントどうしようかしらと。ものすごく嬉しいです。

コメント、メッセ全部レスさせてもらっています。

欲を言えばもっと下さっても構いません。（正直）

最後のほうがわかりづらい点出てきたと思うのでご質問も受け付けます。

もうこんな毎日更新することは当分ありませんが、ちよくちよく投稿させてもらう

つもりです。またよろしかったらお越しくださいませ。

では、本当にありがとうございました。

2006/12/2

yoshina

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0138b/>

カウントダウン

2010年10月9日17時31分発行